
長浜 戦国時代

鳴瀬 弓月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

長浜 戦国時代

【Zコード】

N1247BA

【作者名】

鳴瀬 弓月

【あらすじ】

豊かな自然に恵まれた美しい小国、長浜国。この国独自の制度である“お旗女”候補の朝芽は、修行先での早春の一日、師の求めに応じて泉に向かう。そこでは一人の若き武人が、彼女の目の前で水中に身を沈めていた……。

時は室町・戦国時代。長浜国軍武将にお旗女^{はため}として仕官した“私”こと少女朝芽の、恋と戦場の冒険。

第一章　出会いは冷たい泉の中で（前書き）

この物語は、日本史を参考にしたフィクションです。実在の地名、歴史、人物とは関わりがございませんのでご了承ください。

第一章 出会いは冷たい泉の中で

(1)

つい先日まで豪雪に硬く閉ざされていた杣道そまが、今では柔らかな陽春の息吹に包まれていた。

枝々では小鳥がにぎやかにさえずり合い、風にはじける新芽の香りが心地よい。

深い谷間に鶯ヨシハシがまた、ピピピピピーチ、と鋭く啼いた。

奥山おくやまにも、春は忘れずに訪れてくれる。

長浜国ながはま、華正元年かせい、戦国時代。

山を下りればそこは修羅の業が渦巻く戦乱の巷ちまた。血で血を洗う人の世の荒野。しかしそれを想うには余りに平和で美しい、春の仙郷だった。

山道を上りつめると、田の前の景色が厳しく変わる。

柔らかな新緑の木々は影を潜め、代わって荒々しい山肌が深い谷間に向かって落ち込んでいる。道は細かいガレ場となつて、水墨画のようにそびえたつ険峻な山々を見上げながら、青く沈む谷底田がけて続いている。目的の泉が、すぐそこにあった。

私は、手にした甕を落とさないように持ち直すと、崖の細道を注意して下りて行つた。

この谷の泉で、師の求めに応じて澄んだ水を汲むのが私の仕事である。

透き通った香りのこの深山の泉水は、師が立てる舶来の茶の湯に

最適なのだそうだ。そしてその茶をふるまわれるのは、十里の彼方にある長浜本城からの“お客人”が来る時と決まっていた。

「朝芽、聞いた？ 今日のお客人はお武家様つて噂よ」

社殿を出るとき、親友の水杖みなかづえが興奮した面持ちでささやいてきた。

「それも四人ですって！」

「四人も？」

「どんな方かしら。私たち、お田にとまれるかしら？」

愛らしい頬に手を当てて、水杖がうつとりとつぶやく。

私は、そんな親友のしぐさに思わず微笑みながらも言った。

「あまり期待しちゃだめよ、水杖。この社には五十名もの旗女候補はためがいるのよ。お役をいただくには、まずはお師様のご推挙が必要だし……」

それに、と後の言葉を心でつぶやく。

私たちの一生がかかってくるのよ。

そう言つ代わりに「行つてくるね」と声をかけ、少しショボンとした友の顔を気にしながらも、私はいつもの山道を歩き出したのだった。

長浜は、日の本有数の巨大な湖水に面した小国だ。気候は温暖、風土は豊かで、道行く人々の顔も明るい。湖から上がる新鮮な魚介類と肥沃な土地に実る農作物は、“万年豊作国”の名にふさわしい潤いを下々の生活にまでもたらしている。

豊かさの元はそれだけではない。

長浜国守護、土岐氏ときは代々名君の家柄で、現領主、土岐定照さだてる様もまた、仁愛の心根優れたお方よと、専らの評判だった。

自ら城を出ては農村に交わり、親しく治水や収穫の悩みを聞きと

つては年貢に反映させ、苦しむ民草を少しでも減らそうと奮闘している。

また政治や軍学にも詳しく、おそばを固める「家老衆も、みな、名づての逸材ばかりであった。

沃土に加えて京師に近い交易の要衝。近隣諸国がこれほど“おいしい領地”を見逃すはずはない。

小国であるのが更に食指をそそるのか、甲兵の波はこの名君の美しい国にも容赦なく押し寄せていた。国境付近では今もなお戦鬪が続き、近隣国主の悪意をくんだ浪人たちが、夜盗や山賊となつて街道の平和を脅かしていた。

しかし、長浜国はびくともしなかつた。

肥沃な土地と名君に育てられ、代々続く優れた武人たちを将と仰ぎ、誇りと忠誠心を強く持つた長浜軍は、すさまじく強かつたのである。彼らは一丸となつて愛する國土を守りつゝ、押し寄せる世の波にあらがつた。そして多くの戦場で、美談や武勇伝と共に勝鬪を上げた。

それは、今も続いていた。

昨年の秋、私は親友の水村と共に故郷を出て、深山靈峰のふもとにある觀滝社殿^{みたきしゃでん}…武人お旗女養成所^{はため}…に奉公に上がつたのだった。お旗女とは、長浜軍武将専属の侍女の総称で、軍當における武人たちの日常の世話をうけたまわる。勿論戦場にも同行し、本陣にて主のお世話をつききりで行うため、時には命を投げ出す覚悟も必要となる。そのため、お旗女と主の武人の間には、強い信頼関係がなによりも不可欠だつた。

良き相性の主にお仕え出来るか、それが私たちお旗女の人生を決めると言つても過言ではない。

深山靈峰のふもとで日々の厳しい訓練に耐え、一通りの武術と儀式作法をたしなみ、一人前と認められると初めてお旗女候補として

名前が本城に送られる。その後は社殿の師のかたわら近く仕えながら、主となるべき運命の武人に選ばれる時を待つ日々だった。

私も、水杖も、すでに候補としての名乗りはすませていた。

どちらかが…運が良ければ両方が…いつ選ばれても不思議はない。覚悟はすでに決めていた。

だけど私は水杖ほど今日の『』使者に関心を持つことができなかつた。むしろ、客人がただの、いつもの『』城主様の時候のお使者であつてほしいと願っていた。

私は、怖いのかもしれない。

「いやね、こんなことを考へるなんて」
我知らず思いを口に出し、ハッとあたりを見回す。誰もいない深山の崖道であることを思い出し、ほつと安堵の息をつく。

「さあ、早く戻らなくちゃ！」

氣を取り直し、足を踏み出した私は、目的の泉の方を見て思わず息をのんだ。

誰かが水の中に入っている。

一目で武人だと解った。こがね色の胴巻鎧に篠小手の軽装。歳は若い……私より少し上と言つたところか。青ざめた顔で水中を見つめ、そのままざぶざぶと泉の中へと入っていく。

入水自殺だ！

「あつ……だめ……っ！」

思わず叫んで、私は駆け出した。足元で砂が崩れて滑りそうになる。何度も転びかけては体を立てなおし、私は必死で崖を駆け降りた。

滑り込むようにして泉のほとりの砂地に駆け込み、甕を……それで

もそつと下ろす理性はまだ残っていた……地面に寝かすと、泉の中に飛び込んで行く。

冷たい。

陽春とはいえ、深山の谷間にこうじこうじと湧き出る泉水は、足がちぎれるほどに冷たかった。

それでもためらう暇はなかつた。見る間に腰、胸と上がる泉水を搔き分け、わらじに付いた埃で澄んだ水が濁るのもかまわず、彼方の人影に突進する。

泉の人影は止まらない。もう肩までの深さまで進んでいた。栗色の髪が顔の半分を隠すくらいにうつむいて、思いつめた様子で両腕を水の中に入れている。今にも顔をつけて沈んでしまいそうだ。私の全身に鳥肌が立つた。

「死んじゃ駄目えーーー！」

夢中で叫びながら水面をたたく。深みにはまり、思つようにな足が進まない。

人影がはじかれたように顔を上げた……と思つた瞬間、足が滑つて、私は泉の中に倒れ込んだ。

「バシャン！」と派手な音が聞こえ、一気に視界が青くなる。頭の先までしびれるような冷たさだ。あわてもがくが、社衣が体中に巻きついてうまくいかない。溺れる、と思った瞬間、力強い腕が私の腰に回り、ぐいっと水の中から引き揚げてくれた。

「おーおい、大丈夫か！」

びっくりしたような声が聞こえた。激しくせき込む私の顔が水につからないよう、たくましい腕がしっかりと支えてくれている。私はそのまま抱えられるようにして、泉のほとりへと戻ってきた。

「あ…ありがとうございます」

殆ど引きずり上げられるようにして、泉のほとりの草地に這いあがつた私は、喘ぎながら頭を下げる。

「苦しくないか。水は飲んでないか？」

肩で息をする私の側にしゃがみこんだ相手は、心配そうにのぞきこんだ。彫りの深い顔。すっと通った鼻筋。細身の長身、日に焼けているがきめ細かい素肌の持ち主で、一瞬はかなげな印象も受けるが、意志の強そうな顎の線や、鎧の上からも解る引き締まつた体躯を持つ、堂々とした武人だつた。

涼やかな瞳が、真っ向から私を見つめる。一度に頬が熱くなつた。

「大丈夫です……」

「寒いだろ。何か着る物を……」

そう言つて立ち上がつた黄金色の鎧が、日の光に反射してきらりと光つた。

そこからも途切れることなく泉水が滴り落ちている。

その瞬間、私はなぜ自分がこんなことになつたのかを、鮮烈に思い出した。

「あっ、あのっ、」

あわてて後ろ姿に声をかける。

「お助け下さり、ありがとうございます。でも、あなた様が死んではなりません！ 入水だけはおやめ下さい。私、あなたが水の中に入るのを見て、それで、つい……」

言葉が途切れる。

相手は、真ん丸な目をして振り向いていた。

「入水？ 僕が？」

「違うの？」

「……。」

沈黙……。

次の瞬間、若き武人は、腹を抱えて大爆笑した！！

はじけるように笑う相手を呆然と見つめる私の上に、突然大音声が降ってきた。

「コラアーッ、凌介！！ いつまで水遊びしてんだお前はよおツ！」

早く行かねえと日が暮れちまわあ！」

仰天して空を見上げると、はるか高い山肌の岩場に、今一人の武人が仁王立ちになつてこちらを見下ろしているのが見えた。目の前の青年とは対照的な、深紅の戦服の、派手ないでたちの若者である。頭を振り立てて喚くたび、そこに豪快に巻かれた華やかな鉢金が、

ぶんぶんと鮮やかな尾を引いている。

「おう！ 影芳か！ すまん！」

叫び返した黄金色の鎧が、ハツとしたように私を見る。

「すまないが、これから主命で急ぐところがある。びしょぬれの君を置いていくのは気が引けるが……」

「大丈夫です。一人で帰れますから」

申し訳なさそうな相手の言葉をやんわりと遮る。これ以上心配をかけてはという思いもあつた。

「そうか。気をつけてな」

私が微笑むと、青年も、笑顔になつた。笑うとともに魅力的な表情になる。思わず心臓が高く鳴った。

「あ、ちょっと待つてる。」

言つや否や、彼は跳ね起きるように振り向くと、はるか高い人影に向かつて大声で怒鳴つた。

「影！ 荷の中に单衣があつただろッ！ 投げてくれッ！」

「なんだと？？ 这は先方への土産にと備中殿が…」

「いいんだよ！ 箕笥に着せるために持つていつてもしじうがねえつて！ 早く寄越せ！」

渋々、といった感じで、美しい包みが投げ落とされる。器用にそ

れを受け取つた若者は、私の元に駆けてくると、

「これ、着なよ」

そつと手渡してくれた。

戸惑う私ににっこり笑うと、そのまま踵きびすを返し、見る間に崖道を駆け上がっていく。重い鎧から零が散るたび、黄金色の光が空に散つた。その姿が美しいほど軽々と岩を伝つて友人の元へ駆け上がる。と、二人はそのまま崖道にいた馬に飛び乗り、鮮やかな手綱さばきで駆け去つて行った。

午後の斜陽を雲が遮り、谷間にさつと影がさした。私は急に一人になつた寒々しさを感じながら、急いで体を起こした。凌介と呼ばれた黄金鎧の青年の笑顔が温かくよみがえり、また頬が熱くなる。入水じやなかつた安堵もあつた。じゃあなぜあるのうなところに？ 何をしていたの？ 出来れば、理由も聞いてみたかつたけど、それにしても、止めに入った私が逆に助けられたなんて、あまりに格好がつかないわ……。

取りとめのないことを思いながら、頂いた包みをそつと開くと、中にはとても美しい翡翠色の着物が入つていた。

思わず感嘆の声を上げる。すぐに手を通すと、まるで羽根のように軽く、ふんわりとした着心地が、春風のように暖かだつた。

いつもの時刻より大幅に遅れて社殿に帰り着くと、門の前で親友の水杖みなづえが、心配そうに迎えてくれた。

「いったいどこへ行つていたの？ 心配したんだから！ お師様も気がかりそうにさつきまで覗いていらしたけど、ちょうど今お客人が来て……」

ああ、間に合わなかつたのだ。これでも思いきり山道を駆け戻つてきたのだけれど。

社殿では、定められたものしか着衣が許されない。硬い社衣に着替え、髪を整えていたため遅くなってしまったのだ。

あの美しい翡翠の着物は、あたたかな思いと共に部屋の文机においてきた。凌介と呼ばれた青年の、屈託のない素敵な笑顔。私を抱え上げてくれた腕の力強さ。思い返すたびに、まだ頬が熱くなる。

主命によるお使いの途中と言つていた。あのもう一人の若者も同様、いざれ長浜軍の武人の一人だらう。私がお旗女として戦場に出る身ともなれば、いつかまた会うこともかなうのだろうか。

「じ泉水、間に合わずに申し訳なかつたわ。お師様はお怒りかしら。」

「沸き起る思いを振り払つようにつぶやく。もう考えちゃいけない。もう思い出してはいけない。

一度と会うことはない。熱い思いを冷たくねじ伏せる。

「バカね、茶の湯よりも朝芽あさめの方が大事に決まつてゐるじゃない。無事帰つてきたと解れば笑つて迎えてくださるわよ」

ほつとしたように笑う水杖の存在を、私はありがたく思つた。この友がいなければ、そして厳しくも温かく見守つてくれている師の存在なくしては、とてもここまで苦しい修練の日々を切り抜けられなかつたと思う。

その彼女が、不意に声をひそめた。

「それでね、来たわよ」

「え？」

「お武家さまが四人。」

「そう……」

「控え所は大騒ぎよ。一度に四人もお旗女はために上^はがるのは、初めてですって。四人の中には、いかにも恐ろしげな髭の親父もいたつていうけど、構つものですか。ああ、いいわね。私も選ばれないかしら！」

水杖は、華やかな長浜のお城や、交易も盛んな城下町を訪れることに、常々憧れていた。城勤めともなれば、その思いもかなう。過

去には召された武人に可愛がられて、ついにその妻の座を射止めた幸運なお旗女もいたと言つ。身寄りもなく、帰る家もない私たちにとって、新しい居場所を夢見るのは『ぐく当然のことだらう。

そつは解つても、私はやはり、心の臓をギュッと掴まれたような強張りをほどくことができなかつた。

御指名から完全に外れるまでは…

「一緒に、いけるといいわね！」

水杖が、私の思いとは対照的な、屈託のない笑顔を向けてきたとき、澄んだ鐘の音が社殿に響き渡つた。

「お召しだわ。決まったのよ！ もあ、早く大広間に行きましょう！」

水杖が興奮したように言つて私の手を引き、美しく掃き清められた社殿の内庭を走りだした。

(3)

七十畳はあるうかと思われる広々とした大広間が、水を打つたよう静まり返つていた。

五十名からの、お旗女候補の女性たちが、美しくそろつて叩頭している。私も水杖も、緊張した面持ちのまま、低く頭を畳に下げて、運命が決まる瞬間を今か今かと待ち続けていた。

辺りはしわぶき一つ、衣擦れの音ひとつ聞こえない。ぴたり、と固まつた静寂が、あたりを支配している。

庭でさえずる小鳥の声が、まるで切り離された世界から聞こえてくるようだ。

またひとつ、澄んだ音で鐘が鳴つた。

その瞬間、ふすまが開いて、私たちの老師を先頭に、四人の厳めしい鎧姿の武人が入ってきた。もちろん顔を上げるわけにはいかな

いので、過去の経験からの推察である。

着座の気配。部屋の空気が、ピーンと張り詰める。

老師の、穏やかだがよく通る声がした。

「此度、守護職士岐定照様のお達しにより、武人お旗女の選別の運びと相成った。ただいまより四名の名を申す。呼ばれた者は、迅く隣室へまいりませい。」

すぐ隣で、水杖がかすかに身じろぎした。彼女の緊張も最高潮に達している。

「水杖」

「ハイツ」

親友の絞り出すような声がした。

選ばれた。すごい。良かつたね、水杖！

思わずこみ上げるものを感じしめた時、老師の声が厳しく呼んだ。

「朝芽」

ハイツ、ヒ、反射的に声が出た。修練のたまものである。しかし私の魂は衝撃で消えそうになっていた。

選ばれた……？ 私が……！？

「……以上四名。速やかに参れ」

老師の姿が消えると同時に、広間にざわめきがわきおこった。緊張が一度に緩む中、私はうつむいたまま汗だくになつて固まつていた。後の一人がだれだったのか、それすら頭に残っていない。

「行こう、朝芽！」

水杖が私の腕をつかむ。はしゃいでいるのかと思いきや、その顔は意外にも厳肅だった。いざ呼ばれ、任の重さを改めて実感したのかもしれない。私は茫然と、されるがままに立ち上がった。

「朝芽でござります。まかり越しました」

挨拶に答えて、老師の声が呼んだ。私はこわばる手を励ましながら、ふすまを開けた。作法通りに、下座に控える。水杖も、別の部

屋でじきじきしながら待つてゐるはずだ。これから各自の部屋で、新しい主との対面が行われる。

老師は、窓辺に佇んでいた。逆光で、表情はよく見えない。しかし、いつもと変わらぬ穏やかなそのたたずまいが、私の緊張を解きほぐし、心の震えを止めてくれた。

部屋には西日が差しこみ、窓の外には鮮やかな山の夕暮れが見えた。残照を受けて、山々が黄金色に燃えている。それは、昼間の青年の鎧から散つた、金色の雫を思い出させた。鳥がねぐらに帰つていぐ。奥の深い谷ではすでに、夜の帳を迎えていた。

半年をかけて見慣れてきたこの奥山の美しい景観も、今日が見おさめになる。お旗女に選ばれた者は、その主と共に速やかに社殿を出なければならない。これはもう、例外のない掟であった。

「朝芽。泉からは無事戻つたか。」

老師の声に私は小さく頷いた。親とも思いお仕えしてきたこの恩師とも、別れの時が近づいて來たのだ。不意に寂しさがこみあげて来る。

「今まで、良く勵んでくれた。此度の選では、真っ先にそなたの顔が浮かんでおつた。そなたの主は、わしが選んだ。良き運命の出会いとならんことを祈つておる。……健やかにな。」

「お師様も……どうか、おからだ大事に……」

不意に感情があふれ出し、視界が涙でかすむ。老師は少し頷き、すっと姿勢をただすと静かに部屋を出て行つた。

この瞬間、私は老師の元を離れ、長浜軍武将専属の正式なお旗女となつたのである。

自分の主がどのような武人なのか、それは今は問題ではなかつた。どんな未来が待つていようと、命をかけてお仕えする。それが私の運命なのだ。

心が引き締まる。今までの不安がうそのように消えていく。

私は新しい未来へ踏み出すその瞬間を、ただひたすら待ちうけて

いた。

ふすまが開いた。

いよいよ対面の時が来たのだ。

私はその場に膝をつき、主を迎える礼をとつた。

「やあ、君が新しい侍女頭だね。よろしく頼む。」

声を聞いた瞬間、私は愕然と目を見開いた。

そこには、同じく目を丸くして絶句する、あの黄金色の鎧の青年が立っていたのだった。

続く

第一章 旅立ちの刻（とき）

（1）

沈黙の部屋を、タガラスの鳴き声が鋭く渡つて行った。
呆然と見つめあう二人の影が、長く微動だにせず伸びている。
泉で私の心に強烈な印象を残して去つた、黄金鎧のたくましい若武者。

もう、一度と会つことはないと思つていた。
それが今、お仕えすべき主として目の前に立つてゐる。
向こうも仰天したようだ。軽快に話しかけてきたのが一転、口を開いたまま絶句している。

しかし、その沈黙は長くは続かなかつた。
相手の顔があまりに驚いていたので、私は思わず微笑んでしまつたのだ。

『そなたの相手は、わしが選んだ』
老師の声がよみがえる。
運命。数奇な運命。

はじけるように、相手からも笑みがこぼれた。

「……君だったのか」
ひとしきり明るい笑い声が続いた後、青年は屈託なく話しかけてきた。あの魅力的な笑顔がまた現れて、心が温かく解きほぐされていく。

「朝芽と申します。以後、よろしくお導きを」
「いい名だな、朝芽。俺は出石凌介。いじしりょうすけ長浜軍長柄足輕一番隊隊長だ。
高砂備中守様の差配下にいる。普段は天櫻城で、長柄隊の調練を担

当している。」

長柄隊は、長槍部隊だ。守攻の中核を担う強力な中堅軍である。天櫻城は、領主様のいる長浜本城から南東五里のところにある平山城で、御城下を見下ろす小高い丘の上にあり、一の砦とも言われている。

何度も頭に叩き込んだ情報を引き出す。私の仕事は、すでに始まっていた。

「はは、いいや。最初からそんなに飛ばすなって。俺もお旗女さんを置くのは初めてなんだ。お互い、ゆっくり慣れていけばいいさ」「かしこまりました、出石様」

「俺のこと」は凌介と呼んでくれ。だが日付の前では『隊長』だ

「はい」

落ち着いた声音。良く透る低い声だった。浮き足立つていた私の心が、よみやぐこの現実に追いついてきた。

「凌介様」

「ん？」

「あの時、どうして泉におられたのですか？」

思い切って尋ねる。出会いのきっかけに感謝しつつも、疑問だけがずっと残っていたのだ。

「ああ、あれは……」

相手は恥ずかしそうに口元をほじりぱせると、ちょっと下を向いていたが、

「……落としちまつてさ」

「えつ」

「俺たちの上役、高砂備中様の御免状……社殿に入る許可証みたいなものだが、影芳の奴が見たいと言うから、鞍の上から投げたんだよ。それが手元が狂つてあの泉にどぼん。」

ああ、それであんなに深刻な顔で、泉の中を見つめていたのか。

「参ったぜ。なんせこっちは初参者だ。追い返されではと真っ青になつてね。幸い、老師殿が俺たちのことを覚えていてくれて……影芳はある風体だからな……それで無事社殿に入れたわけ。」

免状は結局見つからなかつたそうだが、結果良しと言つことや、と凌介様は明るく笑つた。

「朝芽が飛び込んできたときは、本当に驚いたよ。叫び声と共に姿が見えなくなつて、あつ、まづい溺れたかつて、夢中で引き揚げたんだ。まさか俺の入水を心配していたとはね。……あれから大丈夫だつたのか？ 急いでいたとはいえ、一人残して、すまなかつたな。」

「いたわるようなまなざしに、思わず頭を伏せる。きつと、ずっと心配してくださつていたのだろう。」

初めて出会つた印象は間違いではなかつた。優しく、たくましい武人。私にとって、これ以上の主の君があるだろうか。老師様は私にとって最高の主を選んでくださつたのだ。少々内氣で、思い込むことも多い私の性格をよく見ていて下さつたのだ。

「さてと。」

何か張り詰めていたものを吐き出すようにして、凌介様は私を見つめた。

「行こうか、朝芽。」

私はしつかりと視線を返し、大きく頷いたのだった。

「朝芽……！」

身支度を整えるため、しばし凌介様と別れて部屋に戻つてきた私を迎えたのは、顔をゆがめた水杖みなかづえの姿だつた。

「ど、どうしたの、水杖！？」

「私の主の君が……っ」

半泣きで口走るのをなだめつつ、ようやく話を聞きますと、奇しくも彼女の主の君は、凌介様と共にいた、あの華やかな武将に決まつたらしい。

名前は真咲影芳。まさき かげよし。派手ないでたちや猛々しいしゃべり方から推し量られるように、性格も剛胆で荒々しく、陣屋では“烈火将”の異名を持つと言ひ。

「朝芽の主様は“流水の出石”じょうしきのいりいしと呼ばれているんですって。出石様は冷静沈着、反対に影芳さまは大胆豪放で、部下にもかなり容赦のないお方ですって。どうしよう朝芽、私毎日怒鳴り飛ばされちゃう！」

田にも鮮やかな胴巻姿で堂々と現れた真咲影芳は、まるで百花の王のように見えたと言ひ。しかし、この君ならとときめいた水杖の期待を思い切り裏切つて、初対面からビシバシしごかれたそうだ。足は速そつだが細すぎる。声が小さい！ 女だからって特別視はしねえ。心してついて来いや！

一人一役の迫真の演技でその時の模様を再現する水杖に、思わず私は笑つてしまつた。

「もう、人が真剣に悩んでるのに！」

そう言つて膨れた水杖だったが、本心では真咲様に惹かれているのが見て取れた。顔色で解る。文句を言いながらも、紅潮した頬や、生き生きと主の君についてしゃべる口元がそれを証明している。

私たち、良い主に巡り合えたのね。

私は心中でそつとその思いを抱きしめた。

真咲様は長柄足軽一一番隊長を務めている。凌介様とは同じ軍務に就くため、私と水杖も同じ足軽長屋に詰めることになる。一度は別れを覚悟した親友と、これからも行動を共に出来る予感が、嬉しかった。

ひとしきり愚痴つて憂さが晴れたのか、水杖は私が荷物をまとめ

るのを手伝いはじめた。

「本は置いていくわね。これはどうする?」

翡翠色の单衣。私は少し迷つたが、結局荷物の中に入れた。主の君からはじめていただいたお着物だから、と。

つづらの中身をまとめていた水杖の手が止まつた。視線の先には、美しい螺鈿の蒔絵箱。中では血のように赤い紅玉が、まるで意志を持つ者のように妖しく輝いている。

「朝芽、これ……」

守り神の証。先祖から連綿と伝えられた、私の唯一の血脈の証。「持つてきただのね。故郷から……」

水杖も、その紅玉が意味するところをよく知つていた。

ふと、不安が胸をよぎる。

凌介様に、いつか、この紅玉をお見せする日が来るのだろうか。私の……いや、お旗女すべてのともいえるある宿命について、語る日が来るのだろうか。

しかし、私は瞬時にその思いを打ち消した。今は、それを想う時ではない。

山上の月が、辺りをじつじつと照らす中、私と水杖は半年を過ごした社殿を後にした。

聖殿に糠ぬかづいた後、社殿奥の老師の居室に向かつて拝礼する。老師の部屋には、まだ灯がともっていた。そこから無言で見送る目があることを、私も水杖も良く解つていた。

社殿の門を出る直前に、もう一度私たちは立ち止まつた。この門をくぐれば、もう一度ここへは帰れない。しかしもうためらいはなかつた。

行つてまいります。

別れの言葉の代わりに、決意をこめて。

深く頭を下げた私たちは、門の外へ、新しい運命に向かつて、迷

わざその一步を踏み出した。

凌介様との待ち合わせは、観滝社殿の東門のそばだつた。天櫛城には、真咲様と連れ立つて帰ると言つ。水杖と共に出発できるのは、とても心強い。月明かりの中に浮かび上がる幻想的な山々眺めながら、私たちは何か荘厳な気持ちで、それぞれの主が来てくれるのを待つていた。

門から一人の武人が出てきたのは、その時だつた。
後ろに、小柄な影を従えている。

私たちには、初めて見る顔だつた。しかし今日、観滝社殿を訪れた四人の武将の一人であることは、容易に想像がつく。

「俺は足軽歩兵第六番隊隊長、岩見 尽四郎だ。お前ら、お旗女の女どもか？」

野卑な声で武将が名乗る。黒い鎧が近づいてくる。嫌な予感がした。

(2)

水杖みなづえが、身構えるのが解つた。

岩見尽四郎と名乗った黒鎧の武人は、わずか数歩で私たちの前に立ちはだかつた。傲慢な腕を組み、舐めるような視線で見下ろしていく。視線が動く。私。水杖。そしてまた私の視線が私の上に止まる。

月が雲に隠れ、また現れた。

月明かりに照らされた目の前の男は、かなりの巨漢だつた。猪首の上に、つるりとした顔が乗つてゐる。それはほとんど無表情だったが、瞳に浮かんだ陰惨な光と、肉厚の口元に浮かんだ寧猛な笑い

が、ある種の凄味を見せていた。私は思わず、半歩下がった。

「お前」

不意に太い指が、ぐつと私の胸元を指した。ぞくり、とその一点に寒気が走る。

「代われ、こいつと」

後方に顎をしゃくる。その時、初めて私は彼の巨体の影にもう一人、小柄な女性がいることに気がついた。

今日選ばれたお旗女のひとりだ。名前は、確か……

「早蕨？」
さわび

水杖が恐る恐る呼びかける。影は、びくり、と肩を震わせて、ますます小さくなつた。

「この女は気に入らぬ。俺は美しい女が好みなのだ」
岩見が早蕨をにらみつけ、吠えるように言った。

「当てつけに、こ奴の細頸、締めてやろうかとも思うたが、替えの女が3人もいるのだ。むざむざ殺すも寝覚めが悪い」

「なん……ですって！」

水杖が鋭く叫んだ。

「命を何だと思っているの！？ 私たちはモノじゃない！ それにお仕えする主も決まってる！ 師の決められたことをないがしろにするの！？ いいえ、あなたののような嫌な男に、だれが従うものですか！ 早蕨、逃げて！ 社殿に戻り早く老師様に……！」

アアツ！ と悲鳴が上がった。いきなり丸太のような暴風が私のそばを通り抜けたと思った瞬間、すぐ横にいた水杖の小柄な体は、向こうの茂みに向かつて思いきり吹っ飛ばされていた。

岩見が殴り飛ばしたのだ！ 低木の茂みに叩きつけられた水杖は、ザザッと葉を撒き散らしながら地面に落ちた。あまりの出来ごとに、私は茫然とその光景を見つめた。しかしそれも一瞬のこと、大切な友達を傷つけられた怒りに、カアツと体中が熱くなる。不意に後ろで気配が動いた。振り向いた私は目を疑つた。縮こまつっていた早蕨が、大きく首をのばしている。そのばさりと垂らした前髪の下には、

信じられない表情が浮かんでいた。

彼女は、呻く水杖を眺めながら、声を立てずに笑っていた。

その瞬間、私の中で何かがはじけ飛んだ。

「よくも水杖を！」

体の底から声が出る。

にやついていた岩見の巨体が、びくつ、と止まる。異形のものを見るよう、私の上に視線を這わせる。

ドクン！

胸がいきなり熱くなつた。袂たもとに隠した紅玉が、私の鼓動に合わせて鳴動する。

いけない！ 心を失つてはいけない……！

私の中で何が叫んでいる。しかし、旅立ちの門出でいきなり晒さらされた暴虐に、私は逆上する自分を止めることができなかつた。

紅玉が、あざ笑うかのように発光する。

岩見が、ぎょっとしたように目を見開いた。私は真っ向からその視線を受け止め、跳ね返した。視界が金色に染まる。今、私の目はきっと輝いている。まるで深山を徘徊する伝説の獣のように。体にすさまじい力があふれ始めた。強い力に引かれるように背筋が伸びる。岩見の表情が凍りついた。信じられぬ！ とでも言いたげに、その目があわただしくまたたかれる。

「朝芽！ 止めてーーーっ！！」

その瞬間、水杖が絶叫した。

その声は灼熱しゃくねつの脳裏に氷の刃のように突き刺さつた。ハツと我に返る。途端に、せり上がりつて来ていたすべての力が、流れ出す汗のようになき消していくのが解つた。

岩見が目をぱちつかせた。時間にすれば、わずか数秒の出来事で

ある。今見た光景は、おそれべ、なにかの錯覚と思ったのだひつ。

「貴様あああ！」

「ひつい腕が私をつかんだ。両腕が万力のよつた力で締め上げられる。

足が宙に浮いた。

岩見は私を、つかんだ腕」と宙に持ち上げ、ぶんぶん揺さぶった。ぐらり、と天地が揺れる。すさまじい力だ。

「ゆすり殺してやる！」

狼狽しかけた自分を糊塗するように、岩見は私を振り回し続けた。月が乱れ飛ぶ。ぐらり、ぐらりとゆがむ視界。

「いい気味」

早蕨の、冷たい声がした。私は半分氣を失っていた。聞き慣れた声がしなければ、そのまま暗黒の淵に沈んでいったことだろ？……。

「お前！」

突然鋭い叫びと共に、ひゅんっと空氣が動いた。途端に両腕が解放されて、私は地面に放り出された。

巨漢の黒い鎧が、勢よく宙に浮くのが、涙でにじんだ視界にちらりと映る。

どおおん！

地響きを立てて岩見が落下した時、私の体は力強い両腕に抱き起こされていた。

「朝芽！　おい朝芽！　しつかりしろ！」

ふらつく頭を振つて目を開ける。ぽつかりと空いた視界に、必死に覗き込んでいる凌介様の白い顔。

ああ、来てくださつたんだ……

「岩見……てめえ、なにしやがんだ！　こんなことされて黙つてられると思つのか！」

凄味を含んだ低い声で、凌介様は前方の闇をにらみつけた。その

先に、ゆらりと立ちあがる岩見の具足姿。

「売られたケンカは買うぜ。こいつの代わりにな。」

氣だるげな別の声が聞こえた。痛む首を曲げると、そこには水杖の主……真咲様が、岩見の背後を突く形で立っていた。薄笑いを浮かべていたが、その体からはすさまじい鬪気が立ち上っている。彼の足元には、水杖が突っ伏していた。

若侍一人に囮まれた岩見尽四郎は、何も言わずに踵を返した。腰を低く落として身構える凌介様の横を、わざとかすめるように通り過ぎると、上目づかいに様子を見ていたお旗女の早蕨を小突いて、闇の中に消えていった。

「なんてこつた

凌介様がふうっと息を吐いて肩を落とす。真咲様はぶせんとした表情で、派手な肩布を裂き、腰筒の清水で濡らしている。二人は待ち合せに遅れたわけではなかつた。ご領主様のこまごました用事を老師様に伝えていた間に、あの妖人ようじんがたまたま私たちに目を付けたらしい。

「しかし俺あ一瞬、ついに倒したかと思つたぜ。あの蹴りはすさまじかつたな」

真咲様が無理やり明るい声を上げる。

「その方が、長浜のお為だつたかもな。」

凌介様が陰気につぶやいた。

目の前で、水杖がしゃくりあげている。私はぎゅっとその手をにぎりしめてうつむいていた。つい先ほどの光景が、何度もよみがえり、思わず唇をかみしめる。凌介様はそんな私をいたわるような目で見ていたけれど、おそらく私の本当の怯えには、気づいていなかつただろう。

あの時、水杖が叫ばなかつたら。

私は、取り返しのつかないことをしていたかもしれない。

「朝芽」

水杖の小さな声がした。ハツと手をにぎりしめる。目の前に、親友の笑顔があつた。まだ涙にぬれた頬。その口が小さく動く。

（大丈夫。誰も気づいてなかつたよ）

私はギュッと両をつぶつた。涙がこみ上げてくる。もうどうしようもなくあふれてくる。その時肩に手がおかれた。そして、凌介様の低い声が、優しく話しかけてきた。

「泣くなよ。もう忘れようぜ」

思わず見上げると、涼やかな瞳がじっと私を見つめてきた。

「武人の世界は、楽園じやない。これからは、もっと非道いことだつてある。それでも俺たちは、進まなくちゃね。あんな小人に、いちいち構つてられるかつて。」

私はうつむき、ぐつと涙をのみ込んだ。温かく広い掌が、ギュッと私の両肩をにぎりしめた。

「俺の部下は、俺が守る」

幸い水杖にけがはなく、泣きたいだけ泣くと、恥ずかしそうに腫れた目元を隠していた。最もその袖口は、すぐ真咲様の手で荒々しく引きはがされ、冷たく絞つた先の肩布で強引に冷やされていた。本当は優しい方なんだ……と、衝撃の連続の中、ほつと嬉しくなつたことを覚えている。

暴風は去つた。私たちの心に深い爪痕を残して。

闇に消える寸前の早蕨の顔を、私は忘れることができなかつた。赤く光る目。憎悪にゆがんだ顔。あれは本当に、私と同じお旗女のかわいい表情だったのか。

「まさか門出に“長浜の凶星”^{きようせい}に出くわすとはな。社殿では大人し

くしていやがつた癖によ。あいつは辺境勤めだから、当面、あのツラは見ねえで済むつてのが救いだぜ。あれで城代家老の縁戚つてんだから、始末がわりいや。どんだけ凶行を犯しても、すぐに誰かがもみ消しやがる。……しかし老師様のお庭先で、まさかお旗女に手を出すとはな。」

しゃがみこんで、水杖の頬を冷やしていた真咲様が、吐き出すようになつた。その言葉で、なぜ、あのような侍が、軍律厳しい長浜軍にいられるのかも、解つたような気がした。

「あいつは獸だ。人の道理が通じねえ。お前ら、今度見かけたらすぐには逃げろよ。」

真咲様が水杖に言い聞かせている。凌介様は無言で、馬の鞍に荷をつけていた。

「なあに、あいつの正体は臆病者や。弱い者いじめしかしゃがらねえ。戦場で会えば真っ先に狙い撃ちだぜ。それを器用に逃げ回りやがる。あいつは長浜の侍全員を敵視してやがるから、それは、つまりみんながあいつの敵つてことだ……、あーつくそつ、やつは説明まで混乱させやがる！ つまり、奴には、近づくな……！」

しゃべっている内に訳が解らなくなつてきたらしい真咲様が、腕を振り回しながら喚く。水杖が吹き出す。続いて私も思わずクスッと声を漏らした。

つられたように振り向いた凌介様からも笑顔がこぼれる。明るい笑い声が辺りにはじけた。暗い思いが、見る間に洗い流されていく。

「なんだよ、お前ら。おれは心配してだなあ！」

真咲様だけが腕を組み、口を尖らせてみんなを見回していた。

月が照る山道を、私たちは一頭の馬に分かれて走った。

「よつしゃ！ 競走だ凌介！ 先に天槻に乗りつけた方が酒樽一つおこるんだぜ！」

水杖を鞍前に載せた真咲様が、ヒヤッホウ！と奇声を上げて手綱をさばく。見る間にその姿が小さくなっていく。

「はは、アソシ、勝てもしねえってのに、毎回よくやるよー。」

明るく言い捨てた凌介様は、いきなり馬首をめぐらした。

「近道行くぜ！ そりつ！」

馬が飛ぶように崖道を下り始める。私は鎧にしつかりとつかまりながら、吹きさす強風に逆らって叫んだ。

「なんだつてつ！？」

ともすればつんのめりそうになる力に必死で抗いながら、凌介様が叫び返す。

「私、あなたにお仕え出来て良かつたです！」

今度の声は、きちんと聞こえたかどうか……。

月明かりを一身に浴びながら、けんしょん険峻な崖を見事に下りきった馬は、一路、天櫻城を目指して暗い山道を疾駆していった。

続く

(1)

観滝社殿の一修練女であつた私が、長柄足軽一番隊隊長・出石凌介様のお旗女として天櫻城に入城してから、十日が過ぎた。正直、この間のことはほとんど記憶に残っていない。あまりに早く時が流れすぎたので、振り返る暇も、感じたことをゆっくりと心に刻みつける暇もなかつたのだ。ただ、怒濤のように始まつたご奉公初日のことだけは、かるづじて思いだせる。

天櫻城に到着したのは、十日前の明け方だつた。観滝社殿を含む国内でも有数の険しい山々はすでに後塵ひいじんの彼方に隠れ、これだけは変わらぬ春の月が、初めて日にする西の平野に優しく傾いていたのを覚えている。

東の空が明るくなり、野に朝靄あさめが立ちこめる中、小高い丘の上に未だ黒い影となつて佇む天櫻城は、とても幻想的に見えた。

しかし、その感慨にふけつていの暇はなかつた。

着到と同時に凌介様は、まだ静かな足軽長屋の一角の小さな角部屋に私を連れて行つた。

「ここが朝芽の控え部屋だ。最初はちょっとうるさいが、なあに、すぐ慣れるさ。」

私物を入れるつづらに小さな文机ふげくえ。壁にはお茶室のような違い棚。塵ひとつなく掃き清められた板張りの床。朝の静謐せいひつな空氣の中、それはこの上なく素晴らしい居室に思えた。押入れには、寝具まで入つてゐる。

「俺は城下に家がある。朝芽も借りたいなら手配はするが……」「いいえ。ここで住まわせていただきます。」

「そうか。」

目を輝かせた私を見て、凌介様が頷く。

「では俺は行くよ。朝飯前にひと訓練あつてね。」

「私も参ります」

あわてて腰を上げた私を、凌介様は軽く押しとどめた。

「いいから、ゆつくりしてなよ。今にイヤつてほど、動くことになるからや」

凌介様の言葉は本当だつた。

朝餉^{あさけ}が済むと、それまでゆつたりとしていた時の流れがいきなり激流へと変わつたのだ。

めまぐるしく私の名を呼ぶ声、次々に出される指示書。それはほとんどが新参のお旗女に対して城内の家臣から与えられるものだつたが、おかげで私は休む間もなく、板鐘^{ばんしょう}が昼を告げる頃には城内の殆どの場所を覚え、夕刻には日常使う物の位置をすべて頭に叩き込み、翌朝には実務に入つていた。

凌介様は真咲様と共に、早朝から深更まで長柄部隊の調練や城下見回り、遠駆けに城内雜務と文字通り飛び回つていた。私は親友の水杖^{みなづえ}と言葉を交わす暇もなく、朝に主が水浴びをすれば、着替えと櫛盤^{くしだい}を持って駆けつけ、昼に書簡^{じょけん}をしたためるときは、傍らに居て墨を磨つた。夕刻ともなれば灯明油^{ひょうめいゆ}を数多ある詰所の行燈^{あんどん}に注いでまわり、夜には口頭で受ける明日の調練科目を回覧書に朱書きした。この辺りの流れは、觀滝社殿^{くわいりそでん}すでに実習済みだったので、めまぐるしい予定ではあつたものの、さほど混乱は感じなかつた。しかし、驚いたのは凌介様の素早さだつた。

すべての動作が速いのだ。

かつてあの深山の泉で、崖を登る早さにも驚いたものだつたが、それはここでも如何なく發揮されていた。

動きに無駄がないのだろうか。同じ仕事をこなす真咲様の、軽く

一倍は動いている。

最も真咲様は、手と同様、口の方もかなり動かしていらしたのだが……。

水杖の姿も頻繁に見かけた。部屋は一緒に長屋の一室ではなかつたが、彼女も同じ長屋の一角に自分の居室を与えられているはずだつた。
彼女も順調に仕事をこなしていようつだつた。目が合うと、真咲様の方を向いてちょっと肩をすくめ、それから嬉しそうに仕事に戻つていつた。

そして、ようやくお旗女の新生活にも慣れてきた十一田田の朝。私は、天櫻城でのある騒動に巻き込まれることになる。

お旗女の重要な、そして特殊な仕事に、漢文の読み書きがある。
観滝社殿での見習い時代にも、この読み書きの修練はことのほか厳しかつた。

当時、長浜の女性たちは平仮名を使つていた。しかし、お旗女の仕事の内には、隊長の側近として、いち早い地図の準備や出陣先の風土の把握があつた。必要な情報は、書籍を紐解けばいくらでも調べることができたが、その主文のほとんどが漢文で書かれていたのだ。

忙しい主に代わつて、上役の方々との書簡のやり取りも仕らねばならなかつた。その際には流麗な返書を書くことはもちろん、時には特殊な戦用語や、忍びが使う暗号文の解読も求められたので、私たちは常に辞書や先史と首つ引きたつた。

私は元々、本を読むことがとても好きだつた。

見習いの頃も、よく観滝社殿のお文庫みたくしや所に入り漫り、頭の中だけは厳しいのうと、よくお師様に笑われたものだ。

天櫻城のお書物庫は、本丸から南東に突き出した一の丸の三階にあつた。この城では文武奨励の気風が強く、一般兵や、城内勤めの小者まで、男女を問わず自由に「」本を読むことができた。番役に申し出れば、借りることもできる。

その日、私はまたお書物庫にやつきていた。ここでは一人の番役が、交代で詰めている。

「やあ、朝芽どの」

扉の前で、ふわりと立っていた白髭の老人が、私を見てにこにこと話しかけてきた。もうすっかり顔なじみになつた、お書物庫番役の老歩兵である。名前は確か、月江様と言つた。もう一人は田つきの鋭い若い兵士で、今は非番か、姿が見えない。

「いつもお邪魔いたします」

老人が、鍵を開けてくれた。中に入ると、何十年分もの歴史と埃の、獨特な、しかしじこか懐かしいにおいがどつと押し寄せてくる。「出石殿から聞いておるよ。長浜軍略伝と……それから常梓抄」「ありがとうございます」

月江老が出してくれた分厚い書物を受け取る。その上にポン、と固く巻かれた小さな包みが乗つた。

「ばばが作った団子じゃよ。うちでお食べ」

わあ、と私は目を輝かせた。月江夫人の作るよもぎ団子は絶品で、初めて食べた時はこの世にこんなおいしいものがあるのかと、思わず一人ため息をついた。感動を伝えると、月江様はその後もちょくちょく持ってきて下さった。

「ありがとうございます」

思わず胸に抱くようにすると、月江様は目を細めて笑つた。勤めはじめてまだ新参の身ではあるけれど、こういつた温かさに触れるたび、ここへ来てよかつたと改めて思われる。

お礼を述べて、部屋を出ようとした時、ふと一冊の薄い本が目にとまつた。

表には、

長浜へんきょう辺境がいし外史

とある。重厚な墨跡が瑞々しい。

最近書かれたものかしら？

心を惹かれて手に取つて見る。中を開いた私の手に、見開きいつぱいに描かれた絵図面と、

『長浜郡杵築村五郷全図

の太い文字が飛び込んできた。

杵築村五郷。

その名を忘れる事は出来ない。

私の、故郷。

半年前、水杖と共に殆ど追われるよつとして捨ててきた、私の生まれ育つた村。

あの山も、この川も、すべてが美しい筆致で思い出の中の景色そのままに描かれていた。

釘づけになつた目から、熱いものがあふれ出す。

あわてて袖で拭う。顔を上げると、月江老の穏やかな笑顔があつた。

「気に入つたなら、持つて行きなされ」

「よろしいのですか」

思わず声が弾んだ。私は、いただいたお団子の包みと共に、そつとその本を胸に抱きしめた。

「朝芽あさめーっ！」

暗いお書物庫から、春の明るい光の中に出た私は、覚えのある声にパツと振り向いた。

「水杖みなづえ！」

懐かしい姿が、大きく手を振りながら駆け寄つてくる。

観滝社殿の東門で別れて以来、時折目を合わせる以外、殆ど会つことのかなわなかつた親友。どれだけ話がしたかったことか。

「元気そうね！ よかつた！」

駆け寄つてきた水杖は、飛びつくよじにして私の両手を握りしめた。

私も、ギュッとその手をつかむ。

「真咲様は？」

「ご城主さまのお供でご視察よ。今日はお旗女はお呼びじゃないんですねって。」

可愛く膨れた水杖は、不意にいたずらっぽい笑みを浮かべた。
「出石様も出て行かれたわ。お一方から命令です。戻るまで、お旗女同士、心ゆくまで情報交換していると…」

顔を見合させた私たちは、同時に吹き出した。弾けるように笑いながら、私たちを気遣つてくれた主二人の優しさに、ギュッと胸が熱くなる。

「行きましょう！ 話したいことがたくさんあるのよー！」

水杖が袖を引っ張る。私は月江老からいただいた包みを田の前に掲げ、にっこりと笑つて見せた。

田当たりのいい調練所裏手の壁にもたれ、月江夫人自慢のよもぎ団子に舌鼓を打ちながら、私たちのおしゃべりは尽きる処を知らなかつた。

「……そこでお使者様が金切り声をあげてね！」

私と比べて積極的な水杖は、城内のうわさにもよく通じていた。
まったく、同じ十日間を過ごしたとは思えないほど、彼女の情報は豊富だつた。

私もありつたけの出来事を話した。この数日間の楽しかつたこと、辛かつた出来ごと。

与えられた小部屋の話になつた時、水杖がちょっと不満げに言つ

た。

「実はね、私、はじめは『城下で暮らしたいと申し出たのよ。影芳^{かげよし}様のお屋敷の女中部屋にでも置いて下さい』とお願いしたの。屋敷内に居れば、いつでもお支度に伺えるでしょう。お腰の物や、お具足の手入れなど、やるべき務めは沢山あると思つて。……でもね、」

真咲様は、即座にそれを却下したと言ひ。

それは、奥方の仕事だ、と。

「なんかグッサリきちゃつたわ~。勿論、私たちは奥方ではないしそのような高望みをするつもりもないけれど、ああまでハッキリ言われると、なんだか……」

真咲様も凌介様も、まだ独り身だ。おそらく、真咲様は深い意味があつて言われたのではないだろう。お旗女の仕事に明確な規定は無いが、おそらく真咲家では、そこに一つの厳格な線が引かれているのだろう。

しかし、水杖の複雑な気持ちは痛いほどわかつた。私もまた、おそらく彼女と同じ衝撃を、その言葉から受け取つたからだ。

それは、奥方の仕事だ。

凌介様も、同じように言われるのだろうか。

あの時凌介様は、城下に住むか？と聞いてくれた。しかしそは、あくまでお屋敷の近くにという意味であり、やはりお旗女を自らの住居に上げることは無いように思えた。それは今まで信じ切つていた何かにさつと影が差したような気分だった。思いが顔に出ていたのだろう。水杖があわてて『ごめんね、』と言つた。

『ごめん朝芽、変なこと言つたね。私は十分満足してるわよ。真咲

様にお仕え出来て、とても幸せよ。」

「うん、いいの。水杖ががつかりするのも当り前よ。」

水杖は、真咲様を好きになりかけているのかもしれない、とふと思つた。

では、私の今のこの気持ひは、どう言ひ表せばいいのだらう……。

「これを見て。」

群雲のように沸き起る思いを振り払つて、私は先ほどの書物庫で見つけた『邊境外史』を取りだした。

杵築村五郷の絵図を開く。鮮やかな色彩が直からこぼれおちる。

水杖がわあ、と懐かしむ笑みを見せた。

「素敵に描かれているじゃない。」

「うん。実際、素敵な村なんだから」

辛かつたはずの思い出に微笑むことができるのは、今がきっと満ち足りているから……。

「いつか、また行けるといいわね」

「うん」

私は心からそう言った。

「お書物庫と言えばね」

ふと、田が陰つたようだつた。

水杖の聲音がすこし、落ちたのだ。

「どうも、荒らされているようなのよ。数日前から」

「荒らされている……？」

「私も詳しく述べ解らないんだけど、なんどか書棚が撞きまわされ、いくつかの書籍が消えているんですって。」

「まあ、誰がそんな……？」

「それが全然わからないのよ。夜の間なのは確実なんだけど、誰も気が付かないうちにお書物庫だけがやられているんですって」

「それで、盗まれた書物は？」

「それがね」

言葉を切つた水杖は、私の手元にふと視線を向けて、「地図の本ばかりなんですって」

「地図の……？」

私は思わず、手にしていた『邊境外史』に目をやつた。

「あら、その本は違うわよね。外史っていうんだから、歴史とか伝承とか……そういった事が書かれているはずよ。第一、盗まれずに残っているわけだし」

水杖があわてて言葉をつなぐ。私はいいのよ、と笑つて
「でも、お書物庫のお番役さまは、何もおっしゃっていなかつたわ」「それはそうよ。公にはできないことだもの。ここの中城主も、長浜の本城には内密にしているみたいよ。大体、今日のご視察も、それと関わりがあるとかないとか……」

水杖がそこまで言つた時だった。不意に二の丸の方でけたたましく板鐘が鳴りだしたかと思うと、

「大変だ！ お書物庫がやられたぞおッ！」

「火事だ！ ボヤが出てるッ！ 早く消し止めろ！」

「急げ！ 火元はお書物庫、お書物庫だあッ！」

のどかな春の空気を引き裂くように、次々とひきつった叫び声が上がつた。

建物から沸き出すようにして、城兵たちがあふれ出でてくる。その姿は次々と、二の丸目がけて駆け出していく。

お書物庫！

「月江様……！」

私は顔色を変えて立ち上がつた。ぱつと駆けだす。水杖があわてて背後で叫ぶ声が聞こえた。

押し寄せる天櫻兵や、留守居の家臣の集団に揉まれるよつにして走り、二の丸の狭い階段を殆どよつぱいになつて私は這い上がつた。現場では、すでに大きな人の輪が出来ていた。

「月江様！」

思わず叫ぶ。人の輪の中に、がつくりと腰を落とす白髪頭が見えた。もう一度叫ぶと、のろのろと、その顔が上がつた。

「朝芽どのか…」

人垣が割れて、駆け寄つた私を通しててくれた。私は周囲に礼を述べつつ、小柄な老人の元に走り寄つた。

「月江様、お怪我は！」

「わしは何ともないよ……だが、お書物庫がこのざまじや。御城主様に何と申し開きできよつ」

老兵の指さす方を見て私は息をのんだ。

水浸しの、黒く焼け焦げたお廊下の板木。そしてめちゃくちやにたたき壊されたお書物庫の扉。

見るまでもなく、中の惨状は容易に想像がつく。

「ごつそりやられたよ。地理と名のつく書物は全部じや。まったく、^{ひど}非道いことをする！ どこまで損ねねば気が済むんじや…」

月江老は、情けなさそうにぼやき続けた。

お書物庫のボヤは、結局廊下の一部を焼いただけで済んだようだ。幸か不幸か、番役二人の交代時で、書物庫の前は一時無人になつていたと言う。月江老はかなりし�ょげていたが、何事もなかつたのは幸いと、私は胸をなでおろしたのだつた。

天櫻のお書物庫は、普段から開放的だつたこともあり、やがて帰城したご城主様により、失われた書籍については、番役一人にお咎めなしとの裁可が、即日下つた。

しかし、曲者の侵入をやすやすと許した事態を重く見た重臣たちは、宿直番を増やし、翌終日かけて修繕されたお書物庫の警備も、

あわせて厳重に行うことになった。月江老も、お役を外されることはなく、我こそ曲者を仕留めんと、より精勤に励んでいるようだ。

ボヤ騒ぎから三日ほどたつたある夜、凌介様にも宿直のお役が回ってきた。下城の鐘が鳴った後、改めて夜のお勤めが始まる。この日は私も、寝ずの番を心得て、凌介様と共に本丸の詰所に控えていた。

詰所は部屋の隅々にまで燭台がともり、昼間のように明るかつた。外掘や内庭、泉水の中にまでかがり火が焚かれ、厳めしい鎧に身を固めた歩哨ほしょうが直立している。ぱちぱちと松明のはぜる音が、詰所の奥にまで聞こえてくる。まるで戦時のように、天櫻城はその全貌を赤々と、闇の中に浮かび上がらせていた。

凌介様は、同じ宿直の隊長たちとしばらく明日の修練について談笑していた。途中で真咲様まさきが酒樽一つを抱えて登場し、謹厳な寝ずの番がささやかな酒宴と化した。やがて夜も更け、彼らが手枕でごろりと置に転がり出すと、凌介様は黙つて立ちあがり、私の方に戻つてきた。

「朝芽あさめ、遅くまでつき合わせちまつたな。俺が起きているから、少し休めよ」

私のすぐ側にしゃがみこみ、凌介様は低い声でいたわるように言った。

「大丈夫です、お気づかいくださいませんよう」

私は眠っている人たちを起こさないよう、小声で答えた。向こうでは、真咲様が、派手な薄衣をかぶつて大の字になつてゐるのが見える。殆どの人々が横になつてはいたが、お役目を意識してか、深くは眠つていないうようだ。誰かが起きていれば、問題はないのだろう。

凌介様がふと、膝の上に手を伸ばす。そこには、今まで読んでいた本が乗っていた。

「辺境外史……か。

「ご存知でしたか」

尋ねると、黒々とした瞳が笑みを含んで私を見た。思わず頬が赤くなり、ちょっと目を伏せる。

「昔、な。国境の城に真咲といた頃だ。……ん？ ここの絵図は……」手を止めたのは、杵築村全図の貞だつた。どきん、と心臓が一つ鳴る。

凌介様はしばらくその見開きを見つめていたが、

「もう忘れたな。ずいぶん前の話だ」

不意に本から手を離した。

軽快に立ち上がる。見上げた顔の前に、大きな掌が差しだされた。

「少し歩くか。夜の天守閣なんて、中々上がれないしさ」

凌介様は、そのまま私の手をつかみ、返事も待たずに引き起こすと、

「影、起きとけ。俺は見回りに行く」

容赦なく、友人の寝姿を蹴つ飛ばした。

それは文字通りの見回りで、凌介様は本丸中の溜間や詰所、お廊下を回り、更には庭園や周囲のやぐらにまで足を伸ばした。私もそれに従つて、消えた燭台に火をともしたり、明かりの届かない闇の中に、目を凝らしたり、とあわただしく動き回った。

どれくらい部屋を回つただろうか。気がつくと私は、お城のかなり高いところにまで上がつて来ていた。目の前には、天守に続く木段が見える。本丸の最上階。旗女がそのような高みに上るのは、と私は一瞬尻込みしたが、凌介様は、心配ないとつてずんずん階段を上つてしまつた。ご城主様は普段は本丸の裏手のお屋敷内におりられるため、天守には子の刻を過ぎた深更に限り、“怪異を払う”という名目で、宿直の者も上がることを許されているそうだ。勿体ない事ではあつたが、主にお咎めがないのであれば、と私もそつと階段に足を乗せた。

生まれて初めて上がった本丸の天守は、四方に窓が開き、夜風が穏やかに吹きこんでいた。家具調度の類は一つもなく、ただのがらんとした溜場に見える。燭台は吹き込む風で消されていたが、外から明かりで、辺りの様子はよく解つた。

窓の向こうに夜空が見える。惹かれるように大窓から外へと踏み出した私は、思わず感嘆の声を上げた。

「わあ……綺麗」

頭上は満天の星空だった。はるか下方には御城下の明かりがぽつぽつとみられ、その先には暗い平野が広がっていた。平野の彼方は、山々が夜の闇よりも深く沈んで連なつている。月はとっくに西の山に沈み、空を渡るホトトギスが、時折鋭い声を上げる。山から吹く風は生温かく、どこか初夏のにおいもはらんでいた。

眼下には、渡り廊下の屋根が東西に続き、その先には、一の丸の大屋根が見えた。つづらに折れた複雑な通し道。随所に門が設けられ、まるで巨大な迷路のよう。少し目線を上げれば、三の丸とその外郭が、本丸の敷地を広く取り囲んでいるのが良く解る。とは言え、天櫻城は、それほど大きな城ではない。戦略的には、長浜本城の、それこそ一の丸のような位置に当たる。便宜上本丸、二の丸と呼び分けているが、上から見れば、それらの屋根はすべて間近に連なっている。

私はしばし無言で、これらの景色を見入っていた。様々な思いが胸をよぎる。半月ほど前までは奥山の泉に通っていたのに、それがもう遙か昔のように思い返されるのが不思議だつた。すつと、私の横に人影が立つた。

振り向くと、すぐ傍らに凌介様が立っている。

驚いて脇へ退こうとすると、「やめろよ」と笑いながら制された。そのまま並んで立ち、無言で同じ景色を眺める。緊張と、高ぶる気持がないまぜになり、私の胸は鳴りっぱなしだった。

改めて間近で見た凌介様は、私よりも上背があつた。真咲様が大柄なので、そのそばにいると小さく見えていたのだが、実際は、引き締まつた厚い胸板にがつしりとした肩幅の、すらりとたくましい長身だった。

大きな掌。長く美しい指。その手を無造作に欄干に掛け、凌介様はまっすぐ前方の闇を見ていた。整つた横顔に、栗色の髪が影を落とす。高い鼻梁。わずかに伏せられた長い睫毛。闇の中にうかんだ白い顔は、何か物思いにふけっている美しい影像のようだった。

きれい……

おもわす見とれた私の脳裏に、ふと、先日の水杖の言葉がよみがえった。

“奥方になれるなんて、おもわはずもないけれど”

いきなり、高鳴つていた胸を冷たい手でぎゅっとつかまれた気がした。

こんなときに、なんでそんなことを思い出すの、と自分が恨めしくなつたが、一度浮かんだ思いはたやすく消えてくれない。

“それは、奥方の仕事だ”

解つてはいた。どれだけ目をかけてもらえても、お旗女にはどうしても超えられない壁があると言つことは。

夜闇は人の心を怪しくかき乱す。

解つてはいるけれど。

どうして、こんなに胸が痛いのだろう。

「……この十日間。」

濶んだ思考を打ち払つように、ふいに真横で、声がした。私は、はじめたように顔を上げた。まるで心を見透かされたような気がして、途端に頬が熱くなる。しかし、そんなことがあるはずもなく、

凌介様は前を見たまま、いつも通りの、静かな声で後を続けた。

「期待以上だつた。正直、音を上げるかと思ってたんだ。試してい

たわけじゃないけど、思つてた以上の働きだつた」

その言葉は何よりも嬉しく私の心に染み渡つた。ここ数日の思いがどつと胸によみがえり、私はあわてて下を向いた。先ほどまでの心の痛みが、見る間に消え去つていく。そうだわ。どうしてあんな余分なことを考えたのかしら。

「凌介様が、教えて下さったおかげです」
うつむいたまま、小さく答える。

「朝芽」

不意に、名を呼ばれた。恐る恐る顔を上げると、凌介様がこちらを向いていた。長い指がすっと伸びて、私の頬に触れる。

「また泣いてるって」

「泣いて……いません！」

あわてて顔をそむける。心臓が大きく跳ね上がる。

「いいさ。泣いても笑つても、お前は一人前のお旗女だ」

凌介様は明るく言って、欄干に背を持たせかけ、夜空を振り仰いだ。

私はこぼれそうになる涙を、袖口で拭つた。

目元に温かい指の感触が、いつまでも残つていた。

東の空が明るみ始めた。はじめは星の輝きに紛れていたが、はるか遠くの山上の空が、次第に夜の闇を押しのけ始める。

「そろそろ行こうか。」

凌介様が、欄干から体を離したその時……

空氣の中に何か違和感を感じて、私は立ち止まつた。

まだ闇が瀰漫する二の丸の大屋根の上。お書物庫の出窓の近くに、何か黒いものが動いたのだ。

「朝芽、どうした」

「あそこに、なにか……」

凌介様の反応は早かつた。手摺の上に身を乗り出し、私が指す方向にぐつと目を凝らす。不意に

「人影が一つ。お書物庫の上」

咳くと彼はパッと欄干から飛び降りた。

「お前は詰所へ！」

言い捨てるや、燕のように身をひるがえすと、すさまじい速さで

天守から走り出していく。

あわてて続こうとした時、視界の隅に光が走った。思わず振り向く。

彼方の屋根の上で、影の一つが手にした明かりをきらきらと振っていた。確かに、黒装束の男が一人見える。それにこたえて、城の西方の山の中腹に、小さく合図の火が点つた。二つ、三つ。くるくると回る。そしてすぐに消えた。それはどこか幻想的な光景だった。思わず私は、見とれていた。

城中が騒然となつたのは、その直後のことだつた。

「曲者！」

「出たぞ！ 盗人だ！」

喚き声が城のあちこちからあふれだす。バタバタと侍たちが渡り廊下を走っていく。

内庭でも、見る間にお書物庫日がけて足軽兵たちが押し寄せてきた。矢がバラバラと射かけられる。屋根の上の影の一つが、もんどうりうつて転がり落ち、私は思わず息をのんだ。

残された影が、素早く屋根を回つて視界から消える。仲間を助ける気はなさそうだ。

屋根から落ちた曲者に、兵士たちが重なるように組みつき、取り押さえたのが解つた。

続
<

(3)

曲者の正体は、最近、国内を荒らしていた大きな山賊の一昧だと解つた。首領に命じられて天櫻城あまつきじょうから、地理に關した本を持ち出していたらしい。

「目的は解らねえ。ただ、辺境の地図が要るんだと言われ、それらしいのを片つ端から盗んだだけだ。」

捕えられた男は、それ以上のことは知らなかつた。首領の顔さえも解らないと言つ。

逃げたもう一人の男についても、

「初めて組んだが、同じ山賊の下つ端だと思つ。殆ど言葉も交わさなかつた」

と冷めた口調で吐いたそつだ。

結局、あれだけ労を費やしたにもかかわらず、目的の本は得られなかつたらしい。命令が、“地理の本”だけでは、無理もない。

山賊の首領は、渕上幻奇ふちがみげんきと名乗る極悪非道の妖漢で、隣国の息のかかつた大忍者とも、千年も生きる妖術使いともいわれている。根拠のない噂ではあつたが、それはこの男の不気味な肖像として、今も巷に語られていた。

盜人はすぐに、長浜本城に送られることになつた。根城や目的、その規模など、聞きたいことが山のようにあるのだといつ。

曲者の正体や目的が明らかになつたことで、この件はひとまずの落着を見せた。山賊が何のために地図を欲しがるのかは解らなかつたが、それまでお城を覆つっていた得体の知れない暗雲が、少しだけ晴れたのは明らかだつた。

凌介様と真咲様は、引き続き中庭警護を命じられ、調練の合間によく本丸を駆けまわっていたが、その後怪しい影の報告もなく、日々は穏やかに三日が過ぎた。

三日後、私は読み終えた辺境外史を携えて、再びお書物庫を訪れた。真新しい扉の前で月江老が迎えてくれた。

「やあ、来たね。」

「長い間お借りしまして」

「山賊が忍んでいたんじゃと？　まったく、こんなボロ書庫にどんなお宝が眠つていたのやら」

首を振りながら、月江老が鍵を開けてくれる。

いつものように中に入り、私は“辺境外史”を棚に戻した。

ふと窓の外を見ると、凌介様がちょうど中庭で長柄隊を調練しているのが見えた。よく通る大声がここまで聞こえる。眼下の動きは一糸も乱れず、軍列が向きを変えるたびに、槍の穂先がきらきらと輝く。反対側では、真咲様が指揮をしている。水杖の姿は、今は見えない。

「どうしたんじゃ」

月江老の声に、我に返った私は、あわてて窓から離れた。

「えらく深刻な顔をして見ておったぞ」

窓辺に立つた月江老は、汗だくなつて指揮している凌介様の姿を目にとめたようだ。その目が、ふうむ？　と言つのように私に戻る頬が熱くなるのが解つた。

「良い若武者ぶりではないか」

「いえ、私は……」

心臓が高鳴る。見られてしまつた！　あまりの恥ずかしさに、その場から駆け出したい衝動に駆られる。

「違うのか？　朝芽殿の視線の先は、すぐ解つたがな」

「私は……」

逃げることもかなわず、真っ赤になつてうつむく。今にも消えそうになる声を、ようやく絞り出した。

「私は、お旗女で」「いやこまく」

「それがなんじゅ

月江老の声は、一抹の厳しさを帯びていた。打たれたように私は顔を上げた。

「己の分はわきまえております。私はどうあっても」

奥方にはなれません！　寸前で、最後の言葉を飲み込む。動搖が走る。

私は何を言おうとしたの！？　なぜ、こんなことを考えるの！？

「絆の深さに、身分の区別は必要か」

灼熱の鉄を打ちこまれたように、私の心に衝撃が走った。思わず目の前を見つめると、そこには、常と変わらぬ風体の月江老が立っていた。しかしその視線は、射抜くように厳しく、私を見つめていた。

部屋の空氣がピン！と張り詰める。

沈黙……。

しかし、その沈黙は、私の心を大きく包み込んでいた。
絆の深さに、身分はない。

そう。

心をこめてお仕えすることが、私の決意ではなかつたか。

『俺の部下は、俺が守る』

ならば私は、日々の勤めでそれに答へねばならぬのではないか。
ただ一心に責務を果たすと決めた気持ちを、立場付ける必要なんてない。

垂れこめていた暗雲が、一度に晴れ渡つたよくな……。

どうして、こんな簡単なことに気付かなかつたのだらう。

「朝芽ど」

やがて、月江老の優しい声が聞こえた。

「苦しまずとも良い。唯、己の心に正直であれ。」

さすれば、道は開く。

最後の言葉は、風がささやいたようだつた。聞き返す間もなく、月江老の姿が、扉の向こうへと去つていくのが見えた。空耳だつたのかも知れない。しかしその声は、不思議な威厳と共にいつまでも、私の心に響いていた。

月江老がお廊下へと戻つて言つた後も、私は書棚の影で一人、立ち尽くしていた。

自分が採るべき道が開けたような、そんな心地よい余韻に浸つていたのだと思う。

このわずかな時間が、その後の災厄を招くとも知らずに……。

「修繕殿がお呼びじやと？ やれやれ、ではここを頼むぞ」

廊下で大きな声がした。上役に呼ばれたらしい月江老が立ち去つていいく。

その足音がお廊下の彼方に消えていったと思つた刹那、お書物庫の扉が、ガタリ、と鳴つた。

スー^ツと、開く。誰かが入つてくる気配。

空気が、不意に濁^{よど}んだような気がした。それは直感のよつたものではあつたが、私は反射的に書棚の影に縮こまつた。

目の前に、人影が立つた。目つきの鋭い、若い足軽である。確か、月江様と同じこのお書物庫のお番役を務めていた……。

足軽は私に気づかず、目の前のお棚を目を凝らすようにして探つている。

やがて

「あつた」

小さくつぶやくと、一冊の本が手に取られるのが見えた。

辺境外史。

私がつい先刻、そこに戻したものだ。

「ついに……見つけたぜ」

にやりとつぶやく。そこに浮かんだ冷酷な笑みに、私は思わず身

をすぐめた。

この人はただの足軽ではない。

私の脳裏に、先日の光景が鮮やかによみがえった。

お書物庫の屋根に張り付いていた影。一人は捕えたが、もう一人は逃げ去つた。

もし、もしも。

あの逃げた一人が、この男であつたのなら。

誰にも知られず、何度も荒らされたと言うお書物庫。もしその一番役の一人が一役買つていたのだとしたら、これ以上やりつい“仕事”はないだろう。

謎の足軽が、私の推測を裏付けるような行動に出たのはその時だつた。

懐に本をしまうと、代わりに取りだした小さな手鏡。西側の窓に近づくと、彼はそれを表に向けてピカリ、ピカリと閃かせたのだ。

合図にこたえて彼方から、明らかに手鏡のではない強い光が走る。

それは一瞬のことだったが、私の記憶を刺激するには十分だった。

光が答えたのは、三日前の夜、お天守から見た西の山の中腹だつた。

やがて足軽は、私に気づかないままお廊下へと出て行つた。このまま何食わぬ顔でお勤めを終え、懐の本を抱えたまま仲間の元に戻るのだろう。

城内では、誰も気づいていない。たつた今それを目撃した私以外に、事を見破る人もいないだろう。お書物庫の本が、今日一冊無くなつたからと言つて、誰が先日までの派手な盗みと結び付けるだろうか。

私はしばし考えた。すぐに凌介様に、と思ったが、お書物庫の扉にはあの足軽が番をしている。今ここで、姿を見られるわけにはいかない。しかし月江様が戻つてからでは、捕える機会を失うかもしれない。ちょっと所用で、と、月江様と入れ替わりに外に逃れれば

いいわけだから。

ふと、窓に目がいった。

電撃のようにひらめきが走る。

調練！

そうだ。ここから合図を送ればいい。凌介様はすぐ下にいる。きっと、解つて下さるだろう。

私は窓に駆け寄った。ちょうど、見下ろした場所を凌介様と真咲様が連れ立つて、長屋の方へ戻つていいくところだつた。調練を終えたらしい。今は長屋で待機していなければならぬのに……と、お旗女としての責任感がうずいたが、それどころじゃない、と気を取り直した。そのまま窓から大きく身を乗り出し、必死で手を振る。

「なんじゃあ？」

真咲様が先に気付いた。続いて凌介様も上を向く。危ないところだつた。閃くのがもう少し遅ければ、お一人は立ち去つてしまつていたのだ。

私は必死でお書物庫の中を指さした。扉、扉。続いて矢を射かけられた曲者の真似。

傍目にはとても滑稽なものだつたらしく、真咲様が吹き出すのが見えたが、凌介様はじつと私の動きを見ていた。と、不意に彼の目が大きく見開かれた。

通じたのだ！

すぐに行く。お前はそこを出る。

凌介様が手で合図する。ああん？　といぶかしげに真咲様がそれを見ている。

えつ、窓から！？

どきっと、身を引く。凌介様の合図は変わらない。

窓の外に隠れていろ！

窓の外には小さな張り出しがあった。そこにしゃがめば、中から身を乗り出して覗きこまない限り、人がいるとは解らないだろう。得心した私が、窓から出ようとした時だつた。

いきなり背後から、顔に布を巻きつけられた。

一度に視界が黒くなる。鼻も口も塞がれて息が出来ない。アツと思う間もなく、胸に太い腕が回される。

「朝芽つ！」

凌介様の叫び声を後ろに、私はお書物庫に引きずり込まれた。

冷たい床に体が投げ出された後も、自分の身に何が起こったのか分からず、私は無我夢中で顔に巻かれた布を外そうと手をかけた。その手が腕ごとぐつとねじあげられる。目元の布が少しそれ、周りの情景が飛び込んできた。

私はお書物庫の床に抑えつけられていた。そして胸の上には、ぎらぎらと光ったあの若い足軽の姿。

その口元が、にやりとゆがんだ。

「まさか、人がいたとは」

腕が折れるほどに締めあげられ、私は思わず悲鳴を上げた。しかしすぐに黒布が口に押し込まれ、ぐぐもつたうめき声に変わる。もがく私を軽々と抑えつけた足軽は、感情のない、ぞつとするような目で私を見下ろしながら、腰の短刀を引きぬいた。真つ赤な蜘蛛の彫り物のある、足軽にはおよそ不似合いな刀だ。しかし、その斬れ味は間違いなく鋭いのだろう。

「殺すには惜しい、いい女だが、お前の骸^{むくろ}で伝えてやるつ。長浜国は、強大な敵を懐に抱えている、と。」

布ごと口をふさいでいた冷たい手が、頸^{あい}から喉^{のどもと}元にすっと滑り、私は思わず顔をそむけた。

「天守に生首をさらす。女の首を刈るのは大仕事だ。クク……脂があつらいいからなあ。だが、お前の主がここまで上がつて来るまでに、十分時間はあるだろう」

私の心に絶望が走る。お城は外敵に攻められた時のために何重もの複雑な道が敷かれている。曲がりくねつた通し道。階段。御門。見下ろせば真下でも、確かに、凌介様がいた中庭からこのお書物庫までは、かなり遠い。

紅玉があれば……！

絶望の脳裏を禁断の言葉がかすめた。あれさえあれば、この窮地を脱する事が出来る。しかし、紅玉は、今は長屋のつづらの中だった。観滝社殿の東門で禁を犯しかけて以来、私は二度と同じ過ちを犯すまい、と敢えて肌から離したのだ。それを今、こんな形で後悔しそうとは。

しかし、すぐに私は自分を恥じた。どんな窮地でも、あの力に頼ろうとするなんて……！

私は、抵抗をやめた。全身から力を抜く。

その一瞬、足軽は怪訝な顔になつたが、すぐににやりと酷薄な笑みを浮かべた。

「女にしては珍しい諦めの良さだな。……いい子だ。その方が痛くない」

相手の力がふつと緩んだその瞬間！

私は全力で胸の上の体をはねのけた。転がりながら跳ね起きて、口の中の布をむしり取ると扉に向かつて走りだす。引き手をつかんだ。思いきり引き開ける。ガツン！ と両手に抵抗がはしつた。扉は、びくともしない。ハッと手元を見ると、内側からカギがかけられている。

しまつた、と思ったその瞬間、私はすさまじい勢いで後方に引きもどされた。

髪をつかまれ、のけぞった首に氷のような刃がピタリと当たる。

「さあ……時間だ」

耳元で、笑いを含んだ声がささやく。

寒気が走った。

足軽は、その格好のまま最初の窓のそばに私を引きずつていくると、ギラリと短刀の刃先を返した。

「油断したよ……クク……だが数秒じゃ運命は変わらない。」

今度こそ殺される！

すさまじい恐怖が押し寄せてきて、私は思わず絶叫した。

「凌介様！ 助けて……！」

その時いきなり閃光が走った。それはとっさにのけぞった足軽の胸元を、間一髪でかすめ去つた。窓から飛び込んできた黄金色の影が、飛燕のように抜き打ちを放つたのだ。

足軽が飛び退く。思わずへたりこんだ私の前に立ちはだかつた胴巻姿の凌介様が、腰を低く落とし、短刀を構える。

「運命を変えるには、数秒あれば十分だ！」

怒気を含んだ鋭い声で、凌介様は叫んだ。

「俺のお旗女に手を出すな！」

狭いお書物庫の中で、すさまじい闘いが展開された。

間髪をいれず、凌介様は猛烈な速度で立て続けに斬りかかった。あの足軽が、からうじて受け返している。

ドカン！ バシャッ！

重い体がぶつかるたびに、書物が吹つ飛び、木棚が碎ける。

バシイツ！

凌介様の渾身の一撃。それは蜘蛛の小刀を粉微塵に碎いた。すさまじい破壊力だ。

足軽が後方にトンボを切つて、次の刃をすんでにかわす。間髪をいれず凌介様は相手の懷へ飛び込んだ。踏み切りざまに回し蹴りを放つ。ぐう！ とうめいて足軽が吹つ飛ばされる。まるで光が走つ

ているようだ。速い。息もつかぬ凌介様の攻撃が、謎の足軽を追いかけていく。

しかし足軽も相当な使い手だつた。吹っ飛ばされた先の壁を蹴り、とつさに懐から取り出した握り刃を逆手に構え、空中から凌介様に飛びかかった。

ガツキーン！

金属のぶつかり合つすさまじい音がして、バッと、影が左右に飛び分かれる。

勝負はほぼ五分と五分だ。語ると長いが、実はほんの数十秒の出来事である。

「朝芽！ 逃げろ！」

相手の繰り出した必殺の一撃を、渾身の力で受け止めながら凌介様が叫んだ。私は必死で頷くと、押し合つ二人の横をすり抜け扉の内鍵を引き抜いた。足軽が私に蹴りを飛ばす。凶悪な一撃が私の胸を直撃しようとした瞬間、凌介様が横つどびに走り込み、逆回転に回し蹴りを放つて、寸前でそれを受け止めた。

ヴァキイ……ッ！

吹っ飛ばされた足軽が、木棚に叩きつけられる。

「早く出ろ！」

短刀を構えながら必死の形相で凌介様が叫ぶ。扉を開けた私は、不意にすさまじい悪寒を感じて振り返った。

足軽の様子が変わっていた。

棚に叩きつけられたままの姿勢で、顔だけを上げてこぢらをじつと見ている。その目が不意に赤く光った。

来る！

私の中で何かが絶叫した。それはおぞましいまでの感覚だった。足軽は、にやりと笑うと両手を胸の前に掲げた。その指先から、赤黒い妖気がすさまじい勢いであふれ出すのが、私の目に……おそらく

く私の眼だけにはっきり写った。

「危ない！」

叫んだ私はとっさに凌介様に飛びついだ。妖気が爆発する。それは猛烈な風の塊となつて、扉をぶち破り、私たちをお廊下の端まで吹き飛ばした！

血がしぶく。一の腕がざつくりと裂けていた。あまりの衝撃に足がガクガクして立てなかつた。お書物庫から、笑みを凍りつかせた恐ろしい形相の足軽が出てきた。それはすでに人の表情ではない。グイツと腕を掴まれた。凌介様がよろめきながら、それでもすさまじい力で私を引き起こす。

「俺の後ろへ！」

片膝をつきながら、それでも凌介様は短刀を構えた。私は激しく首を振ると

「逃げて凌介様！　私たちではかないません！」

「何だつて！？」

「あれは人間ではありません！　私には解ります。あれは！」

「私と同じ世界の……！」

辺りが白い閃光に包まれたのは、その時だつた。きらめくような光の帯がまき散らされ、爆発する。

凌介様が私の体をつかむ。そのままぐつと胸元に引き寄せられた。地面につつぶす。瞬時に視界が真つ暗になり、耳の奥に、ただ温かい鼓動だけが響いてきた。

ああ……これは、凌介様の心の臓の……

その時、聞き覚えのある声が、凛と辺りに響き渡つた。

「お城を騒がす佞人よ。覺悟をいたせ」

私はうずくまつていた腕の中から、おそるおそる顔を上げた。すぐ上には、愕然^{がくぜん}と目を見開いて固まっている、血しづきにまみれた凌介様の横顔が見えた。

田の前のお廊下では、まるで蜘蛛の糸のように伸びた白い網に、足軽が絡めとられてもがいていた。

駆けつけた真咲様とその隊下が、わあわあ騒ぎながら、それを遠巻きに取り囲んでいる。

そして、押し寄せた天櫻兵の輪の中央で、唯一人その拡散している網の根元をしつかりと握っていたのは……

ほかならぬ月江老だつたのである！

「油断したわ、日和爺。全く害のない同役だと思っていたに糸に巻かれたまま、足軽が、どすの効いた声で笑った。

「そなたを同輩と思うた事はない。山賊頭、渕上幻奇！」

老人の声はまるで一騎打ちに挑むいにしえ武将のように、朗々とあたりに響き渡つた。

どよめきが走る。

凌介様も驚いたようだ。

渕上 幻奇……！

泣く子も黙る妖術使い。それこそ、この度の騒動を部下に命じた張本人の名ではなかつたか。それがまさか、自ら番役として城内にもぐりこんでいたとは……

「ククク……おぬしこそ、ただの爺いではなかつたわけか。」

足軽……渕上幻奇と呼ばれた妖術使いは、面白そうに肩をゆすつた。

「我が名は妙法院少懼みょうほういんしょく。長浜忍軍、妙法院党の頭領じゃ。土岐定照様のご下命を受け、この地に潜んでおつた」

どよめきがはしる。

私は衝撃を隠せなかつた。あの日向のようないやかな老人が、まさか本城屈指の忍術軍団の頭領だつたとは……！　お書物庫で聞いた、清冽な聲音がよみがえる。そうだつたのか。あの声は……厳しい任務に就く大重臣が、一お旗女の心得違いを、親身になつて叱つてくれた声……。

「同番役になつたも何かの縁じや。おぬしには処刑場まで付きおつてやう」

老頭領が、淡々と答える。

「処刑、か。ククク……。だが、それは先の楽しみに取つておけ」
うつむいていた足軽がくいつと顔を上げた。その目が再び赤く光る。

「それまで寿命が持てばだが

「いかん！」

月江老がグイッと白綱を引いた。しかし一瞬早く、すさまじい叫び声がどろきわたり、辺りが一瞬で真っ黒になった。巨大な鳥が次々と窓から踊りこんできた。すさまじい羽風。悲鳴を上げ混乱する兵士たちを尻目に、握り刃で綱を切つた渕上幻奇は、ひときわ大きな鳥の足をつかむと、窓から外へと飛び出していった。

恐ろしい刻は終わった。

山賊頭は、妖鳥とともに姿を消し、後には再び破壊されたお書物庫と立ち騒ぐ足軽たち。

あまりの不可思議な出来事の連続に、いつもの軽口を忘れ呆然としている真咲様。

そして、傷だらけの凌介様……。

凌介様は、すべてが終わった瞬間、崩れるように膝をついた。あわてて駆け寄り、肩を支える。真咲様が飛んできた。

「凌介！ 大丈夫かおい！」

「影……」

凌介様が、肩で息をつきながら、のろのろと顔を上げる。それから一人は、示し合させたように私の方を振り向いた。

「お前、立派に守つたじゃねえか。」

真咲様が、妙に嬉しそうな声で言った。

「そうすると言つたら」

ぐつたりとほほ笑んだ凌介様は、私の腕をつかむとぐつと引きよせた。

「あんな外道に、負けてたまるかつて」

「朝芽」

月江老……今では本城忍軍の長である老頭領様が、私の名を呼んだ。真咲様と凌介様があわてて平伏する。私も一步下がって、低く頭を下げた。

「危ない目に会わせたの。わしがもう少し早く駆けつけてやればよかつた。だが、」

老人は、凌介様の血にまみれた黄金色の胴巻を見つめ、「……良き主を持ったな。これからも励めよ」

「はい」

私は泣きそうになるのをこらえながら顔を上げた。月江老の変わらぬ笑みがそこにあった。

「しかし……妙法院様」

私の前で、凌介様が、沈んだ声で言った。

「朝芽が言うには、大切なお書物が一つ奪われたとのこと。力至らず、申し訳次第もござりませぬ。」

「なんの。謝ることはない」

一度言葉を切った月江老は、にやりと笑うと

「奪われたは“辺境外史”であろう。あれは、偽物じゃよ。」「えつ？」

「本物はとうに長浜の本城に送ったわ。わしの情報網も、そう捨てたものじゃない。あれは、わしが書き写したものじゃ。朝芽に貸した時からすでに、わしの網は張られておったのじゃよ」

まさか同番役に化けていたとは、思いもしなかつたがなと言つて、月江老は豪快に笑つた。

「偽物……月江様が書かれた……」

私は混乱する頭から、かきつじて言葉を絞り出した。

「では、あの、杵築村全図は……」

「ああ、あれはわしが数年前に訪れた村でな。原本にはなかつたものだが、ひときわ心に残つていたので、新たに書き足してみたのだよ。杵築村五郷は、面白い村でな。今も生きた伝説があつてな。」

「伝説……？」

不思議そうに問い合わせた凌介様に、月江老は、秘密を語る口調でおこそかに言った。

「鬼が、いたのだよ」

これは、後に真咲様から聞いた話だ。

あの時、私が窓から消えたのを見て、凌介様はとつぜん長屋の柱に飛びついたのだそうだ。

そのまま屋根から一の丸へと凄まじい速さで飛び移り、ほとんど直登でお書物庫まで駆け上がった。普通に階段やお廊下を回ついたら、おそらく私の命はなかつただろう。

「元々素早いヤツだとは思つていたが、あれほど速いとは思わなかつた。あんなに血相を変えた凌介は、初めて見たぜ」

真咲様は信じられないと言うように首を振つた。

(4)

斜陽が差す日暮れの長屋で、私は凌介様の傷のお手当をしていた。

あれから数刻が過ぎていた。天守では、妙法院様を囲んでご城主様や重臣の歴々が、山賊討伐について議論を戦わせていくようだ。

凌介様の体には、大きな怪我こそなかつたものの、それはもう数え切れないほど斬り立てられた刀痕があり、闘いのすさまじさを物語つていた。

凌介様は無言。私も無言だった。

傷口を清水でそそぎ、包帯を巻いていく。それは奇妙に静かで、穏やかなひとときだった。

一通りのお手当てが終わつた時、凌介様が、ポツリと呟いた。

「……朝芽、すまなかつたな。調練に呼ばばず、お前を一人にしていた為に、恐ろしい目に合わせちました。俺が守ると誓つたのに。」

夕日に照らされた横顔が、沈んでいた。しなやかな体躯は少しうつむき加減に、栗色の髪がその表情を隠している。

私は、盤たのこを置いて、その横に端坐たんざした。

「いいえ」

まっすぐ、凌介様を見つめる。ゆっくりといひちらを見上げた寂しげな瞳に、私はにっこりとほほ笑んだ。

「全力で、守つていただきました。おかげで、いやつやってまだ、お仕え出来ます」

「……そうか」

「来て下さつて、嬉しかった。私は幸せです。」

私は、心を込めてそう言つた。

凌介様の口元にも、笑みが浮かんだ。そのまま視線を、彼方に向ける。金色の雲が輝く西の空。

「疲れたな……。今夜は共に飲もうか」

何かを吹つ切るように、不意に立ち上がつた凌介様は、私の手をぐっと握ると、夕日に向かつて歩き出した。

続く

第四章 不幸のお守り・前編

(1)

夜明けの鐘が、日^ヒと早く鳴るよつになつた。

まだ暗いうちに起きて東の彼方を眺めれば、春とは違つた力強さで、空が明るんで来るのが解る。空氣はどこか湿り氣を含んで温かく、やがて来る梅雨の季節を予感させる。長浜国は、新しい夏に入ろうとしていた。

その日は朝からよく晴れていた。日差しが強く、立つて汗ばみそうな陽気だった。

私は通用門で、出入りの鍛冶職人と調練で傷んだ直槍^{すぐやり}の打ち直しについて話しあっていた。早朝の調練を終えたばかりの天櫻城^{あまつきじょう}はあわただしかつたが、私が今いる、日常小者たちが使う黒塗りの通用門は、比較的静かだつた。本丸のお台所から、朝餉のおいしそうなにおいが漂つてきている。職人さんのおなかがぐうと鳴つて、思わず一人で笑い出す。そんな話し合いの中、気になつていた値段交渉も、

「朝芽さんの顔を立てるよ」

と、お腹の虫のお陰で親しくなつた職人さんの好意で、無事終えることができた。私は喜んで礼を述べた。

鍛冶屋が帰ると、私は受け取つた預かり証文を勘定役^{かんじょうようやく}に渡すため、本丸雜仕所に続く急峻な階段を上つて行つた。かなりおまけしてもらつたのが嬉しくて、足取りも自然と軽くなつた。

雜仕所への道は、天櫻城の中で一番きつい心臓破りの坂道で、左

には高くそびえた石垣の壁、反対側には深い雑木林が続いている。

階段の途中で、ふと、私は足をとめた。

「どこかで、弱々しい声が聞こえたような気がしたのだ。

「……どの、そこ行くお女中どの

間違いない。右手の雑木林の中だ。誰かが私を呼んでいる……？
私は、おそるおそる林の中を覗き込んだ。目の前は少しえぐれた
ような溝になつており、一段低い地面を下草が一面に覆つている。
そのシダやコケで埋もれた土中に、黒い具足がもぞもぞと動いた。
「怪しい者ではない。わしは、高砂備中たかさごびっちゅうと申すお城の将で……」
「備中様！」

叫んだ私は慌てて駆け寄つた。

それは、あまりによく知つている名前だつた。

正式には、高砂備中守長盛とあつしやる重鎮で、長柄足軽隊大隊
長まさき……凌介様や真咲様をもう一段上で束ねる、天櫻城の將軍の一人
である。私も何度かお目にかかつたことがあつたが、五十路を超
えた磊落な武人で、お酒が入るとやたらと力比べをしたがる闊達なお
人だ。

「おう、そなたは出石のお旗女殿か」

あちらも、私のことを覚えていてくれたようだ。

「いかがなされたのですか

駆け寄つた私に、備中様は痛みに歪んだ汗まみれの顔で、揉むよ
うに言つた。

「すまんが、そなたの主を呼んできてくれんか……。崖から落ちて
な、腰が……わしの腰が、……」

そこは、階段から少し下がつた雑木林の入口に過ぎなかつたが、
お気の毒な備中様は、まるで険しい崖から落ちたような気持ちがし
ていたに違ひない。おそらくかなりの勢いで転げ落ちたのだろう。
しかし、戦場では鬼とも呼ばれ、調練では凌介様や真咲様をも容赦
なく叱り飛ばしている熱血漢の備中様が、おかしな格好で腰を突き
だし、あまりにも悲しそうな声で唸るので、同情しつつも、思わず

吹き出しそうになる。

「すぐ参ります。今しばしお待ちくださいませ」

あわてて顔をそむけた私は、中庭の凌介様を呼びこ、ここまで登つてきた階段を走り下りた。

「不幸のお守りい？」

真咲様が素つ頓狂な声を上げた。

その声は、調練が終わつたばかりの中庭にて、ビンビンと響き渡つた。

「叱ッ！ 声でかいって」

凌介様が制する。

時間はあれから少し後、凌介様をはじめ、駆けつけた一番隊の兵士たちにより、備中様が無事お屋敷へと助け起こされて行つたその後のことである。

「備中殿が先日樺山社かばやまやしろで買つてきたんだが、以来、あまりに不幸が続くんで、俺らに返して来てくれってさ」

「はあ？」

備中守様は、最近立て続けに不幸に見舞われているらしい。

三日前には、屋敷でボヤ騒ぎがあり、次には可愛がついていた愛馬が足をくじいた。つい先日は、他城への昇進栄転にも外れたら落ち込んでいたと言つ。

「チツ、たかおか高岡城主に栄転か。あのタヌキ親父め、隠れて運動してやがつたな。」

「とにかく、それが駄目になつたのも、そのお守りのせいだと固く信じてんだよな、備中殿は」

「しかしよお」

真咲様が仮頂面で続ける。

「それならオヤジが自分で返しに行きやいいじゃねえか。なんで俺たちが……」

「ぎっくり腰で寝込んだよ。登城中雜木林で滑つてな」

凌介様は、笑いを含んだ目を私に向けて、

「朝芽が通りかからなかつたら、ヤバかつたつてな」

「おい、マジかよ……」

真咲様の顎が、げんなりと落ちる。

「不幸のお守りだなんて、冗談きついってね。ま、野暮用はさつさと済ますに限るさ。氣の毒な上役殿のために、ひとつ走り行つて来ようぜ」

流れる汗をぐいとこすつた凌介様は、私を見て明るく言った。

「朝芽も来るかい。こんな任務だけど、樺山社は行つたことないだろ?」

「なら、俺もあいつを連れてつてやるか。」

真咲様がにやりと私の方を見る。

「水杖みなかづえも、よろしいのですか?」

「おう。お前ら仲いいんだろ。呼んできてやれよ。」

「ありがとうございます!」

私は喜んで親友を呼びに走つた。

久しぶりの城外である。山はすっかり様相を変え、新緑の薄芽はすでに濃緑の若葉に成長していた。

季節遅れのフジの花が、濃厚な緑の山肌に、紫色の彩りを添える。見上げればどこまでも青い空に、千切れ雲が白く浮かんでいる。日差しは変わらずきつかつたが、山を分け入るにつれて空気はぴんと張り詰め、谷間を走る溪流の爽やかな音と共に、汗ばんだ体を冷やしてくれた。

仙境とも見まごつ美しい奥山の小道を、一頭の馬に小荷物を乗せて、私たちは連れ立つて歩いた。噂のお守りも、白木の小箱に封をして、馬の背にくくりつけてある。

樺山社までは山道を約三里。騎乗なら一刻もかかる距離だが、

険しい山また山の奥にあるため、徒步で4時間ほどを見越していった。「嬉しいな、朝芽とこうやって歩けるなんて。まるで観滝社殿に戻つたようね。」

水杖がはしゃぎながら言った。

主一人は馬を引いて先に立ち、私たちは従者の立場を意識しつつも、美しい景色に心も弾み、ついついおしゃべりに花を咲かせていた。

「炊事場のお当番はうまく決まったの？」

「手配はしてきたけれど、少し心配だわ」

夏草の香立ちこめる山道は確かに昔を彷彿とさせてくれたが、お旗女としての仕事の話が増えたのは、私たちの中の変化の一つだ。

「朝芽」

ふと、水杖が笑みを浮かべて私を見た。

「それで、どうなの。出石様とは？」

「ちょっと……やめて、そんな大声で」

私は赤くなつて、拒否するように手を振った。

「お城中の噂よ。危機に陥つたあなたを助けに、冷静な出石様がすさまじい活躍をした話」

「あ、あれは……」

思わず絶句する。つい半月ほど前のお書物庫での事件がよみがえり、私はぶるつと首を振つた。

「誰だつて同じことだつたわ。凌介様は部下を大切にされる方だもの」

噂は間違いではない。私が今こうして元気歩いていられるのは、凌介様がそれこそ命がけで助けて下さつたからだ。

でも、それ以上の意味を考えることは、今は僭越に思えた。

「来て下さつた、それだけでもう十分よ

「……そうね。ごめんね」

その声に一抹の寂しさが含まれているように聞こえて、私は思わず友の顔を見た。水杖は少し目を伏せて歩いている。

「……助かつたからこいつやつて笑い話にも出来るけど、朝芽は怖い目に遭つたんだものね」

「いいのよ。済んだ話だわ。」

私は明るく言つた。あの事件の後はしばらく夜も眠れず、駆けつけた水杖によく慰めてもらつたものだった。

「水杖、なにかあつたの？」

「つうん」

言い渋る水杖にあれこれ聞いてはじめてみると、やがて、一つの出来事が浮かび上がってきた。

つい先日のことである。

真咲家には、水杖のほかにも幾人かの下働きの女性たちがいる。彼女たちの主な仕事は、炊事や洗濯と言つた日常の雑務だが、主である真咲様の起居に深く関わる者もいて、中にはゆくゆくは主の傍らに……と思いをかける女性もいるらしい。

真咲様は派手好みで、性格も豪胆な威丈夫だ。色鮮やかに染められた京風の鉢金に、先祖代々の深紅の鎧。鎧の下に着る軍衣もあでやかで、黄金色の長槍を突いて馬上にある姿などは、まばゆいばかりの輝きと存在感を放つ。毎晩の酒量も豪傑にふさわしく、酒樽を抱えてあちこちの軍營で飲み明かすとか。それでも一線をピタリと引いているところがあり、浮いた噂ひとつ聞こえないのは、御奉公一途な一面も強く持つているのだろう。

そんな主を持つ真咲家の女中たちにとって、この度お側に上がった新参の水杖の存在はかなりの脅威と映つたらしく、

「あのような小娘に先を越されでは」

と、嫉妬と焦りの波が彼女たちの間に広がったとか。勿論、水杖はお役目第一と心がけ、明るく勤めて来たのだが……。そんな先日、奥女中の中でもひときわ美貌で有名な一人が、下城する真咲様に大膽に言い寄つたと言うのだ。

「聞きましたわ、殿のご親友が、一旗女の為に勇を奮つたお話を。

殿も、もしわたくしが危うい目にあつたなら、助けてくださいまし
ね……？」

大人の色香でしなだれ続けるその女性を、最初は軽くあしらつて
いた真咲様だったが、その言葉を聞くやいなや、すさまじい大声で
怒鳴りつけたそうだ。

「馬鹿野郎！ 甘えんじやねえ！ てめえの身くれえてめえで守れ
！ そいつが真咲家臣の心がけってえもんだろうが！ だから女は
めんどくせえ！」

雷のような大声に、妖艶な美女も顔色をなくして奥へ逃げ込み、
座は一度に静まり返った。水杖はその時、明日の調練の朱書きを持
つて別室に控えつつ、この一部始終を聞いていたのだった。

「影芳さまは、本当はお旗女も置きたくなかったのかかもしれないわ。
長浜の淀だからしぶしぶ従つていてるのかも知れない。あの方は戦場
や調練が何よりの生きがいでいらっしゃるから……。そう思つと、
私、なんだか自信なくしちやつて」

「水杖……」

そんなことない。

私は思つた。確かに武骨で単純な物言いが目立つ方だが、觀滝社
殿で水杖に見せた優しさは、今も私の中にしっかりと焼き付いてい
た。今日だつて、すぐにお供に呼んでいたではないか。

水杖を疎んじていらつしやるはずがない。

しかし、それを根拠に大丈夫よと、落ち込んでいる親友の背を押
す事はなんだか安易な気がして、私は結局何も口にすることができ
なかつた。

重い沈黙が辺りを支配したとき、

「おう～い！ お前ら早く来い～！ 休憩しようぜえ休憩！」

彼方で当の真咲様がのんびりと呼ぶ声がした。傍らで凌介様も振
り返っている。

気まずい呪縛がすつと解け、救われたように顔を見合させる。

水杖は大丈夫よ、頑張るわと言うように、につこりと笑った。私たちちはハイツと叫び、弾かれたように駆けだした。

(2)

「……最悪だ」

真咲様が凶悪な顔で天を仰ぐ。

「こりやないよな……」「……」

凌介様もため息をつく。

さつきまでの晴天がうそのようなすさまじいどしゃ降り。私たちは、騒ぐ馬を苦労して導きながら、大きな木の下に駆け込んでいた。天が光る。アッと思つた瞬間、すさまじい轟音が耳をつんざいた。激しい稻光。頭上をにわかに覆つた黒雲が、見る間に彼方の山を隠し、その中を蟻のようにゆるゆる進む私たちに、すさまじい牙を剥^むいている。初夏の嵐が、本格的に山全体を覆おうとしていた。

「不幸のお守り、早速発動つてか！」

落雷にいななく馬をなだめつつ、馬から自らの腰に巻きつけ直した白木の小箱を不気味そうに見ながら、びしょぬれになつた凌介様が苦々しげに言った。

「冗談じゃねえぜ！ あと何里だ！」

吹きすさぶ暴風に逆らつて、真咲様が叫ぶ。

「さあてね！ 迷子にならなければ二里つてどこか」

私と水杖は、馬の背から下ろした荷物を、急いで雨よけの油紙で巻いていた。大木の下とはいえ、横殴りの雨は容赦なく吹き込み、荷物も、着物もすでにぐしゃぐしゃだ。

稻光がまたも天を切り裂き、落雷の度にどおん！ と大地が揺れる。

不安そうに上を見ていた凌介様が、意を決したように叫んだ

「ここはまずい。出るぞ、影！」

「正気かよつ！　この雨だぞ凌介！」

真咲様が叫び返した瞬間、

ピアツ！　と閃光が辺りに走り、

ズッガアアアン！

大音響と共に地面が揺れた。空気が爆発したかのような衝撃。反射的に私は水杖の手にしがみついたが、その手が引きちぎられるようにして離れ、私は単身、どしゃ降りの山肌に吹っ飛ばされた。今の木に落ちたんだ！

思った瞬間、急な斜面に叩きつけられ、頭が真っ白になる。私の頭上で空荷の馬が棹立ちになり、どうっと足を滑らせて倒れ込む。次の瞬間、その姿は巨大な壁のように私の上にのしかかつてきた。考えるよりも早く思いきり横に体を投げ出す。泡を吹いた馬の巨体が、すれすれのところを地響き立てて転がり落ちる。手綱が生き物のようにつねつて私の足を払つた。あつと思った時には、私の体はバシャン！　と引き倒され、馬の後を追つて、泥で滑る斜面を転がり始めていた。

「ああっ……！」

夢中で周りの小石をつかむが、爪がむなしく泥しぶきを飛ばすだけで全く手ごたえがない。足の先には狂奔して落ちていく馬、その更に先には深い谷間がぱっくりと口を開けている。

「凌介！　朝芽が落ちた！」

水杖をつかむように引きよせた真咲様が蒼白になつて叫んでいるのが、頭上にちらりと見えた。

見る間にその姿が遠くなつていいく。

狂奔していた馬の姿がすつと見えなくなつた。

絶壁から落ちたのだ！　続いて私の足元いつぱいに、暗く蒼い谷間が開け、もう駄目…っ！　と觀念の眼をつぶつたその瞬間……！

ガツと腕を掴まれて、体がガクン！　と宙づりになつた。間一髪、私の体は宙に乗り出すようにして止まつた。小石がばらばらとはる

か下方へ降り注ぐ。

「目的地はそつちじやないって！」

全身泥だらけの凌介様が、引きつった笑みを浮かべつつ、間一髪
引き止めてくれたのだ。

真咲様の叫びに、崖道を飛んできてくれたのだろう。

「す……すみません、私……」

「いいつて！ 歩けるか！」

そのますさまじい力で引き揚げられ、たくましい腕に支えられる。泥土でずるりと滑る足元を慎重に踏みしめつつ、私たちは一步
一步、険しい斜面を上がり始めた。

「馬が……」

「ああ。気の毒だったな……」

低くつぶやいた凌介様は、パッと振り払うように顔をあげて、

「チッ！ 想像以上の神通力だ。どこまで不幸を呼ぶんだか！」

忌々しげに腰の小箱をにらみつけた。私も思わず、その小箱を見つめた。

「しつかりつかまつてろよ、朝芽。もうひょっとだから」

私の視線に気づいたのか、凌介様が不自然に明るい声を上げる。

真咲様と水杖が、懸命に手を差し出してくる。

しつかりとその手につかまつた時、私の全身に初めて震えが襲つ
てきた。

続く

不幸のお守り・中編

(3)

山中を激しく叩いていた雨は、夜に入つてようやく小ぶりになつた。

私たちがほうほうの態で渓流沿いに立つ小さな茅葺小屋に転がりこんでから、数刻が経つていた。

この小屋は元々、樺山社かばやまやしろを目標する参詣人たちの休息所として作られたもので、中は広く小綺麗で、土間には簡単なお台所も設けられている。

幸い濡れずに残つていた乾いた小袖に手を通し、かまどに備えてあつた竹の細木をくべて火をおこし、それを囲炉裏いろうの炭に移した。主たちもドロドロになつた肩衣かたぎぬを着替え、凌介様は簡素な一重の小袖、真咲様まさきはもう肌脱ぎになつて、囲炉裏に赤々と燃える炎を囲み、低い声で話しこんでいる。

水杖は先ほど、汚れた衣服をすすぎに裏手の渓流へと降りて行つた。

「危ないから、井戸端いどばにしては」

と案じたのだが、水杖は大丈夫よと言つて笑つた。

「私が水辺を好きだつてこと、朝芽あさめも知つてゐるでしょ？」

それは、傍から聞けば明らかに奇異な会話だつたが、その言葉が含む真の意味を私はよく知つていた。

「それに主お一人の肩衣や袴を、汚れたまま放つておくわけにもいかないわ」

「そうね……でも、気をつけて。」

にこりと笑つた水杖に洗濯を任せ、私は厨房で簡単な夕餉の支度をすることにした。持参の栗飯を炊くくらいしかできなかつたが、

竹棒を片手にかまどの火を調節していると、凌介様がすつと傍らにやつて来て、薪をくべるのを手伝つてくれた。

「真咲のお旗女どのは？」

「お召し物の汚れを落としに参りました。すぐに戻ると思います」

「そうか。真咲が気にしていたから。すまないな、話し込んでいて。

今夜はもう休み、明日早く出ようか」

「はい」

それは他愛もない会話だったが、私は頬に血が上るのを抑えることができなかつた。失礼なことだと思いながらも、傍らにしゃがんだ凌介様に、つい目を向けてしまう。まだ濡れている栗色の髪が端正な顔に無造作にかかり、より精悍な顔立ちに見えた。唇を引き結び、瞳を伏せがちに薪をつつく頬には、炎が作る濃い影が落ち、普段の明るさに似合わず、まるで何かを憂いでいるような表情にも見える。ぐいとたくしあげられた一重の袖口からのぞく一の腕はたくましく、竹棒を握るだけの動作にもなにか張り詰めた力強さを感じた。この腕に、何度も支えてもらつたことか……。思い返すと、ますます頬が熱くなる。

「朝芽もひどい目に遭つたな。怪我がなくてなによりだつた」
ぱちぱちとはぜるかまどの炎に照らされながら、凌介様は沈んだ声で呟いた。が、次の瞬間、

「元凶の元……見るかい？」

不意に腰の木箱に手をかけると、いたずらっぽい笑みを浮かべてこちらを振り向いた。途端に憂わしげな表情は消えて、魅力的な笑顔が照らし出される。

「よろしいのですか？」

額ぐと凌介様は、嚴重にくるんであつた布をとき、白木の小箱を帯紐から外した。主命の小箱は、さすがに汚れていない。封を切り、ふたをそつとずらして開けると、真綿にくるまれた「お守り」があらわれ、私はちょっと息をのんだ。

しかし、凌介様の指がつまみあげたのは、なんの変哲もない小さ

な赤い守り袋だった。門前町の縁口で売られているものと殆ど変りないよう見える。

「朝芽はどう思う。これは本当に不幸のお守りなのか……」

主の声に、じつと目を凝らして差し出された手のひらを見つめる。ふと、私の脳裏に響くものがあった。それはかすかな声……いや、耳に聞こえたわけではないが、敢えて言つなら頭の中にピン！ と響いた小さな波紋だつた。

改めて、真剣に覗き込む。

頭の中に、ふわっと、まばゆい光が走った。汗が薄くにじみ出す。間違いない。このお守りには、不思議な力がこめられている。それが何かは解らない。このままなのか、これから成長するのかも見極められない未知の力だ。

唯一つ確信できたのは、このお守りには邪氣がない、ということだった。とても意外だったが、これは人に害を及ぼす力ではない、とはつきりと解つた。しかし、そうすると昼間のあの一連の災難は……偶然だったと言うのだろうか。

「なにか……解つたのかい」

凌介様の声に、私はハッと我を取り戻した。少し迷つたが……私はやがて首を振つた。

感じたことを素直に語るには、あまりに言葉が足りない気がした。現実離れしすぎていて、それに解つてもらうには、すべてを語らなければならぬ。わたしが、なぜそれを感じることができるかと言うことも。

「……そうか。朝芽になら解ると思つたんだが」「なぜですか」

驚いて顔を上げる。凌介様の表情は変わらない。

「朝芽には俺たちと違う、不思議な何かが見えてるんじゃないかつて思つてさ。ほら、半月前、山賊の妖術使いに襲われた時も……」

……そうなのだ。稀代な妖術操る山賊頭、渕上幻奇。あの時私

ふちがみげんき

は、つい、普通なら見えないはずの彼の妖気に反応してしまったのだ。

凌介様は、今までずっとそれを不審に思っていたのだろうか。自分の身命を預けるはずのお旗女が、得体の知れない力を持つている、と、不気味に思われていたのだろうか……。

責めた目に気づいたのか、凌介様は不意に明るく笑つた。

「でもさ、関係ないって。もしも見えたなら便利だつてだけのことだろ？ 妙法院様のいる長浜忍軍だつて、大概不可思議な術を会得しているつて聞くしね。朝芽が言いたくなれば言わなくていい。俺も聞かない。だから、悩むなつて」

明るい声を裏付けるように、凌介様の黒々とした瞳が、炎に照らされて楽しそうに揺れているように見える。

「曖昧なものは、曖昧にしとけばいいことさ。このお守りも……」

と凌介様は、素早く小箱の蓋を閉めると

「返せばおしまい、つてね」

両手をパンと膝の上に落とした。

その仕草がおかしくて、わたしはクスリと笑つた。胸に温かいものが満ちるのが解つた。無意識なかもしないが、凌介様は、私の不安をいつも笑い飛ばして下さる。だから、側にいるといつも、とても落ち着くのだ。今夜もまた、彼は私を安心させてくれている。

「しかし……不幸のお守りとはよく言ったもんだ。こんなちっぽけなモノに、今日みたいな災難を呼ぶ力があるなんて」

天井を仰いでため息混じりに言う凌介様に、私は静かに話しかけた。

「そうですね。でも……」

「ん？」

「これは本当に、その……不幸を呼ぶだけの存在なのでしょうか」
「そう言いながら私は、先程の美しいとも言える思念の波を思い出していた。」

「……？」

凌介様が小首をかしげて、怪訝そうにこちらを振り向く。

「……私は一年前、故郷の村を捨てるよつとして出てまいりました。」

「……」
揺らぐ炎に照らされながら、私は、水杖と共に觀滝社殿に入った
いきをつを、ぽつぽつと話し始めた。なぜ村を出ることになったのか。
その理由を詳しく語る事はまだ出来なかつたが、それは凌介様
に初めて語る、私と水杖の重要な過去の一部分だつた。

「……私たちは傍から見れば、故郷から追い出され、逃げだした不
幸な娘と思われるかもしません。だけど、私たちは自ら決めて村
を出たのです。あの時は辛くて、あまり自覚は無かつたけど、その
おかげでとても満ち足りた今があります。そう思えば、故郷を失つ
たことも不幸であったとはいえない。人の生涯を通して、苦しみ
と喜びは、別々の物ではなく、どこかでつながつているのかもしれ
ません。これは本当は、それを教えるためのお守りかもしれないと
……ふと、そんな気がしたんです」

凌介様は黙つて耳を傾けていたが、やがて静かに言った。

「なるほどね。そう聞くと……今日のことだって全部、俺たちに油
断があつたとも言えるよな。滑りやすい崖の上で立ち止まつたこと、
落雷の危険のある大木の下にいたこと。省みることなく、全部こい
つのせいにしちまうことが、即ち不幸なのかも知れないな」
自分で決めて進む道なら、失敗はあつても不幸は無いよな。」

そう言つてにこりと笑う。あの魅力的な笑顔が、また現れる。

「そう、思います。」

私も笑みを返した。

お仕えして約2カ月、これほど色々と語り合つたのは、初めてだ

つた。凌介様は、元々喋るよりも聞く方だと解つてはいたが、それでも、私のような一従者の言葉にまで、真摯に頷いてもらえたことは嬉しかつた。

故郷と決別したおかげで、私は凌介様に会えたのだ。

それは、私にとつて、数多の艱難辛苦に代わる喜び……。穏やかなひと時が突如破られたのは、うつむいてその思いを噛みしめていたその時だつた。

真咲様が、血相を変えて駆けこんできたのだ。

「大変だ！鉄砲水だ！ 土砂が押し寄せてくるぞッ！…」

「何だと……！」

弾かれたように凌介様が立ち上がる。天井からかぶさるよつこ、ゴオツという恐ろしい音が聞こえてきたのはその直後のことだつた。

「小屋から離れろ！」

壁に立て懸けてあつた刀をつかみ、真咲様が叫ぶ。私は手に触れた荷物を見る間もなくわしづかみにすると、主たちの後に続いて真つ暗な戸外へと走り出た。

「こっちだ！ 岩の上に逃げろ！」

真咲様が先に立つて誘導する。すさまじい轟音が頭上の斜面から降り注いできた。それは小木をなぎ倒し、たつた今私たちが座つていた小さな小屋を押し流した。茅葺の屋根が紙のように折れて、泥の中に飲み込まれる。泥流はそのまま真下の渓流になだれ込んだ。かまどの煙が悲鳴のように白く上がるのが見える。そのすさまじい光景を横目に、間一髪、私たちは渓流に突きだした、巨大な岩の上に這い上がつた。

「おい、あいつを知らないか！」

真咲様が血相を変えて叫ぶ。

水杖の姿がないことに、その時私は初めて気づいた。

「一緒にじゃなかつたのか」

凌介様が立ち上がる。

「川まで下りたが、暗くて見つけられなかつた。行き違つたかと小屋に戻つて来た時、鉄砲水に気付いたんだ！　あいつ、どこにいるんだ！　ちくしょう、これもオヤジのお守りのせいなのかよお！」

田代の剛胆さを忘れたように、真咲様が憑かれたように口走り、おろおろと岩場の上を歩きまわる。凌介様の冷静な腕が、その肩を落ち着かせるようにぐっとつかんだ。

「影！　落ち着け！…………とにかく落ち着け。川辺まで降りて呼んでみよう。朝芽はここにいる。だが、危険を感じたらすぐ俺たちの方に来いよ」

言ひや否や、その姿が、暗い岩場を素早く伝い出す。

「おい、ちょっと待て凌介！」

慌てて真咲様が後に続く。私は一人、岩の上にとどまつた。

鉄砲水は、ひとまずおさまつたようだ。しかしいつまた崩れるか解らない。今いる岩場はかなり頑丈で高く突き出しているため、安全なようだが、下に降りた一人の主は、逆に危険にさらされているとも言える。

水杖、どこ……！　早く戻らないと、危ない！

祈るような気持ちで、岩の上に立ちあがつて、流れに目を凝らす。

……居た。

水杖は、すぐ田の前の、水の中にいた。

それは文字通り水中に、と言ひ意味である。闇夜の暗い濁流の中でも、私にはその姿がはつきりと見えた。胸にしつかりと抱えられた真咲様の華やかな肩衣の模様が、錦鯉のように翻つて見える。彼女は濁流の中を自由自在に……泳ぎ回っていた。

おそらく水杖は、不意に押し寄せた鉄砲水に呑まれたのだろう。しかし、彼女は荒れ狂う濁流に身を任せ、敢えて水の中へと身を沈めたのだ。彼女の姿は、流れに乗るようでもあり、また自在に踊っているようにも見えた。白い姿が、ひらり、ひらりと渦を巻く急流

の中で動いている。流されることもなく、流れに逆らうこともなく、その様子は、まるで美しい静かな湖を伝説の人魚が泳いでいるかのようだ。

そんな友の有様だつたが、私が驚くことはなかつた。闇夜の川に、一人で洗濯に降りると言つた時から、心構えはあるのだろうとある程度想像はついていた。私と同じ、水杖も選ばれし者……お旗女なのだ。

やがて、水の上を流れる泥流の勢いが弱まつた頃を見計らつて、水杖は水面に顔を出した。

私は叫びながら大きく手を振つた。水杖がにつこり笑う。夜の濁流に浮かぶその白い顔を、何も知らない人が見たら、あまりの妖しさに肝をつぶしたかもしれない。

「水杖つつ！」

突然、下方の岸辺で叫び声がした……と思つた瞬間、ザブン！

大きな人影が水中に踊りこむのが見えた。

真咲様だ！

私とほぼ同時に、真咲様も浮かび上がつた水杖の姿を見つけたに違ひない。おそらく水杖が溺れていると思って、動転されたのだろう。そして真咲様はためらいもなく、濁流に飛び込んだのだ！

「影！ 待てっ！」

近くで凌介様の鋭い声がしたが、真咲様は濁流にもまれるようにして水杖の方に向かつて泳いでいた。しかしあまりに水の勢いが強く、その姿が闇の中に浮いたり沈んだりしている。私は息をのんだ。あの武人の代表のような頑丈な真咲様が、かなり苦戦しているようだ。

水杖が、濁流の中必死でこちらに近づこうとしている真咲様に気付いた。その目が大きく見開かれる。

しかしそれも一瞬のこと、ためらいなく水杖は水中に潜ると、真咲

様の横にすうつと泳ぎ寄った。真咲様のたくましい腕が水杖をしつかりとつかむ。急流でほとんど体制がとれず、ばしゃばしゃ水を跳ね散らかしている真咲様を、水杖はそれと解らないようこうそくと支え、徐々に岸辺にと近づいてきた。

私は岩から降り、凌介様の元へと走った。

暗い中、凌介様も水杖の本当の動きには気付いていないだろう。誰が見ても、真咲様が濁流から水杖を救った、そう見えるはずだ。それで良かつた。水杖もそれを願っているはずだ。やがて、岸辺から身を乗り出すようにして差し出された凌介様の手を真咲様がしっかりと握り、ずぶぬれの一人が水から引きあげられた。

「お前つ……。溺れるかもしけねえって時だったのに……！俺たちの肩衣を離さなかつたのか！？」

両腕を地面についてぜえぜえ喘ぎながら、水杖の抱えているものを見た真咲様が、仰天したように言った。

「馬鹿野郎！ そんなもんにこだわって、お前に万一事があるたらどうすんだよ！」

うつむく水杖に、真咲様が雷のような声で怒鳴りつける。その声が震えている。

「お前がいなくなつたら、誰が調練の後俺の背を流してくれるつづうんだよ！」

「……そんなことさせるなつて」

凌介様が呆れたように、横でつぶやく。

「うるせえ！ こいつがしたいつづうんだからー！」

狼狽したまま真咲様が怒鳴り返す。

水杖は泣いていたが、それが嬉しく泣きだと言つことが、私にはよく分かっていた。

続く

(4)

激しい山中の一夜も、ようやく明ける時が来た。

昨夜の嵐は東へと去り、頭上の空は美しく晴れ渡っている。しかし田を転じれば、山道に倒れた巨木やまき散らされた葉っぱ、そしてまだ「ひづり」と鳴り騒ぐ泥で濁つた渓流の音が、嵐の痕跡を色濃く残していた。

太陽が辺りを照らし始めた早朝、私たちは目的の地、樺山社に向けて出発した。山氣立ちこめる杉木立に金色の太陽光が斜めに差しこみ、それを受けて朝露がきらきらと珠のように輝いている。それは仙境のように美しい光景だった。

しばらく歩くと、木立の合間や石段の影に、小柄な白木の鳥居がちらほらと見られるようになった。

「小さな祠がたくさんあるだろ。この山はもつ、社の敷地内だから」
凌介様が説明してくれる。

丹塗りの大きな鳥居門をくぐった。それまで眺めて来た野ざらしのものとは違い、こちらは入念に磨かれている。素朴な山中には不似合いなほど、それは巨大な人工の柱に見えた。樺山社の境内に入つたのだ。正殿まではまだ少し山道を歩かなければならぬが、ここまでくれば、と言つ女堵がようやくこみ上げてくる。

「あと少しだ」

朗らかな凌介様とは対照的に、真咲様は元気がない。^{まさき}今朝からあまり口を開かず、とぼとぼと最後尾についてくる。^{みなづえ}水杖がちらちらと心配そうに様子を見ているが、それにも気付かない様子で眉間にしわを寄せ、何か考えこみながら歩いている。

「おに影、どしたの」

吊り橋を従えた最後の険しい崖道に差しかかつた時、とうとう先頭の凌介様が振り返った。私たちも足を止める。

「季節外れの水練で、腹でも壊したか」「にやりと笑つた挑発にも乗らず、少し沈黙した後、真咲様は深刻な顔でぼそぼそと話し始めた。

「昨日は朝芽が崖で滑つた。昨夜は水杖が濁流に落ちた。……ってことは、次は俺か凌介じゃねえか」

「なんだよ、影。おまえ、こいつを信じてんの？」

腰に下げた小箱を軽く叩いて、凌介様がからかうように答える。

「まさか、怖いのか？」

「バカヤロウ！　俺は戦なら何も怖かねえんだよ！　だが、こんな得体のしれねえ……この前の妖術野郎もそうだったが……田に見えねえ摩ま詞が不思議は調子狂つんだよ！」

躍起になつて真咲様が喚ぐ。その声は莊重な朝の空氣をビンビンと震わせる。

あまりにその様子が深刻なので、私たちは思わず顔を見合せた。昨夜から真咲様は中々落ち着けていない。水杖がクスクス笑っている。

「解つた解つた。ほら、行くぞ。吊り橋渡つたら、正殿の屋根が見えるだろ」

凌介様が軽くいなす。真咲様はまだ気持ちの整理がつかないようで、ぶつぶつ呴きそわそわとあたりを見回していたが、崖の傍に小さな道祖神が祭られているのを見た途端、ぱあっと顔を輝かせた。

「よつしゃ！　皆でお参りしていこうー。厄除けだ厄除け！」

「もう、すぐそこだぜ？」

凌介様が呆れたように言つたが、真咲様はてんで構わず、「なんでもつと早く思いつかなかつたんだ俺はあ！　最初つから道々、こつやつて厄除けしてきやあ良かつたんじやねえかつ」

不安が解消した満面の笑みで崖の祠に走つていく。

「厄除けって……どうやるんだよ

凌介様がぼやぐ。真咲様のどなり声が彼方から追いかぶせるよう
に響く。

「いらっしゃい凌介！ お前も祈れ！ その辺にもう一つあるだろ！ 水
杖は朝芽と吊り橋の向こうだ！ 渡つたところにも一つあったぞ！」

「つるせえなあ」

凌介様が肩をすくめて、真咲様の方へ歩き出す。私たちは顔を見
合わせたが、真咲様が早く行け！ とばかりに腕をぶんぶん振り回
すので、先に吊り橋を渡ることにした。水杖がこらえきれずに笑い
出す。私もクスクス笑った。

「お前ら！ 心こめて祈れよ！ あと少しだが、誰に何が起ころるか
解らねえぞ！」

歩き出した私たちの背中に、真咲様の大声が追いかけてきた。

吊り橋を渡ると、真咲様が言われたとおり、林の中に一つの祠が
ひっそりとまつられていた。切妻屋根に觀音開きの、木で造られた
小さなお堂。それは何年もの間風雨にさらされて固く縮こまつてい
るように見える。参詣者が供えたのだろうか、素朴な野草の花がま
だ瑞々しい。

一人で地面に膝をつき、礼拝する。

「どうか、度重なる災厄から、私どもをお守つてくださいませ

静かに手を合わせた時だった。

ふと、頭の中に何かが響き渡った気がした。

いや、気のせいではない。それは、どこか懐かしい小さな波紋。

「あ……？」

私は額を抑えた。水杖が驚いて振り向く。

「朝芽？」

波紋は收まらない。それどころかどんどん強く、深くなっていく。
苦痛は無い。しかし、厳かに研ぎ澄ませれた念波が、見る間に私の
脳裏にあふれ返つていく。

これは……！

突然私は、昨夜の出来事を思い出した。

あのお守りだ！

この感覚は、凌介様の手のひらのお守りを見たときに感じたものだ。邪氣はない。ただ、前夜のお守りとは比較にならないほど、今度の思念は深く、重い。

「……っ！」

私はついに両手で顔を覆つてしまがみこんだ。水杖があわてて肩を支える。

「朝芽どうしたの！ しつかりしつ！」

「大丈夫……」

弱々しく答えた瞬間、頭の中におじやかな思念が響き渡った。

それは声と言つたものではなかつた。敢えて言つなら、黄金色の思考の波とでも言つべきか。混乱する頭の中に、それは弾けるように伝わってきた。

『……姫。……杆築村五郷鬼神社の姫、……』

私は顔を上げた。

間違いない。目の前の祠の主が、私に話しかけているのだ！

『……我が身は樺山の辻神なり。乞つ、汝なんじ我が力もて、我が魂たまの欠片を碎け』

「魂の、かけらを……？」

呆然と呟く。それは、あの……お守りのこと……？

『我過ちて、我が魂の欠片塵界じんかいに送れり。良き光悪しき影えぬれば、汝が手で清め給われ』

あのお守りは、では、この祠の神様が、間違つてお創りになったもの……？

「朝芽！ どうした！」

不意に凌介様の良く通る大声が、彼方から響いた。と同時に、脳

裏を覆っていた美しい思念がかき消されたように消えた。現実の光景がどうと目の前に溢れ、思わず地面に手をついてしまう。

「待つてろ、すぐ行くから！」

振り向くと、凌介様と真咲様が吊り橋を駆け渡つて来るところだつた。私たちの様子がおかしいことに気づいてくれたに違いない。

「良かった、顔色が戻つたわ。具合はどう？」

肩を支えながら水杖が、ほつとしたように私の顔を覗き込んだ。どうやら水杖には今の声は聞こえなかつたようだ。

「ごめんね、もう……大丈夫よ」

微笑み返したその時だつた。

私たちのすぐ後方で、ブツンッ！ と嫌な音を立て、何かが空中にパアツと散つた。

愕然と振り向く。

それが、吊り橋を支えていた巨大な白綱の破片であると解つたのは、すぐそのあとのこと……。

一瞬の内に分解した吊り橋が、バラバラとすさまじい音を立て、主一人を乗せたまま、恐ろしいほどゆっくりと深い谷底に落ちいく光景が、呆然と見開いた私の瞳に映つたのだつた。

(5)

「影芳さま……！」

悲鳴をあげ、水杖がだつと走りだす。

恐怖で膝が折れそうになるのをこらえながら、私もあわてて崖の淵に走り寄つた。

必死で、谷底を覗き込む。

すぐ側で、水杖がああ、と安堵のため息をつくのが聞こえた。私も、ふうっと、肩の力を抜いた。

ズタズタに裂けて垂れさがる支え綱の一本に、からうじてしがみついている主二人の姿が、目に飛び込んできたのだ。

無事だつた……！

おそらく吊り橋を支えていた首綱のあちこちが、 昨夜の嵐で傷ついていたのだろう。そこを私たちが無造作に渡り、 次に主たちが走つた衝撃で、突然切れてしまつたのだ。

一人がつかんでいる白い支え綱は、一見頑丈そうに見えた。しかし眼下に落ち込む深い谷底に目をやれば、それはまるで一本の蜘蛛の糸のように細く頼りなく見える。これが宙づりになつた壮健な若者一人をいつまで支えていられるのだろうか……。

真咲様の方が上方にいた。必死で命綱にすがりつき、それでも元気よく喚いている。

「くつそおお！ やっぱり不幸が出やがつた！」

「幽靈じや……あるまいし」

真咲様のすぐ足もとで、同じくしがみついている凌介様のいつも落ち着いた声が聞こえ、私は胸をなでおろした。

お一人とも、怪我はなさそうだ。

「凌介！ 早く足場を探れ！ 登るぞ！」

騒ぐのをやめ、一転、表情を引き締めた真咲様が下に向かつてどなる。その顔が不意に硬直した。

「凌介……おい凌介聞いてんのか！」

恐怖で心臓が跳ね上がる。凌介様の様子がおかしい。深く身を乗り出した私は、あつと息をのんだ。

凌介様の足元で、かなり大きな橋板の残骸が、二枚重なり、不気味に空中に浮かんでいる。それは一見不思議な光景だつたが、よくよく眼を凝らした私の前に恐ろしい状況が浮かび上がってきた。

凌介様の腰紐には、お守りの小箱が例によつてしつかりと結わえ付けられていた。その小箱が、分厚い一枚の橋板の隙間にがっかり

と食い込んでいる。板が浮かんで見えたのは錯覚で、実際は凌介様の腰に、お守りの小箱を仲介にして、重量級の厚い板一枚がおもりのようにぶら下がっているのだ。

やはりあのお守りには、何か不思議な力が宿つているようだ。普通ならとっくに重みで引きちぎられているはずなのに、小箱も紐も平然として巨大な板に引っかかったままだ。しかしその重量は容赦なく、凌介様の腰にかかりっている。

凌介様は、それでも片手と両足で全体重を支え、もう片手で刀の目抜き釘を引きぬき、何とか腰紐から小箱を切り外そうと苦戦していた。しかし板の重みがあまりに強く、嚴重にくくられた結び目が更に固く締まって中々小さな刃が通らない。片手に加えて、体をねじった無理な姿勢に、次第にその顔が青ざめていくのが解つた。更にすさまじい重さでぴんと張り詰めた腰紐が、思いきり腹部を圧迫している。

「凌介！ 何やつてんだ！ 刀で斬れ！ 早く斬れ！」

何とか手を貸そうと、めいいっぱい腕を伸ばし悲痛な声でわめく真咲様に、凌介様はがっくりとけぞりながら、大きく息を吐いた。

「……だめだ。この姿勢では抜けない。……影、すまん。」

「なんだとつ」

「どうやら……ここまでみたいだ」

「馬鹿野郎！ 死んでもあきらめるな！ い、いや、死んじゃいけねえ！」

その言葉に、私は凍りついた。あの重さでは、ゆくゆくは命綱が持たない。真咲様を救うために、凌介様は……自ら手を放す覚悟を決めたのではないか。

「凌介様！ 諦めないでっ！」

思わず叫ぶ。凌介様が汗だくなつた顔をゆっくりと上げた。視線が合つた。引きつった主の口元。視線が私を捉え、かすかに首を振つた。それが別れの合図だと悟つた私は、やにわに体を起こすと後ろに向かつて駆けだした。

お願い、凌介様！ どうか、どうか今しばし持ちこたえて……！

殆ど滑り込むようにして、先刻の小さな祠の前に駆け込む。息を整え、地に膝をついた。両手を固く握りしめる。ぱっと顔を上げた私は、心の底から声を振り絞つて叫んだ。

「祠の主よ、汝の願い聞き届けたり！ 迅く、我に力を給わらん！」

お願い、間に合つて……！

その瞬間、黄金色の思念が怒涛のように私の中に流れ込んで来た。瞳が輝く。体の底から力がわき起こつてくる。

足元で風が巻き起こつた。跳ね起きた私は、その風に乗つて飛ぶようになだれに駆け戻つた。水杖が突然とこの様を見ている。

私は崖に立ち、まだかろうじて持ちこたえていた凌介様を見つめた。真咲様が下に向かつて何か叫んでいる。凌介様は固く目を閉じ、歯を食いしばつていたが、やがてゆっくりとその手から力が抜けていき……。

凌介様！ 蹄めちや駄目ーっ！

心が絶叫する。ハツとしたように凌介様が目を見開いた。その手に一瞬、力が戻る。その瞬間、私は思い切り両腕を前に突き出し、体中にななぎる力を一気に前方へと押し出した！

黄金の光がほとばしる。それはお守りの小箱を直撃し、橋板ごと吹き飛ばした。木枠が砕け、赤い守り袋が空中にふわりと投げ出される。それは一瞬宙に止まつたかのように見えたが、やがて青い炎を噴きながら、橋板の残骸を引き連れて舞うように谷底深く落ちて行つた。

すさまじい重みから一度に開放された凌介様は、がくんと腕を伸ばしてぶら下がつた。落ちる！ と一瞬私は青ざめたが、鍛えられた主の両腕はしっかりと命綱を握つていた。その肘を、真咲様の腕ががっちりとつかむ。

「おらあ凌介！ 気合入れろや！」

凌介様が、汗だくなつた顔を上げる。やがて二人はゆっくりと、綱を伝つて登り始めた。

ようやくこちら側の崖に這い上がつた主二人は、仲良く地面に倒れ込んだ。慌てて駆け寄る。

「俺たちや生き残つたぜ！ 不幸のお守りめ、ざまあみろい」

大地に辿り着いて安堵したのか、天を仰いで高笑いしている真咲様に、水杖が腰筒の清水を差し出していた。その目にはうつすら涙が浮かんでいる。

凌介様も地面に大の字になつて横たわり、真つ青な空を見つめていた。その胸が、大きく上下している。

「お怪我は、ございませんか」

激しい動悸を抑え、傍らに膝をつきながら尋ねると、笑みを含んだ大きな瞳が返事の代わりに私の方を向いた。軽く頷く。

「良かつた」

一度に体の力が抜けて、私はその場にへたへたと座りこんだ。心臓がばくばくと脈打つて、今にも胸が張り裂けそうだ。もしかしたら永遠に凌介様とは会えなくなつていたかもしない。その恐怖が今更ながらどつと押し寄せてきて、私は自分の腕で、固く自分の胸を抱きしめた。

「本当に、良かつた……」

くつとうつむく。不意に目の奥が熱くなり、どつと涙があふれ出す。

「朝芽……。顔……上げてくれ」

凌介様の優しい声。私は恐る恐る上を向いた。涙が頬を伝い、ぽとぼと膝の上で組んだ手の甲に落ちていく。

すつと、温かい手のひらが私の頬に触れた。長く美しい指が、私の涙で濡れる。凌介様はそのまま半身を起し、私と向かい合うよう

に座りなおした。その落ち着いた端正な顔が、穏やかな表情でじつと私の方を見ている。

「正直もう、駄目だと思った」

私の頬に掌を添えたまま、凌介様が静かに言った。

「だけど、手を放そうとしたとき、朝芽の声が聞こえた気がした。諦めちゃダメだと。だから腰のお守りが砕けた時、すぐに解った。朝芽が、助けてくれたんだな。」

涼やかな一重の大きな瞳が、まっすぐ私を見つめている。

「ありがとう」

しつかりと言った凌介様は、やにわに腕を伸ばすと、私を引きよせ……

そのままぐっと抱きしめた。

「どきん！」と心臓が跳ね上がる。力強くたくましい胸に包まれて、一度に頬が紅潮する。「とくん…とくん…」と、いつかお書物庫で聞いた凌介様の心の臓の音が、優しく耳の奥に響く。心の底から心地よい安堵の波が湧き起こり、私はそっと目を閉じた。そのままあふれる涙をぬぐうことも忘れて、私はただじっと、その温かい腕に抱かれていた。

それは、夢のようなひと時だった。

「大変だ、吊り橋が落ちてるぞ」

轟音に気付いたのか、やがて正殿の方角から多くの人々が走り出してきた。

「おお、『使者殿！』よくぞ御無事で」

衛士や、出仕の若者を多数引き連れた老年の宮司が、うやうやしくかけよってくる。

まずは本殿へ、と案内されるのを、ようやく起き上った真咲様が手を振つて止めた。

「もういいんだよ。目的の物はなくなつちまつたから

「……と、申しますと？」

怪訝そうな顔の宮司に、真咲様はすべてを語った。

備中殿に頼まれて、お守りを返しにここまで来たこと。

それから次々と不幸に見舞われたこと。

そして、最後に吊り橋と共にお守りは失われたこと。

「もう駄目だと思った瞬間、重さにやられたか、いきなり小箱が吹
つ飛んでね」

幸いなことに、あの時真咲様には、私が放った不思議な光は見えなかつたようだ。あそこで箱が砕けたのは、あくまでも偶然だと思つていらつしゃるようだつた。

「さようでござりましたか。」

真咲様の話に、じつと耳を傾けていた老年の宮司は、深々と頭を下げた。

「あのお守りは、我が社に熱心に参詣されていたさる老夫婦が、ふた昔ほど前、今生の形見にと奉納して下されたものでしてな。何でもこの辺りの祠で拾われたとか申しましての。以来、幸運に見舞われ、幸多き余生を過ごされたとかで……。縁起ものだと思つて、備中様に差し上げたのですが、それは、とんだ御災難でございましたな」

「なんだか評判と全然違つじゃねえか」

真咲様がポカンとつぶやく。凌介様が叱ツ、と小突いた。

帰城に先立ち、私は穏やかそうな老神宮に、崖のほとりの祠のことを少しだけ話した。勿論、私の身に起こつた数々の不思議な事象には触れずに、観滝社殿の名を借りて、手厚くお祭りするようにお願いしてみた。老宮司は快く引き受けてくれた。これである祠の社神様も、心静かに参詣人を見守つてくれることだろう。

水杖にはすべてを話した。

「神様も落し物をするのね」

と彼女はおかしそうに言つていた。どういう経緯でお守りが生まれたのかは、結局解らずじまいだつたが、祠の主は、寂しかつたのかもしない、とふと思つた。雨ざらしの林の中で、何百年もひとところに留まつてゐるその寂しい思いが、なにかのはずみで人界へとこぼれてしまつたのかもしれない。

杵築村五郷、鬼神社の姫……

脳裏の声がよみがえる。故郷と共に捨てたはずの名で呼ばれた事に、衝撃はあまり感じなかつた。ただそれは、忘れかけていた過去を彷彿とさせる、かすかな不安を心に芽生えさせた。それは今まで感じたことのない、これからの大未来に関する初めての不安だつた。不幸のお守り……

ふと、その言葉が去來した。

しかし私は、すぐにその言葉を打ち消した。
自分で選んだ未来なら、失敗はあっても不幸は無い。

私には、お仕えするべき大切な人がいる。支えてくれる友人がいる。彼らと共にある限り、わたしは迷うことなく前に進んでいける。

富司の言葉は、後に驚きと共に裏付けられた。

翌日、ボロボロになつて帰城した私たちに、備中殿が満面の笑みで告げたのだ。

“お守りのせいで”起きた備中殿のお屋敷の火事。焼跡の床下から、ご先祖が隠した黄金の武具が大量に見つかつた。なんでも、源平時代にさかのぼるとかで、破格の値がつけられたそうだ。

愛馬の足の怪我からは、放つておいたら命にかかる深刻な別の病気が見つかり、お陰で手遅れになる前に、専門の厩舎へと移すこ

とができたとか。

更に、流れた昇進先では後日お城ぐるみの不正が発覚し、もし着任していたら重大な責任を問われるところだったと言つ。

「あれはやっぱり幸運のお守りだつたのだ。頼む出石！ 真咲！」
後生だから取り戻してください！」

まだ少し痛い腰をかばいながら小袖に取りすがつた備中様に
「オヤジ！！ いい加減にしゃがれつつ！！！」
真咲様がブチ切れたとか…。

幸福か災厄か。結局、あのお守りの効力については、ついに結論が出なかつた。しかし青い炎を噴いて落ちて行つた祠の神の魂の欠片は、深き谷川の清流できつと浄化されたことだろう。

私たちを襲つた災厄も、備中殿に顯れたご利益も、ただの偶然だつたのかもしれない。しかし、あそこまで偶然が重なると言うことは、やはり人の運命を変える何か大きな力が働いていたのだろう。備中様はその後もしきりと悔やまれていたが、それほどの力を人が手にして、果たして良かったのだろうか。そう、自分に問いかけた時……

あの結末でよかつたのだ、と私は改めて思ったのだった。

頭上には、今日も青い空が広がり、中庭では、調練に向かう凌介様の大聲がしている。

私は矢立を胸に抱えると、夏の日差しの中へと駆け出して行つた。

続く

(一)

重たい梅雨空をまるで洗い流すかのような、激しい雷と豪雨の一
夜を経て、長浜はすっかり夏になつた。

青い空に真っ白な入道雲がむくむくと湧き起つている。

周囲を山々に囲まれた本城を中心とする長浜盆地は、連日猛暑に
覆われていた。

くつきりと豪快な夏空とは対照的に、今年はぬるりと蒸し暑い日
が多く、山に林にしじうしじうと鳴く蝉の声もビリビリなく元気がな
い。

夕立ちが多い割には水田はひび割れ、野にも山にもぐつたりとし
た空氣の漂つおかしな気候だった。

國中を震撼させる知らせが届いたのは、そんな真夏のある午後だ
つた。

辺境の城、坂遠城さかとおに、隣国が攻め入ってきたという。隣国守護、
舟原氏ふなはらは、長年にわたり土岐氏と国境を奪い合つ古敵で、中央から
の田たが届きにくい国境沿いの山岳地帯は格好の戦場となつていて。
この地は取られ、取り返しの泥沼の戦が何年も続き、数年前、とう
とう業じょうを煮やした土岐本軍が猛烈な追い討ちをかけた結果、晴れて
長浜の重要な領知じょうちとなつた。そこに防衛の拠点として新しく築かれ
た城が今の坂遠城である。

その坂遠城が、今再び舟原軍に攻められ、連日苦戦していると言つ。

辺境の凶報を受け、長浜中に緊張が走った。本城に駆け込む伝令の姿が日に何度も天櫻の高見櫓からも見受けられ、兵糧や武具などの救援物資が部隊と共にぞくぞくと坂遠城に送られて行く。

ここ天櫻城も臨戦態勢に入り、人々の動きが急激に慌ただしくなっていた。しかし、本城とは違い戦はまだ遠い空の下の話で、お城の空気には新しい冒険に挑むようなどこか陽気なもさえ漂つていた。

凌介様と真咲様も、ようやくぎっくり腰が治つた高砂備中守様と共に、連日の兵務に追われていた。

戦が始まれば、お二人は足軽大将……即ち一小隊の隊長として複数の組頭くみがしらを指揮する立場となる。長柄隊は全部で十三あり、それを束ねる侍大將さむらいだいじょうが高砂備中守様で、お二人もその差配下で戦場に臨むことになる。

今日もお一人は、早朝の調練の後に武具庫の検分を命じられ、配下の兵士と共に大量の鎧櫃よろいひつを次々と上げたり下ろしたりして働いていた。武具庫には戦時に使う武器や武具のほかに、様々な資料や陣幕などの戦道具も収められている。

凌介様は、次々と運び出される物具の中身を目録と照らし合わせていた。使えそうなものは打ち直して使い、傷みすぎているものは売つて軍資金に変える。単調だが頭を使う厄介な作業だ。私はその傍らで、上役から次々に届けられる命令書に目を通し、返書をしたためたり、目録に朱筆を入れたり、とあわただしく祐筆役を勤めていた。

庫内には、いにしえの面白い武具も多数仕舞われており、当時の華やかで仰々しい（そして数倍も重たい）鎧を見つけるたびに、真咲様が興奮している。

「すげえな、これ」

あでやかな紅梅糸の胴丸に目も覚めるような萌黄緘もえきあおどしの大袖を取り

出し、真咲様がうつとりと見入っている。虫に食われることもなく縁金も輝いているが、百年ほど前のしろものだろうか。

「それ別々の鎧だつて。売却だな」

「そんなこた解つてら。あああ、勿体ねえ！」

ちらりと見やつた凌介様が淡々と指摘し、真咲様は抱えた大袖を名残惜しそうに櫃の中に戻した。すべて天櫻の公の財であるため、たとえ捨てるからと言つても、勝手に持ち帰ることは叶わないのだ。

「こつちの短槍、穂^ほ先見てくれ」

凌介様は友の嘆きにはお構いなしに、どんどん作業を進めていく。水杖が姿を見せたのは、その時だつた。

「朝芽、頑張つてる？」

入口で書簡の山に埋もれている私に小声で挨拶した水杖は、顔を引き締めると庫内に向かつて呼びかけた。

「ご両名様、備中守様がお呼びです。すぐ本丸に来てくれと

「オヤジどのが？」

真咲様が汗だくの顔を上げる。

「解つた。」

床に雪崩た謎の小物を蹴つ飛ばしながら、凌介様がほこりだらけの姿を現す。

「すぐ行く。朝芽はここで留守居を頼む。暑いから、適当に休んでろな」

そう私に言つと、流れる汗をぬぐいながら凌介様は出て行つた。

「水杖もここで留守番するか。一人いればいいだろ。後でオヤジんとこから葛饅頭でもくすねてきてやるぜ」

にやりと笑つた真咲様がその後を追つて出でいく。水杖が嬉しそうに、承知いたしました、と答えた。

「ではお旗女様、お後をお願いいたします」

足軽組頭が直立する。隊長が武具庫を離れるので、その配下の兵士たちもひとまず中庭に戻ることになる。

「お疲れ様でござります」

会釈を返すと兵士たちも出て行き、庫内には私と水杖の一人が残された。

(2)

「すごい量ね。これを朝からやつっていたの？」

机に山と積まれた和紙の束を見て、水杖が驚いたように言った。
「ええ。でも、主お一人の方がずっと大変よ。重い鎧櫃を次々と下ろして、一つ一つ点検なさっているの。選別の基準が私には解らなくて、お手伝いできなかつた。一人座つているのが申し訳なかつたわ」

「仕方ないわよ。この文書だつて、溜めると地獄ですものね」

水杖が白い指で書簡をつまみあげる。まったく、地獄よねと私たちは声を合わせて笑つた。

武具庫の入口に小さな影が差したのは、その時だった。
ふと眼を上げた水杖が、愕然と凍りつく。その恐怖すら含んだ驚きようには、私も不安を感じながら、遅れて視線の先をたどつた。

どきん、と心臓が跳ね上がる。

入口に、幽鬼のようにふらりと立つてゐる小柄な人影。
ばさりと垂れた前髪。どんよりと濁つた生氣のない瞳。
頬のこけたその顔は、数ヶ月前の忌まわしい記憶を瞬時に思い起させた。

そこにいたのは、岩見尽四郎のお旗女、早蕨いわみじんじゅうだつた。

岩見尽四郎。その名は私と水杖の中に、恐怖と不安の代名詞として刻まれてゐる。

長浜の凶星きょうせい。彼と出くわした、観滝社殿みたきしゃでんの深更の東門。

私たちの旅立ちに、一抹の陰を落とした狂氣の武人。早蕨はそのお旗女だった。

あの時、岩見は早蕨と私を交換するように迫ったのだった。岩見だけでなく、同輩と思っていた早蕨にまで常軌を逸した行動で傷つけられた、その暗い記憶が未だに恐怖のしこりとなつて、私たちの心に染みついている。

引きずられるようにして連れて行かれた早蕨が、気にかかるつていなかつたわけではなかつたが、岩見尽四郎は、歩兵隊長として辺境の城に赴任していると聞いていた。もつ余つことはない、いや、二度と会いたくないと言つのが、私の本当の気持ちだった。

「あなた……早蕨」

水杖が絞り出すように言つた。彼女も、同じ思いだつたに違ひない。

「どうして、ここに……？」

早蕨は答えず、じつと私たちを睨んでいた。また、あの日だ。憎悪と悲しみに満ちた視線。岩見に小突かれながら、去り際に振り返つて私たちを見たあの時の日だ。

彼女は、まっすぐ私を見ていた。ひび割れた唇がゆつくりと動く。「朝芽……だね。あんた……うちの殿に逆らわない方がいいよ」

「……」

「さもないと、あなたの主が痛い目を見るよ」

相手の濁つた声に、言葉を失う。

「忠告、したよ……」

「この人はいつたい、何を言つてているのだろう……」

「なんなのよ、早蕨！」

呪縛から溶けたように、水杖が鋭い声を上げた。

「私たちは同じお旗女じゃない！ 朝芽が何をしたと言つのー！ ただ、同じ日に選ばれた、それだけじゃない！ そんなことを言つて理由があるならちゃんと話して！」

怒りをこめてまくしたてる水杖の方は一顧だにせず、早蕨はただ、
私だけを見つめている。その唇が、かすかに動いた。

同じお旗女なんかじゃない。

「えつ？」

水杖が聞き返した時、早蕨はさつと身をひるがえすと風のようにな
その姿を消した。今までのはまるで幻だったのか、と思つぐらい、
それは一瞬の出来事だった。

立ち尽くす私の耳に、彼方の林で盛んに鳴く蝉の声が聞こえてく
る。

日当たりのよい真夏の武具庫は蒸し暑かつたが、私の顔には、び
っしりと冷や汗が浮かんでいた。

どうして、早蕨がこの天櫻城に居るのだろう。
その疑問はやがて明らかになった。

今、隣国に攻められていると言う辺境の城、坂遠城。岩見がいた
のは、まさにその渦中の城だった。

なんでも、重要な防衛戦で取り返しのつかない失態を犯し、責を
問われるところをなにをどう操作したのか、この天櫻に身一つで戻
されてきたのだそうだ。しかも歩兵隊長という肩書はそのまで、
おそらく縁戚の家老に泣きついたのだろうと言う専らの噂だった。
武人としては名ばかりで、実力もなくただ暴力と背後の権力によつ
て我意を押し通す岩見の悪行は、この天櫻でも相当うどんじられて
いる。

当の本人は、沙汰があるまで格別の役に就くこともなく、天櫻を
自分の屋敷のようにぶらついていた。失態に恥びれることもなく、
巨体を揺らしながら歩くその後ろには、幽鬼のようによりそつ早蕨

の姿もあつた。一人に出会いとお城の小者までが目をそらし、その場からそそくさと居なくなつた。

(3)

凌介様と真咲様は日も暮れかけた夕刻遅くに、連れ立つて足軽長屋へと帰つて來た。

帰城の支度と明日の予定を聞き取るために急いで迎えに出た私は、主たちの顔色を見て息をのんだ。

凶悪な顔で天をにらむ真咲様と、地面を鋭く見据えて無言の凌介様。その顔はひどく青白く、眉根には口くちの見たことのない暗い影が落ちている。

「いかがなされましたか。お具合でも……」

あわてて駆け寄つた私に、真咲様が叩きつけるように言った。

「ああ！ 気分は最悪だぜ！ ああも酷え知らせを立て続けに聞かされちゃあな！」

「影、よせよ」

凌介様が低い声でつぶやく。その声には何とも言えない重苦しさがにじみ出ている。

「これが黙つてられつかよ！ けつ、胸糞わりい！ 長浜の奴らは何考えてんだ！ たつた一人の老いぼれ家老が、そんなに怖いのかつてんだ！」

「もうよせつて。そこらじゅうに聞こえてる」

「凌介！ お前悔しくないのか！ お前の身になつて俺は……」

「よせつつてるだろ！」

苛立ちを露わに凌介様は叫んだ。その鞭のよつな鋭い声に、真咲様が思わずごくりと言葉を飲み込む。

「俺だつて喚わめきたいわ。喚いて事が変わるものならな！ だが……」

凌介様は不意にこぶしを握ると言葉を切つた。顔を伏せたまま荒

々しく踵を返すと、立ちすくむ私と真咲様の横をすり抜け、無言で長屋の奥に消えて行つた。

「いつたい何が……あつたのですか」

尋常でない凌介様の荒れ方に、見る間に不安でいっぱいになり、私はさがるように真咲様に問いかけた。真咲様はしばし無言で険しい眉をひそめていたが、やがてふうっとため息をつくと、

「朝芽には、知る権利があるだろうぜ。悪い話が一つ。いや、お前たち主従には更にもう一つだ。」

言葉を切つた真咲様は、じつと私の顔を見た。

「酷い話だぞ。……言つてもいいのか。」

「お聞かせ下さい。」

私は必死でその目を見返した。真咲様がため息をつくと語りだした。それは、想像以上に過酷な内容だった。

真咲様が言われた最初の悪い話とは、隣国に攻め入られた坂遠城のことだった。その戦況ははかばかしくなく、急造の砦は次々と落とされ、士気の下がつた最前線では落城という言葉もささやかれ始めたらしい。名将と呼ばれた坂遠城主、不知禪通^{ふちぜんつう}様の奮戦により、何とか最悪の事態は免れているものの、隣国の熾烈^{しけつ}な攻撃の背後では、例の妖人、渕上幻鬼配下の山賊軍団も暗躍しているとかで、慣れない山岳戦に辺境の精銳軍も疲弊しているようだ。

しかし、これ以上に私の胸を締め付けたもう一つの悪い話とは、あまりにも衝撃的なものだつた。

坂遠城の報告を聞き、今後の方針を伺つて本丸から戻りつとした凌介様を、備中守様が引きとめたと言つ。

「公にはいえぬが上意である。以下心して聞け。」

いつもの磊落^{らいらく}な口ぶりからは想像もできないほど、険しい顔つき

になつた備中守様は、そつ前置きすると沈んだ声で話し始めたそうだ。

先日備中守様は、長浜本城にて土岐家の筆頭家老を勤める、佐久間將監長頼様に直々に呼ばれ、差配下出石凌介のお旗女朝芽を、歩兵隊長岩見尽四郎の元に鞍替えさせるよう仰せつかつたと言つ。尽四郎の強い要望により、朝芽を迎え、早蕨はお役御免とする。出石にはまた新たなお旗女を観滝社殿からつかわそつ。

一方的に、そう申し渡されたそうだ。

「それで凌介は顔色を変えたが、オヤジに言つてもどうにもならねえ。それで俺たちはすゞし弓を揚げてきたのよ。情けねえ話だぜ全ぐ。」

怒り狂う真咲様に何と返し、その後どうやって血室に戻つたのか、殆ど覚えがなかつた。

視線も上手く定まらぬ中、雲を踏むような覚束ない足取りで見慣れた部屋に戻ると、私はふらふらと暗い板間に座り込んだ。

夏の長日がようやく西の山に隠れ、スミレ色の残照の空に一番星が輝いている。夕暮れの林をにぎやかしていたひぐらしの鳴き声も、今はもう止んでいた。涼しい夜風が窓から入り込んで、私の髪をふわりと揺らす。

燭台を……ともさなくては……

頭では解ついても、体が動かなかつた。

脳裏では、真咲様から聞いた先刻の話がグルグルと回つている。

凌介様のお側を辞して、岩見尽四郎のお旗女に上がる……

『これは、上意である。』

筆頭家老佐久間長頼様は、長浜国の中ともいわれる老臣だ。私にとっては、ご領主土岐定照様と同様、お顔も知らぬ雲の上のお人で

ある。この天櫻城主様でさえ、道を譲ると言われる先祖代々土岐家一筋に仕えてきた大重臣だ。

その名だたるお人が、“長浜の凶星”岩見尽四郎の縁戚であり、事ごとに彼をかばう張本人であると知ったのも、この悪夢のような話があつてこそだった。日常、そのような個人の物言いが通るほどに、佐久間家老の実績と実力は絶対的なものだと言つ。

もちろん筆頭家老と言われるだけあって、その辣腕^{らつわん}は過去に幾度となく長浜の危機を救つていた。岩見の件がなければ、評判はもつと高かつただろう。佐久間家老は武人ではなく、長浜にその人ありと言われた大政治家だった。老境に入るもますます弁舌鋭く、若き頃、京師で鍛えた文官ぶりを彷彿^{ほうふつ}とさせているという。朝廷や諸侯に顔も広く、押しも押されもせぬ長浜本城^{いち}の人。そのお人が、直々に一侍大将である備中守様に声をかけた。備中守様に断る術はなかつただろう。ましてや、その下にいる凌介様に至つては……。

「心配すんな朝芽。お旗女制度は、建国以来続いてきた長浜の神聖な伝統だ。それを根底から搖るがすような今回の物言い、俺たちだつて、はいそうですかと引きさがれるわけもねえ。これは明らかに個人ごとじやねえか。この長浜に、あのじじい以外に岩見の味方なんざいやしねえ。何とかする。……何とかして見せるぞ」

真咲様は、励ますようにそう言つてくださつたが、状況は絶望的だつた。

どれくらいの刻が経つたのだろう。気づいたとき、私は真っ暗な自室でただ一人、床の上にうずくまつていた。頭の中には、どこまでも寒々とした風が吹き荒れていた。今まで信じてきた世界が、音を立てて崩れていく感覚。

とてもなく孤独を感じ、私はぎゅっと自分の胸を抱きしめた。今この瞬間、心底、凌介様に会いたいと思った。涙があふれ出す。頬を流れる涙が途切れるまで泣けば、少しは心も落ち着くのだろう

か。しかし涙はいつまでも止まってくれなかつた。肩が震える。泣き声が漏れないように、私は袖をきつく噛みしめた。

続く

翌朝は最悪の寝覚めだった。結局殆ど眠れなかつたが、朝の調練は待つてくれない。私は重い体を引きずるように起こし、早朝の中庭に出て行つた。

凌介様の姿が見えなかつた。再び本城に行かれたらしい。備中様と真咲様も一緒のようだ。

おそらく私の鞍替えの件で、お三方を煩わせてしまつていいのだろう。そう思うと、本当に申し訳なく思つた。と同時に、凌介様が傍らにいない現実に、言い知れぬ心細さと寂しさを感じた。あの笑顔に会いたい。それが自分の弱さだとわかつてはいたが、私はこみ上げる寂寥感をどうしてもぬぐい去ることができなかつた。

唯一の救いは、真咲様が水杖を置いて行って下さつたことだ。水杖も自らそれを望んでくれたと言つ。

「朝芽、元気出して。」

水杖の温かい手が、私の肩にそつとおかれる。

「きっとお三方で、談判に行かれたのよ。備中守様も尽力して下さつているし、なによりも、みたきしゃでん観滝社殿のお師様の決定をないがしろにするような、こんな理不尽な申し入れはきっと潰れるわ」

努めて朗らかな水杖の笑顔に感謝しつゝも、私は沈み込む気持ちをどうするにもできなかつた。

沈む気持ちに追い打ちをかけるよつなことが起こつたのは、午後の調練の最中だつた。

凌介様が留守の間も、調練は滞りなく行われていた。実際の指揮は長柄隊三番隊長様が執つていた。年配の優しい方で、初めて傍らに勤める私に色々と気配りをして下さつた。私は必死で笑顔を保ち、

お勤めに過ちのないよう、巨先のことに集中しようとした。

隊長について、立てかけてある長槍の数を手元の覚えに書きこんでいた時だった。不意に私は、背後から激しい力で突き飛ばされた。あつと叫んでとっさに地面に手を着く。矢立てが吹つ飛び、抱えていた半紙が派手やかに飛び散る。

「何をなされる！」

隊長の鋭い声がした。振り返った私は、嘲るような笑みを浮かべてすぐ背後に立ちはだかる、岩見尽四郎の姿を呆然と見上げた。その傍らには、変わらず早蕨さわらびが従つている。

岩見のねばりつくような視線。それは土の上に半身を起した私を額から足の先まで、舐めまわすように見ていた。好奇心なのか、それとも品定めなのか……。それはやがて自分の元に来るであろう新しいお旗女の立ち居振る舞いを、ねつとりと観察しているよう見えた。

早蕨が背を丸め、岩見の背後から陰気な瞳で私を見下ろしている。彼女は此度のお達しをどう受け止めたのだろう。私が岩見の元へ行けば、彼女はお役御免になると言つ。それは即ちお旗女にとつて最も厳しい処置……長浜城下からの追放を意味していた。辛くは無いのだろうか。それとも、自由になれると喜んでいるのだろうか。彼女の赤く充血した目は、何も語らない。

ぞつとする思いで、私はあわてて立ち上がった。申し訳ございません、と咳きながら、散らばった半紙を集めに回る。

「岩見殿。何か御用か。」

三番隊長の咎めるような声を無視して、岩見はにやにや笑いながら、ずっと地にかがむ私を見つめていた。巨漢の常軌を逸した振る舞いに、隊長が眉根をぐつと寄せる。

落としたものをすべて拾うと、隊長に促されるまま、私は足早にその場から離れた。しかし背中には、絡みつくような主従の視線が、いつまでも突き刺さっていた。

三日が、のろのりと過ぎていった。

若見の無言の観察は、その後も頻繁に続き、ある時は長屋の入口で待たれていたこともあった。やはり無言で、草鞋を脱いで上がる私の動きを、薄笑いを浮かべてじっと見ている。毎日中、長屋で帳簿をつけている時、窓からいきなりつるりとした顔にのぞきこまれ、悲鳴を上げて飛びのいたこともあった。震える私に、肝の小せえ女だと、蔑むように若見は言つた。その日には、明らかに面白がっている光があった。

かすかな物音にも怯え、夜も眠れない日々が続いた。うとうとしては悪夢に襲われ、汗だくになつて飛び起きた。凌介様は床らず、何のお沙汰も得られないまま、私は日々気力を振り絞るようにして、変わらぬお勤めを果たしていた。

四日目の朝、ふらつく身体を無理やり起こして庭に出た私は、すぐそこに立つている凌介様の具足姿を見つけた。昨夜のうちに、帰つてこられたのだろうか。

見る間に安堵が湧き起こり、おもわず両手を握りしめた。凌介様はそこにいるだけで、何か大きな壁で守られているような、そんなほっとするものを感じさせてくれる。若見の姿も、さすがに今は見当たらない。

すぐ私に気付いた凌介様は、落ち着いたまなざしで軽く頷いてくれた。一瞬、すべてがうまくいったのだろうかと淡い希望が浮かんだが、すぐに、そんなはずはないと打ち消した。指揮を執る凌介様の横顔に、拭うことのできない影を見たからだ。しかし私は頭を強く振つて、湧き起る不安を打ち消した。未来はどうあれ、今この瞬間、私の主は凌介様なのだ。先の不安に囚われて、今をおろそかにしてはいけない。私は、お勤めに要る書簡の束を取りに自室に駆け

戻つた。

やがて、砥ぎ上がつた直槍すぐやりの稽古が始まつた。私は、いつものように矢立てを持つて、主の傍らに控えた。手元の紙に、言われたことを書きつけていく。色々な細かい指示の後、凌介様がふと眉をひそめて私を見た。

「随分顔色が悪いな。朝芽、大丈夫か」

「大丈夫です」

答えたものの、先ほどから酷い頭痛がしている。

「無理もないよな。俺も、酷い気分だぜ」

凌介様が小さくつぶやく。やはり話し合いはうまくいかなかつたようだ。しかし、彼はすぐ氣を取り直したように笑みを浮かべると、「あれから俺も頭を冷やした。今悩んでも仕方がない。俺たちは武人だ。目の前のやるべきことをやるしかない。心配すんなつて。お前のことは諦めない。岩見になんか渡せるか。不安だろうが、もう少しだけ耐えてくれ。俺も、全力を尽くすよ」

「お願ひ…いたします」

私も微笑み返した。もう、どうにもならないのだと解つてはいた。だけど、たとえ氣休めでも諦めないと黙つてくれた主の言葉はとても嬉しかつた。凌介様だけではない。会うたび心配してくれる水杖や真咲様。それに陪臣のために動いてくれている備中守様。沢山の人が私を支えてくれているのだ。

「ああ。任せとけって」

力強く胸をたたいた凌介様は、また上役の顔に戻ると、

「新しい陣立て表を書いてほしい」

てきぱきと次の指示を述べ始めた。

「はい」

筆を取り直した時、ぐらりと一瞬視界がゆがんだ。私はぐつと唇を噛んでそれに耐えたが、ぎらぎらと照りつける真夏の太陽光に身体がまるで焼かれているような違和感を覚えた。

嫌な汗が全身から吹き出す。気分が悪い。

「すまんが、それを明日までに……朝芽？」

凌介様が何か言う声がした。その声が途中で聞こえなくなつた。すつと目の前が暗くなる。膝から力が抜けるのが解つた。矢立てが地面に落ちる音。

「朝芽！ しつかりしろ！」

叫び声と共に、具足の腕が、崩折れる体を受け止めてくれた。しかし、私が覚えているのはそこまでだつた。

夢を見ていた。

夕日に染まる黄金色の泉。滝の音も鳥のさえずる声も聞こえなかつた。すべての気配が水に吸い込まれたように、しんと静まり返つている。私はその中で一人立ちつくしている。胸に青磁の甕を抱え、まるで小さな子供のように、途方に暮れて水の中に立つている。

泉の向こう岸では、凌介様が、見知らぬお旗女と親しく話し込んでいる。夕暮れの光に照らされて、黄金色の鎧がキラキラと輝く。真咲様と水杖の笑顔も見える。すぐ近くにいるのに、その姿はすぐ遠い。

美しいその光景を、私はただ黙つて見つめているだけだ。私には行くことのできない、輝くその岸边。水杖が明るい笑顔で見知らぬ女性に話しかける。真咲様が大声で笑い、凌介様も微笑んでいる。誰もこちらを見ない。彼らの中に私はもう……居ないのだ。

「いつまですがりついている。お前には最早縁のない世界に」不意にだみ声が背後で響いた。振り向くと、すぐ後ろに若見尽四郎のつるりとした顔が、……顔だけが、にやりと口の端をゆがめて浮かんでいた。

私は金切り声を上げて顔を覆い、泉の中に倒れ込んだ。

「朝芽！……おい、朝芽！」

突然力強い腕が両肩を支え、激しく宙に浮いているような感覚の体をしつかりと抱き止めてくれた。

私はぼんやりと視線をさまよわせた。靄がかかつたような頭でも、自分が日暮れの自室に寝かされていると言つひどが、おぼろに理解できた。

田の前には、斜陽に赤く照らされた凌介様の懸命な顔があつた。頬にぱらりとかかった栗色の髪が、夕陽を受けて金色に輝いている。不安げに寄せられた眉。見開かれた大きな瞳が、気遣うように私を覗き込んでいる。

「……凌介様……」

「大丈夫。大丈夫だから、落ちつけって……」

穏やかな低い声。温かい手のひらが、額の汗をそつと拭ってくれていた。もう片方の腕は背中にまわされ、覚束ない私の体をしっかりと支えてくれている。おそらく悲鳴を上げて飛び起きた私を、すぐく抱き止めてくださったのだろう。

「……調練は……」

「真咲が代わってくれた。悪い夢、見たんだろ。側についてるから、安心しろって」

「……申し訳、『じぞいません……』」

「解つてる。……もう、何もしゃべるな」

優しい声が、苦痛でズタズタになつた心にすうつと染み渡る。

温かい安堵の波が、その腕から伝わつて来て、硬直した身体を優しくほぐしてくれる。ほつと肩の力を抜いた私は、再び深い眠りの中に落ち込んで行つた。

再び目覚めたとき、すでに辺りは真夜中になつていた。天頂には大きな月が美しく輝いていた。部屋は闇の中に暗く沈み込み、ただ、窓の下におかれた文机だけが、差し込む月明かりの中に重々しく浮

かび上がっている。

胸に掛けられた薄い布団をそつと外して、私はゆっくりと身体を起した。久しぶりに深く眠れた心地がする。悪夢を見て飛び起きた後、凌介様の温かい腕に包まれて再び眠りに落ちた記憶……あれもまた、夢だったのだろうか。

夢ではなかつた。

凌介様は、まだそこにいた。刀を抱いて胡座じやくしたまま、部屋の壁にもたれて、すうすう寝息を立てている。

少しあつれた美しい寝顔。薄い唇を軽く結び、長い睫毛がそつと閉じられている。本城との往復に、休む間もない調練。きっとお疲れだつたろうに、突然倒れた私にずっと付き添つていってくれたのだ。

ありがとうございます。

そつとつぶやく。私のために、ここまで懸命に力を注いでくれる凌介様の気持ちが、今は何よりも嬉しかつた。

あどけなくも見えるその寝姿に薄く布団をかけると、私は静かに板床の上に座つた。窓から差し込む月の光に照らされて、二つの影が黒々と部屋の隅まで伸びている。長屋はしんと静まつていた。時折ふわりと吹き込む夜風、軒端のきはにすだく虫の声が、涼やかな夏の夜を盛り上げている。

凌介様の穏やかな寝顔を見つめている内に、私の中には、今までと違うある静かな覚悟が芽生えてきていた。

あの悪夢。岩見らしき顔に言われた言葉が、ゆっくりと脳裏によみがえる。

『お前には、最早縁のない世界に』

今までこそが、夢だったのかもしれない。

大切な主にかけがえのない親友。それに快活な真咲様。四人でど

ここまで進んでいけると、いつしか思い込んでいた私への、これは重い戒めなのだろうか。

お旗女は基本、ただ一人の主にしかお仕えしない。しかし過去には病や討死などで、泣く泣く大切な主と別れた者も多くいた。また、主との絆を上手く結ぶことができずに、冷たく追放されたお旗女もいる。

『さもないと、あなたの主が痛い目を見るよ』

『これは、上意である。』

これ以上逆らい続ければ、凌介様を危難に陥れることになるかも

しれない。

哀しからうが、理不尽だらうが、これが現実なのだ。

どれだけ苦しもうと、個人の想いなど一顧だにされる筈もない。武人の世界に生きる以上、当然此度のような汚い駆け引きもあるだろう。誰しも春の輝きの中だけでは生きていけない。

若見尽四郎……それが、私に与えられた運命だと言うのなら。

運命を受け入れよう。その先に苦難があるなら、立ち向かおう。それが、みたきしゃでん観滝社殿で培われた、お旗女の心構えではなかつたか。

若見の振る舞いを見る限り、その元に行くことは、おそらく地獄の苦しみになると言う予感はあつた。しかし、そんな未来も覚悟の上で、私はお旗女として、厳しく育てられてきたのではなかつたか。

暗い部屋に端坐し、一人静かに考え続ける。それはどこか氷のように冷たい諦めだったのかもしれない。

「朝芽、起きたのか」

不意に名を呼ばれて、私は、ハッと顔を上げた。

いつから目覚めていたのだろう。気がつけば、凌介様の黒々とした瞳が、いたわるようにこちらを見ていた。

「……もう、いいのか」

強張った体をほぐすように、腕を大きく曲げた凌介様が、ほつと

したように笑いかけて来る。

その笑顔に、ぐっと心が締め付けられる。

「ありがとうございました。もう、大丈夫です」

波立つ気持ちを鎮めながら答えると、明るい顎きが帰ってきた。

「冷湯でも飲もう。ちょっと待つてろ」

「凌介様」

軽快に立ち上がり、部屋を出て行こうとする主の後ろ姿に、私は思い切って声をかけた。

ピタリ、とその足が止まる。

「私は、岩見様の元へまいります」

「……冗談つきよ」

凌介様は向こうを向いたまま静かに言つた。

「冗談では……『ございません』」

凌介様が振り向く。そのまま素早く戻つてくると、私の前にしゃがみこんだ。両肩を温かい手がぐつとつかむ。

「何言つてんだ、朝芽。お前をあいつの元へなんか行かせない」

「いいえ。私は岩見様の元へ参ります。そして懸命にお仕えして、必ず凌介様の名に恥じぬ働きをして見せます」

「やめるよ……」

「それに同じお城ですもの。またお会いできる機会もございましょう。」

「そんなこと言うなつて！」

やにわに激情をほとばしらせた凌介様は、次の瞬間、私の肩を掴んだまま、がっくりとうつむいた。

「頼むから……そんなことは言わないでくれ……」

その手がかすかに震えているのを感じた瞬間、私の目から涙が吹きこぼれてきた。しかし私は顔を伏せなかつた。強くならなければ、そう自分に言い聞かせながら。

「岩見様の元に参る。それが上の『』意向であり、果ては凌介様のお為になるのなら、私はそれに従います。それが……」

言葉を切った私は、まっすぐ主の君を見つめた。

「それが、お旗女の道であると心得まする」

あふれる涙をそのままに、私は、静かに言葉をつないだ。

その一瞬、凌介様は、私の肩に掛けた腕にわずかに力を込めた。

無言で伏せられた顔は、いつまでも動かなかつた。

「……つたく、情けねえ話だよな。自分のお旗女一人守れねえなんて……」

やがて、こぶしを握り、言葉をぎりぎりと噛みしめる凌介様の苦痛の声が、私の心に悲しく響いた。

続く

第六章 理不尽との対決・前編

翌朝も、からりと晴れた真夏の空だった。

お城をとりまく林では、朝早くからクマゼミが透明な羽を震わせ、われさきに声を張り上げていた。木々を舞台に弾けるような大合唱が、蒸し暑い一日の始まりを予告している。

田代の喧騒がうそのように静まり返った長屋で一人、私は床の間に新しい花を活け、廊下や板間の拭き掃除に専念していた。

いつもならこの時間は、凌介様の着替えのお世話か、時間が合えば水杖と話しながら情報交換できる楽しい自由時間だったが、今はとにかく何かで体を動かしていかつた。目の前の仕事に熱中することで、一時的にでも思考を止めることができる。今考えることはすべて苦しみにつながる気がして、怖かったのだ。

凌介様はまだ中庭から戻らない。彼方からは指揮を執る厳しい大声が、休む間もなく聞こえてくる。

その聞き慣れた主の声に、不意に昨夜のひとときがよみがえり、思わず頬が熱くなる。

寝不足と疲労で倒れた猛暑の午後。以来深更までずっと枕元について見ていて下さった凌介様。しかし、それは同時に哀しい記憶でもあった。反対する主を振り払うようにして私は、岩見の元に行きますと、苦しい決意を告げたのだ。

覚悟を伝えてうつむいた私に、凌介様はとても悲しそうだったが、それでも朝まで私の様子を見守ってくれていた。

「ついててやるから、ゆっくり休めよ」と、変わらぬ声音が優しかった。

次に目覚めたとき、日はすでに蒼天高く輝いており、調練に行かれたのか凌介様の姿もそこにはなかった。枕元には、冷湯の入った

大きめの茶碗と、頭痛に聞くと噂の丸薬があった。午前中は休んでおくように、との言伝を、やがて兵の一人が伝えに来ててくれた。私は感謝と共にその言葉を聞いたが、今朝は調子もだいぶ回復していたので、思い立つて、一人長屋の掃除を始めたのだ。

誰もいない長屋での作業は、すべての流れが緩やかなように感じられたが、それでもいつしか刻は過ぎ、調練が終わつた足軽たちが続々と長屋に戻ってきた。たちまち辺りがにぎやかになる。それを契機に、私は手桶を抱えてそつと裏の井戸へと歩き出した。

人気のない長屋の裏手に来た時だった。

不意に、目の前に巨大な人影が立ちはだかった。私はハッとして、手桶を抱えなおした。しかし、心は乱れなかつた。いつかこの刻が来る。知らず知らずのうちにそんな予感があつたのかもしれない。

岩見尽四郎が、佞^{ねい}猛^{もう}な笑みを浮かべて両腕を広げ、通せんぼするように行く手をふさいでいる。

早蕨^{さわらび}の姿が見えない。それだけで、いつもとは違つ緊張を感じた。

「よお。待ちくたびれたぜ」

「いやにやと笑いながら、分厚い唇が動く。私は目を伏せ、お疲れさまで」「ぞこます、と小さく言つた。

「疲れてなんざいねえよ。ご存じのとおり、俺は無役だからな。」

あざけるように言つた岩見は、不意に声の調子を落とすと、

「てめえ……俺を馬鹿にしてんのか?」

「そんなことは……」

突然豹変した凶悪な物言いに、恐怖を覚える。岩見の狂氣じみた言動は、以前とまったく変わつていない。

「さて。ちょうどいい機会だ。お前に話がある。お前、俺のお旗女になれ」

いきなり本題に切りこまれ、私は思わず返事に詰まつた。鞍替えの話は当然出るものと思つていたが、この数日間苦痛を与えた

当の本人に、ここにで、こんな形で簡単に承諾の返事をする」とは、どうしても気持ちが許さなかつた。

黙つた私に岩見は寧猛な眉を寄せると、いきなり袖^{ねじもつ}と二の腕をつかみ、

「返事が聞こえねえぜ！」

汗臭い顔をぐつと近づけて来た。魚の腹のようなのっぺりした頬が目前に迫り、思わず顔をそむけてしまう。

「そのお話は、上役から聞いてあります」

小さく答えると、ふんと言つて突き離された。よろけた拍子に、音を立てて手桶が転がる。

「聞いてる割には、そつけねえじゃねえかよ。てめえの態度次第で、出石の野郎にとばつちりが行くつて解つてやがんのか。えつ、どうなんだ、美人のお旗女さんよお？」

野卑な言葉の連續に、突然悔しそがこみ上げて来て、私はキッと岩見の濁つた眼を見返した。

「真心こめてお仕えいたします」

「はあ？ まいこり？ 欲しいのはそんなもんじゃねえんだ」

相手の脣に、チラリと厚い舌が覗いた。身の毛がよだつ。この男は……何を言わんとしているのだろう。

「出石と違つて楽させてやるぜえ。もつ炎天下に重い陣立書抱えて男の後を追つかけなくてもいいんだ。仕事は広くて美しい屋敷で、ただ俺様の帰りを待つていればいいのよ。金も十分ある。『機嫌さえ損ねなけりやア、俺は羽振りも氣前もイイ男なのよ。』

喋りながら、じわじわと前に踏み出してくる。私は身をすくめ、思わず後ずさつた。

「どうして私を……」

ずっと、疑問に思つていたこと。

なぜ、この男はこうも私に執着するのか。みたきしゃでん觀滝社殿で偶然会うまでは、それこそ顔も、存在すら知らなかつたと言うのに。しかし、

岩見の答えはかなり意表を突いたものだつた。

「あるお人に、勧められたのよ」

「ある……お人？」

「おつとつと、これ以上は言えねえ。佐久間の伯父貴でもねえ。お城とは関係のない、あるエライお人よ。だがそれだけじゃねえのさ。聞いた話だと、どうやらお前が觀滝社殿で一番いい女だつてえじやねえか。老師様ダントツのお気に入りだとなあ。くそつ、あのジジイ、そんな女を俺様でなく出石に与えるとは、いい度胸してやがるじゃねえか、なあ？」

「嘘です！ お師様はそんなわけ隔てなんかされません！」

力アツと頭に血が上り、思わず私は叫び返した。

「フフウン、庇い立てるのかよ。それともあのおいぼれが、既にお前に手をつけたってか？」

「お師様を侮辱なさらいで！」

あまりの暴言に、怒りで頭が真っ白になつた。私は激しく岩見に食つてかかつた。

「今のお言葉はあんまりです！」

「おうおう、健氣にも反抗するつてかよ！」

岩見が揶揄するように言いながら、私の腕をぐいとねじつた。肩に引きちぎられるような痛みが走る。歯を食いしばつてそれに耐えると、私は負けずに叫び返した。

「長浜のじ上意、出石様のお為とも思えばこそ、此度のお話をお受けしようと思いました。しかし私にも心があります！ そのようなことを平然と言われるお人の元へ行くのは嫌です！」

「この大マア！」

突如激高した岩見は、いきなり私をはがいじめにすると、そのまま井戸の向こうの茂みに向かつて大股に歩きだした。その先は木々が深く生い茂り、人の目は全く届かない。瞬時に恐怖を感じ、猛烈に抵抗する。しかし身体をつかんだ腕はがっちりと食い込んでではない。ザザツ、と音を立て、地面に突つ張つたままの足が滑つた。

なぜ早蕨がいないのか、この時私ははつきりと悟った。初めから、岩見の意図はこれだつたのだ。怒りはただの口実でしかない。

「あなたは獸よ！ 離して！」

「誰にそんな口のきき方を習つた！ 旗女の心構えを、俺がもう一度一から教えてやる！」

乾いた土を蹴りあげるよじにして、岩見が井戸を回りこもうとしたその瞬間！

「やめろ！」

突如響いた鋭い声。岩見の巨体がギクリ、と硬直する。アツと首を捻じ曲げた私は、そこにすらりとした人影を見た。凌介様だ。いつも金色の具足姿に、隊長の持つ長槍を構えている。

「朝芽から離れろ！」

両手に握つた朱房の愛槍。鋭い穂先を岩見の胸元に突きつけながら、凌介様が鋭く叫んだ。明らかに迫力負けして、瞬時に汗だくなつた岩見が、それでも負けじと睨み返す。

「この女はもうすぐ俺のもんだ」

「……ここでお前を殺したくなつてきたよ。そうすりや、長浜の治安も上がるつてな！」

凌介様が低く凄んだ。岩見がビクッと震えたのが解つた。

「こちらには筆頭家老がついてるんだぞ！ お前のような足軽頭が太刀打ちできる訳もねえ！ 出石の家をつぶしてもよけりや、そうやってあがくのも一興だがな」

刃を向けられた驚愕か、上ずつた声を張り上げた岩見は、私の腕をぐいと引いた。その指をもぎ放そうとした私に、一転、力アツと赤い目を向ける。やにわにこぶしを振り上げた岩見は、目を見開いた私の顔目がけてそれを打ちおろさうとした。

「ふざけんなッ！」

その一瞬、凌介様が、岩見にびゅっと突きかけた。まるで閃光が走つたようだ。穂先が鋭い風を起こして鼻先をかすめ、ひとつ喚いわめ

た巨体が尻もちをつく。腕をつかんでいた汗だくの手が離れた。

「朝芽、来い！」

凌介様が叫ぶ。私は岩見から飛びはなれると、そのまま主のもとへと駆け寄った。

「やれるもんならやつて見る。」ひねりつけ捨てるもんは何もねえんだ！」

私を背後に押しやると、凌介様は大きく踏み込み、裂帛わっぱくの気合いをかけて、槍をぶんツと横なぎに拵つた。奇声をあげて、岩見が頭を抱える。飛び退つて素早く一撃目の構えを取つた凌介様は、何を思つたか不意に槍を地面に投げると、飛燕の速さで岩見の元に踏み込んで行つた。

駆け寄りながらこぶしを握る。アッと思つた瞬間、それは真っ向から岩見の顎あごを捉えた。すさまじい力に巨体が吹っ飛ぶ。体格にかなりの差があつたが、酒と美食で膨れた岩見は凌介様の敵ではなかつた。容赦のないこぶしが立て続けに岩見を見舞う。風のように踏み込むと、腹に顎に、次々にこぶしが叩きこまれた。ついに岩見は悲鳴をあげてうずくまつた。その無様に縮んだ身体を亀の子のようになにひつくり返すと、凌介様は腫れあがつた鼻先に、すさまじい速さで渾身の一撃を繰り出した。

「ひいい……っ！」

岩見の悲鳴に思わず口を覆う。しかしそれきり、肉が打たれる音は聞こえなかつた。恐る恐る口を開いてみる。凌介様は岩見の胸倉をがつちりとつかんで、鼻先寸前でこぶしを止めていた。

「いいか。一度と朝芽に手て出すんじゃねえぞ！ やるつてんなら俺に來い。受けて立つ！」

激しく言い捨てた凌介様は、さつと飛び退くと槍を拾い、立ち尽くしていた私の手をぐつと掴んだ。そのまま怒つたよつてぐんぐん引っ張り、足音荒く長屋へと戻つて行く。

長屋の入口で私の手を離すと、凌介様は私に背を向け、大きく息をついた。そのまま鬼気冷めやらぬ後ろ姿に、恐る恐る声をかける。「危ういところを……ありがとうございました」

「朝から若見がうろついてたんで、嫌な予感がしたんだよ。朝芽が人気のない井戸の方へ行くのを見て、そいつが確信に変わったのです」

答える主の両肩が、まだ荒々しく上下している。

私のことを、気にして下さったんだ。

私の脳裏に、昨夜からのやり取りが鮮烈によみがえった。
半ば諦めるようにして、自分を捻じ曲げるようにして、上意に従うと言った自分……。

そんな私を、今朝からも変わらず、ずっと見守つてくださっていた……。

悪夢におびえ、心労で疲弊しきっていたとは言え、どうして私は、一瞬でもこの主の元を離れる気持ちになつたのだろう。

胸がいっぱいで、何も言葉が出てこない。

「私……私……申し訳……」やせいかせんでした

やつとのことで、消えそうな声を絞り出すと、凌介様はぐるりと振り返つた。あの憑かれたような怒りの表情は、もうなくなつていた。心なしか晴れ晴れとした顔には、かすかに笑みさえ浮かんでいる。

「いいつてさ。お前の苦痛、俺の苛立ち、この数日間の鬱屈を全部アイツにぶつけてやつた。すつきりしたぜ」

思いもかけぬ快活な言葉に、半泣きのまま私も笑顔になった。その時初めて気づいたが、私の中でも、若見相手に思いきり叫んだことで、不思議と消えたものがある。

「さあ、腹を括るかな」

不敵に笑つた凌介様は、槍を担ぐと、逆の手で私の肩をぐつと抱いた。

「筆頭家老、上等だ。来るなら来いつてね！」

その夜は、幸か不幸か、たまたま宿直の番に当たっていた。夕刻、下城の鐘が鳴った後、私は長屋の詰め所に控えて、主が呼ぶのを待つていた。しかし定刻になつても、なかなか声がかからない。いつもいらっしゃる長屋奥の一間を覗いても、凌介様の姿は見当たらぬ。

胸騒ぎがした。

思い切つて、一間に足を踏み入れる。

主が普段使つてゐる文机の上に一通の書簡が白く光つている。

恐る恐る開いてみると、そこには墨跡も瑞々しくただ一言、

『三の丸松景園の警護を申し渡す』

とのみ書かれている。差出人の名前は無い。

急な、お配置替えの通達のようだ。しかし、それならなぜ凌介様は、私に一言も言われなかつたのか……。

小さな不安が、急速に膨れ上がつていく。かがり火に燭台が赤々と焚かれる本丸とは違ひ、三の丸は普段から人気も少なく、夜ともなれば小さな灯をわずか残して、そのほとんどが闇の中に暗く沈んでいる。

夜のお勤めが始まつたのか、遠く本丸や一の丸に人の動く気配があつたが、長屋はしんと静まり返つていた。

ふと、一つの名前が浮かんだのは、その時だつた。
真咲まさき様だ。

あの方なら、事情を解つて下さるだろう。凌介様の行かれたところが、どんな場所かも教えて下さるに違ひない。

私は廊下を走り、水杖みなかづえを探した。幸い、台所方で夕餉の準備を手伝う彼女の小柄な姿を、すぐに見つけることができた。

「朝芽、どうしたの。今日は宿直じゃ……」

目を丸くして出てきた水杖に、手短に事情を語る。

「それ……怪しいわね」

眉根を寄せた水杖は、

「長屋で待つてて。すぐにお呼びして来る
頼もしく言って、駆け出して行つた。

下城直前だつた真咲様は、すぐに水杖と共に長屋へと駆けつけてくれた。書簡を一読したその顔色が変わる。

「間違いねえ、報復だ。松景園はずつと昔の戦で破壊された、ただの焼跡だ。水杖、馬！」

ハイツと叫んで水杖が駆けだしていく。続いて走りだそうとした真咲様に、私は必死で声をかけた。

「私も連れ下さい！」

「来るのか。下手すりや修羅場だぞ。」

「参ります！」

ためらいなく答える。

「解つた。お前たちの絆が運を呼ぶかもしれん」

真咲様は武具庫に駆け込むと、一段と派手やかな大槍を軽々とつかみ取つた。昼間見た凌介様の長槍よりも、はるかに大きく重そうだ。華やかな一重の袖をたすきできりりと絞ると、真咲様は馬を引いて駆け寄ってきた水杖にうなづき、私に大きな手を差し伸べた。その手をつかむ。軽々と鞍前に引っ張り上げられた。真咲様の怪力は聞いてはいたが、そのすごさの一端を垣間見た気がする。

「朝芽、気強くね」

馬上の私に、水杖が真剣な声で言つた。私は感謝をこめて友の瞳を見返した。

「ありがとう」

「行くぞ。水杖、後を頼むぜ」

叫んだ真咲様が、りゅうと大槍をじごいて手綱を振つた。馬が駆けだす。

耳元で、風が悲鳴を上げた。黒鹿毛の駿馬は素晴らしい速さで、

入り組んだ通し小道を二の丸に向かって駆け降りて行く。

続く

三の丸、松景園。

名は山水を模した美しい庭園を彷彿^{ぼうふつ}とさせるが、私の目の前に現れたそこは、あまりに寂しい闇の中の荒れ地だつた。

元は広い敷地だつたのだろう。崩れた築地が遙か彼方に白い残骸となつて、月明かりにおぼろに照らされている。戦禍の名残か、ところどころ黒い地面には夏草が一面に生い茂り、これだけはのどかな虫たちの声が、そこここで思い思いに鳴き交わしている。

広場には多くの人影があつた。月明かりの下、その姿は離れた茂みから様子を伺う私たちにも、ハツキリと解つた。

必死で目を凝らした私は、すぐに凌介様の姿を見つけた。

月光の下にすらりと立つその姿はいつもと同じ自然体で、どうやら無事らしい、と胸をなでおろす。しかしその周囲はぐるりと黒い具足の兵たちに囲まれていて、背後には痛々しく包帯を巻いた岩見の巨体も見受けられた。傍らには、早蕨がひざまずいている。

さあつと夜風が吹きわたり、高く伸びた夏草が揺らいだ。

凌介様は腰の刀に手をかけたまま微動だにしない。一方、周囲の影も動く気配がなかつた。まるで何かの号令を待つてゐるかのようだ。空気のなかに今にも弾けそうな緊張がある。岩見が一人、落ちつかなげに身体を揺らし、傍らで膝を着く早蕨に何かののしる言葉を投げている。

「ちよつ…まさかありや……。おい、本氣かよ……」

私の横で、同じく覗き込んでいた真咲様がうめくように言った。

その目は彼方のある人影を凝視してゐる。視線を追つた私は、凌介様と向かい合うようにして立つてゐる、羽織をまとつた小柄な老人に気がついた。天櫻城では、見覚えのない顔だ。しかしその立ち姿

は毅然としており、遠目にもピシリと伝わる凜然たる威厳があつた。短い白髭はピタリと刈りこまれ、しわの濃い日焼けした顔は、一切の妥協を許さぬ意志を示して、厳しく引き締まっている。

「筆頭家老、佐久間將監長頼公だ。アイツが今回の黒幕よ」田を凝らしていた私に、真咲様が苦々しく呟く。私は愕然と彼方の人影を見つめ直した。

ではあれば、岩見を庇護し、この理不尽な鞍替えを命じた佐久間家老なのか。押しも押されもせぬ長浜本城の大老臣、その人なのか。

驚きに息をのむ私の横で、真咲様がぶつぶつとぼやいている。

「ちつ、またあの過保護城代と面合わせかよ。あのジジイ、岩見になんぞ弱みでも握られてんじゃねえのか」

彼方から、凜冽たる声が響いたのは、その時だった。

「高砂備中守差配下出石凌介。今宵なぜ此の場に呼ばれたか、委細承知しておるう。わしが命じや。お前の旗女を岩見に譲れい」「その仰せには、承服いたしかねます。」

凌介様の声は落ち着いていたが、そこには一步も引かぬ気迫があふれていた。佐久間家老も、それを感じ取ったようだ。

「ならば、やむを得ん。出石を取りつぶしても目的を果たすが、よいか」

「……」

厳しい声に手繕られるように、周りで黒い具足がうごめぐ。空気が張り詰めていくのが解り、急激に不安がこみ上げてきた。今にも誰かが突きかけるかもしれない。主の名を叫んで飛び出したい衝動をぐつと抑えた。凌介様はすべてをかけて、今、あそこで強大な権力と対峙されている。私を引きとめる、それだけのために……。私が、早まつてはいけない。

「何としても翻さぬか。ならば致し方なし……。さて岩見、お前も

「奴に言いたいことがある。後は、好きにするがよい。」

佐久間家老が言葉を切った。ザザツ、と荒れ地に緊張が走る。ア

ツと腰を浮かした私の肩を、真咲様が強くつかんで押しとどめた。

「朝芽、辛いだろうが動くな。お前が出れば確実に標的だ。俺が行く。お前はここにいる」

「出石よう……」

彼方では、岩見が舌なめずりするように前に出ていた。顔中が厚い包帯で覆われており、声を聞かなければとても本人とは解らない。「昼間はよくもやつてくれたなア。今夜は俺の味方が多いが、これは意趣返しじゃねえ、お前が売つて来やがった喧嘩だ。それも命がけのな。悪く思うんじゃないぜ」

「何言つてやがる」

身勝手な岩見の言い分に、真咲様が眉間に怒りの影を落とすのが解つた。

「死ねええええ！」

突如岩見が抜刀すると、奇声をあげて凌介様に斬りつけた。しかし本人の意気込みに反して、その刃風はぬるかつた。凌介様は素早く身体をひねり、鮮やかにその刃先をかわした。それを合図に周りの黒足たちが一斉に襲いかかる。ぱつと飛びのいた凌介様は、きらりと一刀を抜き放つた。そのままだと走り込む。閃光が走つた。遠目にも峰打ちだと解る。それは同じ長浜兵の命は奪いたくない、凌介様の優しさだったのかもしれない。それでも加減のない一撃で、影の4、5人がぐず折れるように倒れた。

「いつちょ、いくかい！」

大槍を片手に、真咲様が飛び出したのはその時だった。

「闇夜の喧嘩も乙なもんだ！ 凌介、加勢するぜ！」

その言葉と共に喧騒の中に走り込んだ真咲様は、風車のように大槍をぶん回しながら、あつという間に黒足を蹴散らした。まるで大地から、荒れ狂う炎が噴きあげたようだった。わっと叫んで、周囲の影が蜘蛛の子のように散らばる。

「長柄隊の真咲だ！」

「あの烈火将かよ！」

驚愕の喧騒が辺りを包む。

「影……お前！　どうしてここに！？」

驚いて田を丸くした凌介様に、にやりと笑った真咲様が、ぴつたりと背を合わせる。

「朝芽がお前の危機を察した。そこまで来てるぜ。……つたく、大事のお旗女にこれ以上心配かけるんじゃねえよ！　さっさと終わらせて帰ろうや、凌介！」

「ああ、そうだな」

凌介様が力強く頷く。一人は呼吸を合わせると、1・2・3で前方へと走り込んだ。わっとたじろぐ相手の懐へ飛び込み、まるで旋風のように暴れまくる。

「死にたくねえヤツあどけええーっ！！」

叫んだ真咲様が頭上で豪快に大槍を振りまわした。ビュンッと風が巻き起こる。まるで炎をはらんだ竜巻のようだ。うわあと叫んで、兵士たちが逃げていく。

凌介様は飛燕のように腰を落として地面すれすれに走り込み、向かってくる相手を跳ねのけている。真咲様が力なら、凌介様はまるで風だった。ふわりとかわし、次の瞬間旋風となつて、鋭い一撃をたたき込む。お二人は、圧倒的に強かつた。あれだけ厳重に囮んでいた兵士たちの輪が、瞬時に崩され、倒されて行く。

岩見が逃げ惑う兵士の間を、金切り声をあげて飛び回っているのが見えた。その背に凌介様がぐつと迫った。

「そこまでだ！」

間髪を入れず、佐久間家老の冷たい声が、闇の中に響き渡る。お二人の足が、ピタリと止まった。

「牙をむいたな。出石、真咲。わしが見届けた。覚悟しておけよ。」

しかしこの直後、事態は、思わぬ形で展開していくことになる。

「その喧嘩、待つた！」

おめき声が交錯する荒れた野原に、突然、第三の声が割つて入ったのだ。

一頭の馬が空き地に走りこんでくる。手綱を操る老練な人影。そしてその鞍前に乗つている、小袖姿の小柄な女性は……

「水杖！？」

思わずその場に立ちあがつた私は、ふわりと鞍から飛び降りたもう一つの人影を見て、愕然と目を見開いた。それはあの月江老、先のお書物庫騒動で私たちに助勢してくれた、長浜忍軍妙法院党頭領、妙法院少愾様だったのだ。

「お前が出るとは、妙法院」

佐久間家老の重々しい声が、静まり返つた草地に響いた。驚愕の急展開にもかかわらず、その声には一絲の乱れもない。

「殿のお言葉じや。朝芽から手を引け、佐久間長頬」

「これは異なることを申される。此度のことはこの佐久間が私事にしてござる。例え定照様と言えども口出しは無用じや」

「それは通らんぞ、長頬

「なぜじや、妙法」

「過日、侍大將、高砂備中守から上申書さがとおりが出された。それを受け、備中差配下の長柄足輕大隊に、この度、坂遠城への赴任が仰せつけられた。厳しい戦況にある坂遠城は、長浜にとって大事な砦。負けられぬ戦の先鋒を担うであろう、長柄隊一番隊の重責あるお旗女役を、今、一家老の私情で交代させるわけにはいかん。」

佐久間家老が、ぐつと言葉に詰まる。

「お旗女は長浜の神聖な伝統。……解るな？ 長頬」

清冽な妙法院様の声に、佐久間家老は無言で踵を返すと、近従を引き連れて闇の中に退いた。

「伯父貴、そりやねえ！」

岩見死四郎がわめいたが、佐久間家老はもう一言も答えず、その姿は闇の中にかき消されるように消えて行った。

「ま、待てよ伯父貴イ！　いいつりをこのまま！」

未練がましく叫ぶ岩見に、妙法院はぎろりと鋭い一瞥を向け、「……失せろ小僧。これ以上無様な振る舞いを見せれば、長浜の御為にお前を斬る。」

脇差のつかに軽く手をかけた。

数と権勢を頼んで、あれほど傲慢にかまえていた岩見が、妙法院様の一言で、益体もなく震えあがり、慌てて配下の黒具足たちを促すと、佐久間家老の後を追って、ザザッと土ぼこりを蹴立てて闇の中へと消えて行つた。早蕨の姿もそれと同時に見えなくなる。

悪役の消えた夜の草原で、妙法院様は厳かに言った。

「出石よ。聞いた通りだ。辺境の戦場にて手柄を立てよ。そしてお前のお旗女を守れ」

「ありがたきご上意。必ずや、成し遂げて見せまする」

ひざまずき、深く頭を垂れた凌介様の良く通る大声が、夏草のそよぐ庭園跡地にはつきりと響き渡つた。

すべてが終わった後も、私はしばらく呆然と、茂みの中に座り込んでいた。

目の前の急速な展開に、すぐにはついていけなかつたのだ。

しかし、やがてじわじわと、妙法院様の言われたことが、私の頭に染み渡つて行つた。

高砂備中守様率いる、長柄足軽大隊が、辺境のお城に配置替えとなる……。

凌介様も、真咲様も一緒に。

もちろん水杖も……そしてこの私も。

もう、私は、岩見の元へ行かなくてもいいのだ。
あの陰に、おびえなくてもいいのだ。

そしてなにより、これからも変わらず、凌介様にお仕え出来る。長浜本城の御前会議を通して、土岐定照様が直々に、お墨付きを下されたのだと言つ。

「良かつた……」

熱い涙が噴きこぼれてきた。見る間に地面がぼやけていく。

「朝芽」

不意に、肩に温かい手が置かれた。唐草模様の篠小手に、月光に輝く黄金色の鎧。

「来てくれたんだな。」

真咲様から、私の居場所を聞いたのだろう。凌介様がいつしか私の前にしゃがみこんで、そつと私の顔を覗き込んでいた。

「すまない。今夜はお前を巻き込みたくなかつた。でも、もう、終わつた。俺たちが勝つたんだ。」

「凌介様……」

ぽとぽと落ちる涙もそのままに、私は顔を上げた。月明かりの下で、優しく見つめる黒々とした瞳。向こうでは、真咲様と水杖が寄り添つて立ち、こちらを見て微笑んでいる。

大勢の人たちが支えてくれたお陰で、私は地獄から救われた。そして、降りかかる災難を、全力で払いのけてくれた凌介様……。

胸がいっぱい、言葉にならない。

本当に……本当に、ありがとうございました。

ずっと頭上を覆つていた暗雲が、ようやく吹き払われて行く。私は涙をぐいとぬぐつと、心からの笑顔を、主に返した。

「オヤジどのが、上手くやつてくれたようだな。」

馬を引き、四人で三の丸から長屋に向かつて歩き始めた時、真咲様がほつとしたように言った。

「聞いてもらえるか不安だつたが
と凌介様。

天櫛あまつきを二日間留守にしていたあの時、お三方は本城にて、辺境の激戦区への参陣を上申していたのだった。

個人の嘆願では、とても私の鞍替えを止められないと悟つた凌介様が、考えた末に、現在戦闘態勢にある坂遠城への援軍赴任を申し出たのだと言う。

戦場への異動は、土岐定照様はじめ本城すべての武人が注目する人事だ。名誉ある榮転だが、命がけの任務もある。その対象となつた武人のお旗女を私的に鞍替えさせようものなら、すべてが公にさらされ、非難は免れない。お旗女制度は、連綿と続く長浜の神聖な伝統だった。それを個人の一存で動かせば、下手をすれば反逆の烙印も押されかねない。平素なら見て見ぬふりをされる佐久間家老の岩見擁護も、お旗女に手を出した事が公になれば、もちろん重大な問責の対象となる。

凌介様ははじめ、一番隊単独での赴任を希望していたが、それを知つた真咲様が賛同し、備中守様へと話が上がつた。坂遠城での先陣の名誉は備中守様も望むところだつたようで、以後、真剣に画策してくださいさつたという。

こうして書かれた上申書が、殿の御前で開かれる戦評定で取り上げられて、この度の運びとなつたのだ。佐久間家老に内密のまま御前会議へ持つていいくのは至難のわざだったが、武官の代表、妙法院様の後押しで実現できた。

長浜侍である以上、たとえ私事であろうと家老の命に逆らうこと出来ない。しかし凌介様は、公の場で、自ら死地に赴く意思を示したことで、理不尽な上意を跳ねのけたのだ。武人としてのこの提案は、さすがに文官上がりの佐久間家老の意表を突いた。まさか一

足軽隊長が、抗議の切腹以外の形で命を賭けてくるとは、思つても
いなかつたに違ひない。岩見は無役のままだつたが、一度放逐され
た坂遠城に彼が赴任し直すことなく、偶然ではあるが、私たちは
あの毒牙からも離れることができる。

『あるお人に、勧められたのよ』

岩見の謎の言葉が小さな気がかりとして心に刺さつてはいたが、
私は敢えてその記憶を打ち消した。今は前だけを見よう。誠心誠意
ご奉公に励み、私を救つてくれた大勢の人たちに応えるのだ。

「朝芽」

傍らを歩く凌介様が、不意に改まつた声で私を呼んだ。

「はい」

私も、真摯な瞳を向ける。

「戦禍のただなかにある坂遠城では、こことは桁違いの厳しさがあ
る。命がけの奉公になるかもしれない。……それでも一緒にきてく
れるか?」

凌介様の言葉に、しつかりうなづく。

「どこまでも、お供させていただきます」「決ました」

凌介様は明るく言つて、ぐつと私の肩を抱き寄せた。

「さあ、行こうか。新しい任地へ」

優しく照らす月明かりの下で、凌介様が元気よく声を上げる。そ
の目は既に、遙かな戦場へと向けられていた。

続く

高砂備中様率いる天櫻軍の長柄部隊が、辺境の城、坂遠城さかとおへと進軍する日がやつてきた。

つだるような猛暑もようやく峠を越え、朝に夕に秋の気配を感じられるようになつた九月半ばのことだった。

出発がこの時期まで延びたのは、ひとえに稻の刈り入れを待つていたためだつた。天櫻城の足軽のほとんどが農耕を兼業しており、家に帰れば一家を支える重要な働き手であつた。坂遠城からは矢のようす援軍の催促が来ていたが、城下の収穫が終わるまではと、備中守様が、それをギリギリまで引き延ばしたのだ。後にこのことを聞いた時、私は備中守様の、単に武骨なだけではないお人柄の一端を垣間見た思いがしたものだつた。

その朝、私は夜明け前に起きて、侍長屋で最後の荷づくりと居室の掃除に取り掛かっていた。

床を拭き、寝具を上げ、朝に夕に書物を開いた思い入れある文机に、竜胆の花を一輪活ける。

お旗女として初めて赴任した天櫻城。凌介様にこの部屋に連れてきてもらつたあの日から、何と多くの事が起こつただろう。嬉しかったこと、苦しかったこと。次々と思い出がよみがえり、つい、物思いにふけつてしまつ。

「いけない。急がなきや。」

慌てて自分に言い聞かせる。つづらを開け、紅玉を取り出した。しっかりと肌にくくると、部屋の片隅に揃えてあつた小さな荷物を着物の上から斜めに巻いた。ズシリと重い懐剣を懐に入れると、長

屋の上り口に回り、脚絆の上から草鞋の紐をきゅっと締める。

「朝芽、用意できた？」

背後の声に振り替えると、きりりと旅装を整えた水杖がにつこりと笑いかけてきた。この親友と再び一緒に旅ができる。それはとてもありがたいことだつた。おはよう、と言つて私も笑顔を返す。

「今朝は早くに目が覚めちゃつた。今日でこのお城ともお別れかと思うと、なんだか寂しくて」

「私もよ、水杖」

とりとめもない話をしながら、私は天櫻城の本丸を見上げた。ようやく明るみ出した暁の空の下、地平から上がつてきた朝日を受け、本丸天守がいちはやく金色に輝き出す。

中庭からは、すでに兵馬のざわめきが慌ただしく伝わつてきていた。今日の進発では、高砂備中守様の長柄部隊に、天櫻城の歩兵を加え、更に兵糧、武具を積んだ輸送隊が同行する。

「ねえ、聞いた？」

水杖がちょっと小声になつて話しかけてきた。

「え？ どうしたの？」

「今日の歩兵隊と輸送部隊の指揮を採られる、鞍持左兵衛様……だつ

け。備中様とあまりうまくないんですつてね

「鞍持、左兵衛様……」

聞いたことのない名前だつた。

「私もお顔を見たのは初めてよ。だけどあまり他人の意見を聞かない難しい方、という専らの評判だわ。私たちの主とは直接関わりはないでしきうけど……道中、面倒が起きないといいわね」

私は違ひ普段から幅広くお城で交流していた水杖の情報網は、かなり確かなものだつた。真咲様からの耳打ちもあつたのかもしない。心の片隅に少しだけ不安がよぎつたが、私はすぐにそれを打ち消した。備中守様はそう簡単に他人の意志に動かされるお人ではない。

「朝芽、準備は出来たか。」

中庭に出ると、凌介様が声をかけてきた。凌介様も、真咲様と共に今朝は早くから登城して、いつも胴巻き姿で慌ただしく配下の兵士たちに指示を出していた。「城下にある出石家のお屋敷は、留守居の者に任せてきたと言つ。

「もうすぐ進発だ。ま、合図があるまで一人ともゆづくりしてなよ。……水杖どの、真咲からの言伝いとづてがある。ちょっといいかい」
はい、とかしこまつた水杖に、凌介様は色々と細かい指示を「え
て、すぐに次の場所へと歩いて行つた。

「出石様つて、時々ハツとするくらい綺麗よね……」

不意に私の横で、水杖がため息をついて言つた。えつ？ と、驚
いて振り向いた私に、

「あらつ、違う違う、変な意味じゃなくてつ。……つそ、そう、いつも汗やほこりにまみれて調練されてる武人様にしては、つてこと
よ」

慌てて手を振つた。私はクスリと笑うと
「別に変な意味には取つてないわよ」
と返す。

水杖の言つことが解る気がした。普段見慣れているはずの私でも、凌介様が時折見せるじぐさや表情に、ドキッとさせられることがある。日々の調練できつちり日焼けしている顔も、生来のきめ細やかのせいか、遠目では不思議と色白に見えた。くつきりと二重の大きな瞳に真つ向からのぞきこまれると、訳もなく心臓が高鳴つてしまつ。おもざしだけでなく、すらりと長い指を持つ両の手が、とてもきれいだった。毎日重たい武器を握っているはずなのに、少しも荒れていない。

「そう言えば……

過ぎし日、宿直の天守で傍らに立つた凌介様の、まるで彫像のよ

うな美しさに思わず見とれることもあつたつ。

そう思つた瞬間、にわかに記憶がよみがえり、頬がカアッと熱くなつた。

「あらあ……朝芽。赤いわよ？」

慌てて顔をそむけた私を、水杖がクスクス笑つて覗きこむ。

「やめてつてば」

真つ赤になつて押しのけると、水杖はあはは、と明るく笑つた。

「冗談よ冗談。朝芽の反応見て安心したわ。……さ、そろそろ時間よ。行きましょ」

もう、反応つてなにっ？、とこぶしを振り上げると、水杖は笑いながら中庭の方へと逃げて行つてしまつた。

法螺貝が鳴り響き、斥候部隊、続いて旗さしものを背負つた先触れ隊が動き出す。続いて物々しい武具に身を固め、整然と長槍を立てた凌介様の一番隊、あでやかな赤具足の真咲様の二番隊が進発する。私は馬上の凌介様のすぐ後ろに、徒步で続いていた。お旗女も戦に出るときは具足をまとうが、今日は侍女扱いと言つことで、簡素な旅装のままだつた。

騎乗した備中守様が進み出ると、城内から太鼓と勇ましい鬨の声^{じき}が湧き起つた。見送りの兵士が戦勝を祈つて一斉にこぶしを振り上げ、叫んでいる。わああつ、わああつとその響きが地を搖るがすようだ。備中守様が高く槍を掲げてその声に応えると、一層強い歎声が湧き起つた。

備中守様のあとに歩兵部隊、そして輸送部隊が続いていく。歩兵が厳重に取り囮む中、重々しい荷駄車に乗せられた兵糧や武器などの救援物資が、何台も連なり、がらがらと大きな音を立てて物々しく引かれていく。

その横には、噂の人、鞍持左兵衛^{くらもちさきひょうのすけこれまわ}介是雅様の鎧羽織姿も見えた。

「備中殿、頼んだぞ」

「良い知らせを待つておるぞ」

表門では天櫻城の重臣たちがずらりと並び、口々に励ましの声をかけてくれる。天守を見上げれば、そこでは城主様までが直々に、次々と門を出ていく軍列を見送つてくださっていた。

こうして、朝日に照らされ白く埃の舞う街道を、辺境の城に向かつて、部隊は力強く歩み始めたのだった。

長浜平野を東に進むと、ほどなく、隣国との国境を懷に抱く湖東山地が目前に広がる。標高は低いが、奇岩の多い、こじこじとした稜線が特徴的な奥深い山地だ。高台に登れば、山また山が重なり合つて、はるか遠くの隣国まで延々と続いているのがよく解る。

幾真谷峠いくまだいと呼ばれる険しい峠を越えると、辺りの景色が一変した。荒々しい崖壁が左右に迫り、行く手には険峻な峰々が立ちはだかる。道は険しく、曲がりくねった急な坂の連続だったが、部隊が滯りなく進めるほどには整備されていた。

その頃になつて、天気が崩れ始めた。

灰色の雲が低く垂れこめ、彼方に見えていた高い峰を隠すと、見る間に気温がぐつと下がり、辺りに乳白色の霧がうつすらと漂い始める。

私は、変わらず凌介様の後方に付きながら、時折寄越される伝令から、備中様からの指示を受け取る役目を担つていた。

「そろそろ昼食ひよしょくだつてな」

凌介様が刻々と霧に閉ざされて行く眼下の谷間を見ながらつぶやいた。伝令によれば、この先に小さな広場があり、そこに留まつて腰糧こしがの昼食を取る予定だと囁つた。

「朝芽、地図を頼む」

「はい」

私は用意の地図を主に渡した。馬の歩みを進めながら、凌介様は険しい目をして考え込んでいる。私はそつと声をかけた。

「休む場所が、心配なのですね」

「ああ、「

凌介様は地図をにらんだまま、低い声で言った。

「この辺りはもう国境に近い。俺たちのことば、とうに敵側にも知られているだろう。奇襲が心配だ。このまま立ち止まりずに、一息に坂遠まで進んだ方が無難だらうってね」

「霧も濃くなつてきましたから……」

しばらく考え込んでいた凌介様は、やがて意を決したように顔を上げた。

「朝芽、備中様に伝令頼む。昼食は取りやめ、坂遠城に入ることを優先されるよう」と

「かしこまりました」

すぐに配下の伝令兵に言伝を頼む。休憩を先延ばしにするという面白くない提案だったが、隊下から不平の声は上がらなかつた。刻々と濃くなつていく霧に、足場の悪い初めての山道。兵士たちも不安を感じているに違いない。

しかし、数分後に戻ってきた伝令の返事は、予期せぬものだつた。「備中守様からお言伝です！」このまま予定の地で、昼食にかかるようとの仰せでござります」

「備中殿が？ 確かにそう言われたのか？」

凌介様が訝しげに聞き返す。伝令兵は一瞬ためらつたが、「左様ことづかりましてござります」

一礼すると、すぐに駆け戻つて行つた。

「おい凌介！ 聞いたか！ この先で休憩だとよ」

伝令と入れ違いに、崖道を騎馬で真咲様が駆けこんできた。霧の中に、まるでぱあっと眩しい光が差し込んだようだつた。今日の真咲様は、紫に金地の縫いとりの入つた絢爛な戦服に、深紅の鎖鎧を

身にまとい、頭には金色の鉢金はちがねを巻いている。

「俺も今聞いた。備中様らしくない判断だな。どう考へても危険だつて」

「違うぜ、あいつだよ。輸送部隊のあのうらなりの瓢箪ひょうたんみてえな「ははつ」

真咲様の表現に、深刻な表情を一転、凌介様が吹き出す。

「鞍持殿か」

「そうそう、そのジジイだ。オヤジ殿は反対したんだが、奴がゴネたのよ。飯ぐらいう時間はあるだろつてよ」

真咲様によれば、凌介様と同じ危惧を感じた備中守様が、そのままの進軍を主張したのに対し、輸送部隊長の鞍持左兵衛様が猛反論したらしい。

「食を削れば士気は下がる。霧がなんじや。我が歩兵隊がしつかりと守つておるわ！ 視界が効かぬは敵側とて同じ。戸候を倍にして出せば問題はないじゃろう。それとも何か？ 備中殿自慢の長柄隊は、奇襲部隊一つ跳ねのけられん弱小部隊だとでも申すのか！？」

上役一人の間でかなり激しいやり取りがあつたようだが、輸送兵長とはいえ鞍持様は備中守様と同格の侍大将でもあり、早朝からの行軍で兵たちが疲れていたのもまた事実で、しぶしぶ備中守様が引いたらしい。

「とまあ、そう言つわけだ。なんのこっちゃねえ、瓢箪野郎が一番へばつてるのひ」

「そうか。……ま、結局、休むも進むも俺たちが先頭だしな。」

凌介様は真咲様としばらく真剣な顔で話しあつていたが、やがて目的の広場に入るころ、真咲様は自分の隊へと駆け戻つて行つた。

備中守様（正確には鞍持様）が、昼食に選んだ場所は、進んでいた山道からは少し奥まつた、林の中のかなり広い空き地だった。つるさく生い茂る丈の高い夏草もなく、クヌギやコナラのおとな

しい木々が、低木の茂みを従えて、そこにぽつぽつと立っている。

空き地の一方は、今まで進んでいた坂遠城への山道であり、残る三方はぐるりと高い岩壁に囲まれている。霧は先ほどからだいぶ濃くなってきており、そのそびえたつ岩の壁の上は、すでに見えなくなっていた。

地図によれば、この付近に同じような空き地が一、三か所あり、隊は分断されるが、一度に全員の休息が可能だという。全員が休息を取れば危険は増すが、交代で取るよりも時間は短縮できる。これも、鞍持様の案だった。

長柄一番隊は、空き地の入口に陣を取つた。続々と後続の部隊が入つてくる。輸送部隊の姿も見えた。休息の解放感に満ちたざわめきが起つて、辺りがにわかに騒々しくなる。荷駄を守る歩兵隊の中には、早速陣幕を張り、笑いながら具足を解いている一隊もあつた。真咲様の隊は、見当たらなかつた。どうやら、隣の空き地にいるようだ。

あちこちで火が起つされ、ざわめきと共に、早くも美味しそうなにおいが漂つて来ている。

馬から降りた凌介様に、私は声をかけた。

「では、この場で昼食のお支度を……」

言いかけた私を軽く制すと、凌介様は、整然と並んで号令を待つ兵士たちに、てきぱきと指示を与えた。

「長柄一番隊は、戦闘態勢のままその場で待機。腰糧を少しずつ腹に入れろ。武器を離すな。いつでも飛び出せるようにしておけ」はつ、と兵士たちが声をそろえる。

「凌介様……」

「朝芽も少し休め。他は何もしなくていい。ただ、しつかりと、周りに眼を配っているんだ。すぐ、動けるようにな」

「解りました」

私は、ここで初めて主の意図を理解した。凌介様と真咲様は、休

憩を取るふりをしながら、不慮の事態に備えて、独断で待機することを決めたのだ。周囲が休憩ではしゃいでいる中、疲れきっているだらう配下の兵士たちには厳しい命令だつたが、ここでも不満の声は一つも上がらず、皆がその場に待機したまま、黙々と腰に縛り付けた携帯食料を口に含んでいる。異様なほど張り詰めた空気が、この一番隊の上だけに漂っていた。

「朝芽」

不意に凌介様が、私の方に強い瞳を向けた。

「はい」

「この先何があつても、絶対に俺のそばを離れるな。だが、万が一はぐれた時は、お前はすぐに戦場から離れ、坂遠城へと間道を走れ。この霧だ、戦場さえ抜ければ逃げ切れるだろ？」

いつになく真剣なその声に、思わず私はこくりと頷いた。事態は、それほど切迫しているのだろうか。霧の中からは、まだ、何の気配も伝わってこない。

その後も、時折兵士たちに眼を配りながら、凌介様は腰糧も口にせず、じつと背後の崖の上を見ていた。そこはすでに深い霧の中にあり、眼を凝らしても、何も見えない。広場は温かなにおいと兵たちのざわめきで満ちていたが、周囲の岩壁には、しんと冷たい沈黙の帳が垂れこめている。

そのにぎやかな空氣を打ち消すよつて、不意にぶるつと寒氣が走つた。

まさに、その時だつた。

「……来た！」

崖を見つめていた凌介様が鋭く叫んだ。

「えっ？」

振り向く間にも、凌介様は槍をひつつかみ、待機する一番隊の前

に走り寄つて怒鳴つた。

「崖の上に敵！ 全員迎撃用意！」

おうつと叫んで配下の足軽たちが立ち上がつたその瞬間！

「わああああ―――っ！！

すさまじい鬨ときの声が響き渡り、まるで羽虫ふなばしがわき出るかのように、霧の中から黒い具足に身を包んだ隣国舟原軍の奇襲部隊が、驚くほど速さで高い崖を駆け降りてきた！

続く

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1247ba/>

長浜 戦国時代

2012年1月14日19時52分発行